

欠

MISSING

近世の教育

第六章 文藝復興時代及び宗教改革時代

第一節 中世紀と文藝復興 文藝復興は十五世紀の後半に起りし事實なるが、其起りし次第を知らんには、先づ中世紀との關係を明にせざる可らず。佛蘭西のコムペーレ是れを説明して曰く中世紀の教育は身體を除き厳しく取扱ひ、精神を除き狭隘に訓練し、心身に對し甚だ抑壓的の傾向を取りしが、そが反動として廣く且つ寛大なる教育を見ざる可らず。廣く寛大なる教育とは、衛生と體育とに相當の注意を拂ひ、從來三段論法の虜となりし智力を自由にし、論理學の言語上の運用に代ゆるに實科的の研究を以てし、言語の代りに實物を尊び、理性と言ふ如き人の一能力を發達せしめ、人を論理の機械となさずして心と體と、趣味と智識と、情と意とを兼備する一の完全なる人物を養成する處の教育を言ふと。斯くの如く中世紀の教育は、宗教と古典とを以て人を縛り、人を餘り嚴格に教育したるなり。既に中世紀の末には科學研究の精神、之れが反動として崇まれ、殊に十四世紀に、宗教に對

しては、ホーランドのグロートが協同生活會を組織して、獨逸に其勢力を及ぼし、當時の宗教に反抗し、貧民教育に力を盡すあり、古典に對しては伊太利に、ゲンテ、ペトラルカ、ボッカッチ、英吉利に、チウサー、出て、各、國民文學を唱道するあり。斯くの如くにして起り來る新精神は抑へんとして抑ゆべからず、之れを文藝復興の豫備とす。即ち文藝復興は一面中世紀の反動として起らざるを得ざりし現象にして、單に文藝の復興とのみ見る可らず、歐洲人の自由なる思想が中世紀の間に次第に教育せられて、近世史を作らんと活動し初めたる現象と見る可きなり。此現象が單に文藝の復興に止らず、十六世紀に至り宗教改革を呼び起し、十七世紀に自然科學を成立せしめて初めて其運動を終はり教育に於ては之れにより舊教育を破りて新教育を起せり。

第二節 文藝復興の狀態 文藝復興は千四百五十三年、これ迄露西亞並に東方諸國に影響を及ぼしたる東羅馬帝國の首府コンスタンチノブルが土耳其人の爲めに亡ぼされたるを機會として起りしなり。此滅亡に由りて希臘、羅馬、ヘブライの宗教、文學、哲學、科學にして、從來中世紀の歐洲人に知られざりしもの、一時に暴露

せられ、而して此地に在りし古典學者は袖を連ねて、一先づ西羅馬のありし當時の伊太利に其匿れ家を見出し此所に移住するに至れり。此れより先き、伊太利にはダンテを始め幾多著名の文學者ありて其文運大に興り、加ふるに其保護者も又少なからざりしより、此地に逃れ來りし古典學者は其保護を得て盛に古典の研究を爲し、又之を一般に推奨し、古文書は蒐集せられ、翻譯は試みられ、學校は立てられ、圖書館は設けられ、宛然學問の中心地となりしより、遙かに英吉利、佛蘭西、獨逸等よりも好學の士來り學ぶもの少なからず。

文藝復興は一見すれば古典の研究に止まるが如き觀ありと雖も、其古典の研究たる、實に古代の思想を渴望し古代の生活を欣求するに出でたるものにして、其古代の思想と生活とを知らんが爲めには勢ひ語學の助けを借らざる可らず、之れ古典が熱心に研究せられたる所以なり。當時の歐洲人は形式的の宗教を厭ひ、死せる古語に飽きたり。而して彼等がその不滿の念を慰藉し得るものは實に新なる見地より古代のヘブライ人、希臘人、羅馬人の思想と生活とを解して之を欣求するに在りき。否、それのみならず、是等ヘブライ人、希臘人、羅馬人は歐洲の社會組織及び

其個々人の教育、其の宗教、其の哲學、其の文學の根底を置きたるものなり。即ち茲に其源泉に溯りて其真相を理解し會得せんと務めたるは必然の事と言はざる可らず。換言すれば古氏之思想と生活とが今一度新なる衣裳を着けて歐洲人に見えたるなり。従つて此時の古典の研究は、只宗教を説明せんが爲めの方便として用ゐられたるにあらず、又死語として目せられしにもあらで、古人の遺せる宗教、哲學、歴史、文學等に就き之れを研究して其精神に分け入り、是を活現し來りて、之と理想的の交際を結び、從來の抑壓的の生活を脱離して、希臘羅馬の古風に歸り、希臘羅馬風の一の完全なる人品を造らんとするに至れり、是に至りて文藝復興は自ら一種の教育理想を産み出すに至れり。名づけて人文主義 (Humanism) といふ。

文藝復興を助くる種々の事情は折良くも當時現はれ出でき。即ち亞弗利加喜望峰の回航、亞米利加發見、紙、印刷術、及び火藥の發明等にして是等は何れも當時の人の識見を廣くし、人智を廣め、進んでは社會制度を改めたり、十五世紀の了りに封建制度は倒れて大王國は起り、社會の狀態殆んど一變せり。文藝復興も此の變動の機運に乗じたる一運動にして、此れ等の諸事情の助けに由りて其運動は全歐洲に

擴がり、殊に獨逸に於ては之が結果として宗教改革を企つるに至れり。宗教改革は新教の起源たると共に又新教育の起源となれり。

第三節 伊太利に於ける人文主義 文藝復興は如斯にして起りしものなるが、其運動の中心地たる伊太利に於て教育に如何なる影響を與へしかを見るに、大學を初め一般人民の間に昔の希臘羅馬の思想と生活とを味ひて眞の修養は基督の生れたる前にも存し而してそは人品修養に缺く可らざるものと認められ、又ヘブライ語研究の結果、基督教の眞意義を了解し、當時の法王又は教會が教ふる處は必ずしも基督の心にあらずといふ事實發見せられ、批評的に舊新兩約全書を解釋せんとするの勢ひ盛んになり、其結果當時の宗教を攻撃するに至り、遂には宗教其者に對して破壊的態度を取るに至りたれば、必然宗教の勢力衰ふると共に信仰の念を少くし、且つ希臘羅馬の放逸なる弊風をさへ再現するに至れり。但しそは一時の弊害といふに過ぎずして悉く人文主義の功績を没すべきものにあらず。否寧ろ此運動に由りて自由討究の精神は勃然として起り、從來僧侶の專有なるかの如き觀ありし學術が一般人民の間に廣まり、教育の範圍を擴大し、人文進歩の基をな

せり。

第四節 英佛獨に於ける人文主義 轉じて英佛獨を見れば伊太利に留學せし者が歸國して盛に人文主義を鼓吹するありて、後來大學或は大學豫備校に於ては主として拉丁語の研究行はれしが、新に希臘語、ヘブライ語の研究盛となり、聖書はヘブライ語の原書に依りて直接に研究せられ、古典も正確に其意義を理解せられたるのみならず多く印刷に付せられ、かくして容易に一般人の間に行はるゝに至れり。但し是等の諸國にては伊太利に於けるが如く輕佻ならず、又其如く無信仰にして不道德に陥る事なかりしが、其古風を慕ひ、基督に還りて眞の信仰を得んとする熱心は之に譲らず、英國にありてはオクスフォード大學、佛蘭西に在りてはパリ大學、獨逸にありてはハイデルベルヒとチュービンゲンとの二大學、其運動の中心となり、殊に獨逸に於ては二人の有名なる古典學者アグリコラ及びロイヒリン出で、之が指導者となり各々教育に盡力せり。

アグリコラ(一四四三—一四八五)はハイデルベルヒ大學に於て古典を教授し専ら力をヘブライ語の研究に注ぎ、宗教の眞意義を發揮することに務め、教育上に於ては當時の教授訓練が甚だ苛酷にして學校は殆んど牢獄の如き觀あるを批難し、學校に於ては兒童を樂しましめつゝ、其判断力を養成すべき事を主唱せり。ロイヒリン(一四五五—一五二二)も又古典學者にして、同じく、ヘブライ語に通じ、チュービンゲン大學の教授となり、大に宗教の自由討究を主張し、學生に對し、新しき信仰を鼓吹せり。宗教改革の任に當りたる、ルーテルは大に氏の感化を受けたり。

此二人と相並びて、此運動の指導者として數へらるゝはエラスムス(一四六七—一五三六)なり、氏はホーランドのロッテルダムに生れ、英吉利、佛蘭西、獨逸等に遊び、又伊太利に學びて、自ら世界の市民を以て任じ、古典學者として、新しき信仰の鼓吹者として、當時の歐洲諸國に重きをなせり。氏曰く、信仰の眞の意味を了解せんには、そが初めて世界に表はれたる原始の記録に基づきて理解すること必要なりと。斯かる見地より氏は深くヘブライ語を研究し、精密に是を希臘語に翻譯し、當時の人に基督教の眞面目を示せり。此以前聖書の拉丁語の譯書は一般に行はれしも、希臘語の譯書は殆んど行はれ居らざりき。氏が抱く宗教上の意見は、氏の言に「吾れ清き心を持ち、吾が疾妬、吾が憎惡、吾が傲慢、吾が貪慾を去るにあらずば眞に神を

見るべからずと言へるに徴すべし。氏は當時の古典の教授が唯摸倣に馳せ、生命なく感情なく、毫も著者の精神を看破せざるを攻撃して、シセロを讀まば須らく其精神を摺み、是れと同一脉となり、シセロを地下に呼び起し來りて其思想を今日に活躍たらしむ可しといへり。蓋しよく文藝復興の精神を摺み同時に宗教改革の先驅をなしたるものなり。

第五節 文藝復興と宗教改革 文藝復興の精神は、希臘羅馬の古風に還り、同時に基督に還りて完全なる人品を練り、正しき信仰を得んとするに在りて、一種の自由討究の精神に動かされたる運動なり。當時の法王の言ふ處、教會の教ふる處に満足せず、吾が心を清くして神の子基督の心に接せざる可らずとなすもの、之れ文藝復興が産せし處の新しき信仰にして此信仰が當時の教會と衝突して起りしもの、即ちルーテルの宗教改革なり。文藝復興は自から宗教改革に對して其道を開けり。

第六節 宗教改革時代の教會と學校との状態 宗教改革の真相を理解し、其教育に及ぼせる大なる影響を知らんには十六世紀の初めに置ける、教會と學校との有様を知らざる可らず、當時の僧侶は學問を怠り、其附屬學校は放任せられ、迷信と無學とは多數の人民を支配せり、千五百三年獨逸の一神學者の紀錄に曰く、神學の研究は無用とせられ、基督の福音、長老等の優れたる言は調べられず、異教徒さへ嘆美せし基督教の徳義は消え失せ、従ひて教會の勢力は傾き、僧侶は輕蔑せられ、僧侶の不徳は心ある父兄をして其子を教會と學校とに送るを拒ましむるに至れり。彼等僧侶は聖書の研究を怠り、之を味ふことを忘れ、其職務に忠實を缺き、其教會に金を捧ぐるものあれば之を歓迎し、自ら快樂に耽り、一般人が批難の聲を發するも、毫も意に介ざるに至れりと。

宗教改革の任に當りたる、ルーテルが、千五百二十八年ザクセンの教會と學校とを視察せし後、宗教問答を著はし、其序文に、余が今回視察者として教會と學校との哀れなる状態を目撃したる結果は、遂に余をして簡單なる形にて基督教を知らしむる爲め、此書を作らしむるに至れり。余が視察せし地方の有様は言語に絶せり。普通の人民殊に村落の人民は全く基督教を知らず、僧侶さへ眞に基督教を教ふるに足るものなし。而も彼等は基督教徒と呼び洗禮を受け、而して信仰箇條をも十

誠をも知らず、恰も道を知らざる動物の如く生活せり。汝僧侶等かくも人民を愚かにせしに就きて何と基督に答へんとするぞと言へり。宗教改革は起らざるを得ず。

第七節 マルチン・ルーテル 文藝復興の論理的結論を握み、又當時の教會と學校との沈淪せるを救はんが爲め、宗教改革を起したる者をルーテルとなす。尤も斯の如き改革的精神を有せしもの獨りルーテルに止まらず、瑞西のツウイングリー（一四八四—一五三二）の如きも其一人なるが、先づルーテルを以て其の首領となすべし。

ルーテルは千四百八十三年、獨逸のアイズレーベンに生る。父は礦夫也き。氏が生るゝや間もなく、マンズフェールドに移れり。十四歳の時家計少しく裕となりしより、大學に入るの目的を以てマグデブルグに行き、其豫備を爲し、が學費に堪へずして、此所を退き、親戚を便りて、アイゼナッハに行けり。此所にて氏は自ら學資を得んが爲め歌を歌ひて街道を流し居たりしが、其清らかなる聲、當地豪家の夫人ウルスラ、コツタの耳に止まり、氏を其家に引きて學に就かしめ、十八歳にしてエルフ

ルト大學に入れり。此大學は文藝復興の一の中心たりき。父は氏に命じて法律を研究せしめんとせしが、氏は宗教心強かりしより、其大學卒業の後、年二十二の時、僧侶となりて一教會を受持ち、大に精神上の修養をなせり。千五百八年ウイテンベルヒ大學の宗教及語學の教授として聘せられ、職にあること二年にして宗教會議の爲め羅馬法王の宮廷に赴き、其腐敗せる様を目撃して愈々宗教改革を企つる志を決し、間もなく法王より贖罪證を賣らしむるに至り、憤慨の念遂に禁ずる能はず、己が信仰個條を告白し、並せて當時の宗教を批難せる九十五ヶ條の宣言を草して、大學教授の傍ら己が司りける教會の門に張れり。これ即ち千五百十七年十月末、日の事なりき。法王レオ十世是れを見て獨逸皇帝に命じ、ザルムスに會議を開き、ルーテルを呼び出して、詰問し、其運動を中止せしめんとせしも、氏は「聖書に由りて余が説の誤りなることを證明せらるゝにあらずば、我が良心に照して此運動を中止すること能はず、茲に余は立てり、其他を知らず、神よ照覽あれ」と言ひて服せず。ザルムスより歸るや、氏が友、氏の身の危きを憂ひ、氏をウルツブルグ城に幽閉せり。此幽閉九ヶ月の間に氏はエラスムスの希臘語譯の聖書を獨逸語に翻譯する計畫

に着手せり。此以前氏は聖書を國語に譯して何人にも讀ましめんとし、貧民窟又は市場に入りて俗語を研究し、平易の言語に聖書を譯する準備をなし居たりしが、今幽閉の閑を得て愈々其業に着手し千五百二十四年より十年間に是を譯し了れり。此翻譯、獨逸語の標準語となり其流行非常に盛になり、靴屋の職工に至る迄も皆眞理の源として是れを其ポケットに入れざるを耻とするに至れり。氏常に言ふ「一般人をして神の心を知らしめざる可らず」と。氏は他くまで人民の教育者を以て任じ、初めて聖書の譯を出したると同年に、國君及び都府の施政者に檄を飛ばして普通教育を起す可き事を勸告せり。其熱心に感じ、翌年マンスフィールド侯爵は氏が郷里に小學と中學との模範學校を起さしめたり。此學校は後にあらゆる新教國の學校の模範となれり。かくて氏は宗教と教育との爲めに働きて、千五百四十六年に死せり。今に至り、獨逸の小學校は、皆其創立者の紀念として、氏が肖像を掲ぐ。

第八節 新教と教育 ルーテルが唱へたる信仰は、是れを當時の宗教に反對して唱へたるよりプロテスタント教と呼び、又新教とも呼ばる。氏は敢て基督教其者に反對したるにはあらず、文藝復興の精神を捕へて基督に歸れと叫び、基督教に新生命を與へんとしたり。何れの國の宗教史にも見ゆる如く、教義の解釋、儀式の遵奉を以て宗教と見做し、己が宗教心を練ることを忘るゝに對し、そが反動として、其教義、儀式を破り、己が宗教心其物に信仰の根底を置かんとして、改革なるものゝ起ると等しく、當時は恰も其改革の時期に迫りたり。故にルーテルは只簡單に二ヶの信仰を基として宗教改革を呼號せり。曰く、人は只信仰によりてのみ其罪を許さる可し、曰く、聖書のみ宗教的信仰、宗教的行爲の標準たるべしと。故に新教にては神と人との媒介者は唯一の基督のみにして、其他何人を要せず、人各々其心清く其信念堅固なれば、直ちに神を見るを得となす。即ち新教は聖書と人々の良心とを以て宗教的生活の案内となしたるより、必然宗教的信仰を得んが爲めに、個々人は聖書の研究を務むべく、亦是れが爲めに智力を開發する必要を感じ、新らしき教育を生ずべき源をなせり。宗教改革は其必至の結論として、教育の改革を伴ふに至れり。一般人を教育して、神の心を知らしめんとするは、氏が畢生の主張にして、斯くの如くして氏は宗教改革家たると共に、普通教育の創立者となれり。

氏が普通教育に意を注ぎたるは、主として正しき宗教心を得しめんとてなりしが、又氏自身の経歴と、當時普通教育の沈淪したりし事とが、氏を奮ひ起たしむる本とはなれり。氏貧家に生れ備さに貧民の生活状態を知り、學校制度の庶民に不便利なるを慨して自ら貧民の救済者を以て任じ、此不幸なる庶民の子弟を教育することの大切なるを悟り、千五百二十四年獨逸各國の君主及び施政者に檄を傳へて「教會の爲めに學校を設くる必要は、兎も角、他に學校を設立せざるべからざる必要あり。國家社會は其繁榮を計るが爲めに、能く身を修め家を齊へ、國を治むる所の完全なる男子及び善く家を治め子を育つる所の完全なる女子を要するにあらずや、而してかゝる男子は男兒より、斯かる婦人は女兒より成るとせば、此目的よりして學校を設立すべし」と言ひ、又「國家は家族より成るを以て、其家族にして能く其子を教育せざる時は、市町村も發達せず、國家も遂に亡ぶに至るべし」と言ひ、殊に都府の施政者に對しては、當時有力なる都府が、其城壁、市場、家屋、道路の完全に力を盡して教育を忘るゝが、是等のもの如何に整ふも、愚者權を弄せば、都府は荒敗すべし。都府の最も大なる實は能く教育せられたる市民を有するに在り。斯かる市民を

有するに至らば、其都府に對し善なる事をなさざるはなし」と云ひ、其國家都府が經營する學校は公費を以てすべく、猶兒童を良く感化せんが爲め長く學校に留め置くを要する上より、圖書館を學校に附設することも必要なりと勸告せり。かくて新教は自ら普通教育の父となれり。

新教は個人の自由と威嚴とを重んじ、知見を開き、心を清くして神を見るべしと唱ふる點に於て舊教と反對せしのみならず、又現世に對する態度につきても反對せり。舊教は概して天國を欣求して現世を輕んぜしも、新教は基督の教を現世に實行するを本旨となし、清淨、謙遜、節制、正直にして愛情深く、現世の勤めの上に常に神の心を奉養すべきを唱へ、人を以て此世に於ける神の使なりとせり。随つて吾人の知識を開發し、天地自然を研究し、其法則を應用して利用厚生、世の道を計るを以て神の榮光を現はす所以と見、從來の宗教々育に對して著しく社會的の傾向を帯び、又人の性情の上に教育の基礎を置けり。斯くて新教は新らしき學問を採用し、科學の友となり、科學と宗教とは何等反抗すべきものにあらずとし、文藝復興の精神三たび轉じて科學に向へり。氏がアイヌスレーベンの學校課程には第一宗教、第二

拉丁語及希臘語、第三歴史、第四數學、第五唱歌、第六体操とし、自然科學と實業とは是を一科として説かざるも、他科と合して教ふべしとなし、中世紀に於て尊びたる所の七個の自由藝術の價値を轉倒せり。其教授法に至りては、務めて之を楽しくすべきを主張し、又當時の訓練の苛酷なるを難じて、快活と活潑とは食物と等しく兒童に大切なりと言ひ、且教職の貴重なるを説き、自らの經驗に由り、余は説教者たるか教師たるかの取捨に惑ふ、甲者として固陋なる成人を化するよりは、力尙微弱にして如何様にも矯め易き少年の教育の途に容易にして有効なるを思ふと言ひ、余もし宗教家たらずば教育家たらんと云へり。

要するに新教は舊教が外部の教權に服従するを宗教の要と認めたるに對し、良心を根據となし、舊教の出世間的なるに反し、世間的とし、従つて教育も中世紀在來の方針を改め、其目的、方法、制度に於て皆新ならんことを要求せり。氏が宗教を教育の根本と爲すは從來と同様なれども、之れを以て出世間的の者とせず、従ひて教育の材料、方法を改め、又制度に於ても、之を公共事業とし、從來教育制度の中心が一は法王、他は國君と二様に分れしを一に國君に集んとして國家教育の基礎を立てた

り。蓋し氏は國君は基督の意を躰して此世を經營す可きものとの極めて廣き見地に立ちしなり。埃太利のデッテス評して曰く、ルーテルの教育意見を見れば凡ての教育問題に觸れ是れを今日の理想と爲すも妨げずと。

第九節 古典中學の設立 但しルーテルが主張せるごとき普通教育は當時の狀態よりして、急に起らず。次の十七世紀に至りて漸く氏の意見は行はれ初むるに至りしか、當時直接に新教の影響を受けしものは、大學と中學となりき。人文派及び宗教改革者は、在來の大學を據處として、文學、宗教の眞意義を説きたるのみならず、亦其手によりて新に大學を經營せり。獨逸のストラスブルグ、エナ、ギーセン、キール及び瑞西のデュネツ大學の如き其主なる者なり。之と共に是等宗教改革者の手に由りて古典中學設立せられたり。先きに中世紀の所に言ひし如く、大學が中世紀の末に起りしより、其豫備校必要となり來りしも、其豫備校は宗教學校を便らざるを得ざりしが、文藝復興し、宗教改革せらるゝに至り、其新精神に従ひ、獨逸に先づ組織立ちし豫備校を起したり。名づけて、古典中學校(Gymnasium)といふ。其設立に盡力せしは、メランヒトン、スタルムの二人なり。

メランヒトン一四九七—一五六〇はルーテルと等しく、ウツテンベルヒ大學の神學、語學の教授となりて、意氣相投合し、ルーテルを助けて、宗教改革の事業を成就し、殊にルーテルの教育事業を助けたり。ルーテルは宗教改革に忙しく、全く教育に其身を委ねること能はざりしが、メランヒトンは生れながらの教師にして、大學教授として其感化を及ぼしたる外、希臘、拉丁の文法、論理學、修辭學、物理學に關する教科書を著はし、かねてザクセンの學校及び教會の監督を務めたりしより、學校制度案を公にし、學級を三つに分ち、第一年級にては國語にて、讀書、習字、讚美歌、信仰個條を教へ併せて拉丁語の初歩を教ふべく、第二年級には、拉丁文法、拉丁文及び宗教を教ふべく、第三年級には高等の拉丁文法、修辭學、論理學を教ふ可しとせり。此意見は其儘には實行せられざりしも、之を基として氏の教育を受けし人々、獨逸の各地に古典中學を起せり。

スタルム(一五〇七—一五八九)は、獨逸にて十分なる教育を受けし後、巴里にて神學、語學を研究し、佛蘭西の宗教改革者カルザンの感化を受け、三十歳にして獨逸、ストラスブルグの古典中學の校長として聘せられ、爾後四十年間、此位置の爲めに盡瘁

せり。此學校は十學級に分ち、六歳より入學せしめ、十個年にて卒業せしむる組織にて、課目は拉丁語、希臘語、修辭學、論理學、宗教及び音樂にして、當時に於ける古典中學の模範と稱せられ、其生徒は英、佛、丁、和等の諸國よりも來りたり。此學校の盛大となりし結果、ストラスブルグの町に「新アゼンス」の名を冠せしむるに至れり。氏が中學教育の目的は敬神、智識、辨舌の三者を一人格に纏めたる如き人物を養成せんとするにありき。

英國に在ては、ジョン・コレット(一四六六—一五一九)伊太利に於て、文藝復興の精神を吸ひ、歸りて龍動のセント・ポール寺の監督となり、千五百十二年、此寺に附屬して一の中學校を興し、ウリヤム・リリーを招きて校長とせり。リリーはスコラ哲學を排して、大に希臘語を奨勵し、自ら新教科書を編みて、古典的教育を施したり。現今英國有数の中學として立てるイートン、ラッグビーの如き中學は之と共に起り、後に是れを公共學校(Public school)と稱せり。イートンは十五世紀の末、ラッグビーは十六世紀の末に起れり。蓋し此時英國は所謂エリザベス朝にして、古典研究の熱大に高まり、從ひて古典教育大に尊重せられ、エリザベス女王の侍講ローチャ、アッシュムは、學校

教師を著はし、希臘語、拉丁語の教授法を論述せり。此書は實に英國に於ける教育學に關しての第一の著書と見做さる。

第十節 佛國に於ける新教育思想 獨逸と英國とに於て從來の宗教文學に新生命を興へ、以て教育を改革せんと、運動起りしと雖、尙宗教と文學とを教育の根底とするを免れざりき。即ち中世紀傳來の教育を破壊せんと試みながら、猶之れを改革するに止まり、新教育主義を以て之れに代えんとする迄には進まざりき。然るに佛國に於ては、是等宗教もしくは文學を主とする教育思想に對し、自然科學を根底として教育すべき實科的の教育を重んじ、記憶力を練るよりも、推理、判斷の力を練ることに着眼して、從來の教育方針を覆さんと試むる運動起れり。此運動に與りて力あるものを、ラベレー及びモンテインの二人とす。

ラベレー(一四八三—一五五三)は僧侶にして又科學者なり、兼ねて文學に通じ、ガルガンチュアと稱する教育小説を著し、其意見を發表せり。ガルガンチュアは此小説の主人公にして、初めは中世紀風の生命なき宗教文學を以て教育せられたれば、判斷力は發達せず、其品性は強固ならざる人物なるが、茲に新教育思想によりて教育せ

られたるユーデモンあり、彼は意志強固、思考精確にして、心事公明正大、舉動活潑なり。ガルガンチュアの父、彼を見て、自から子の教育に誤ありしを後悔し、新教育思想を抱けるポノクラテスに托して教育せしむ。ポノクラテスは新教育の思想を以て其體育、智育、德育につき、全く新なる見解によりて、之を教育し、體育に就きては體操を課し、清潔法を行はしめ、角力、游泳の如き遊戯を獎勵して、其體力を練らしめ、智育に於ては希臘語を學ばしむと雖も、是れと共に彼れが智識の新世界と稱する自然を學ばしむ、即ち自然物を觀察し、試験し、其秩序を理解せしむ。此の爲めには時々ガルカンチュアを山野に連れ行き、自ら自然を實驗せしむ。斯くして勉めて其判斷力を練らしめんとし、其方法としては、從來の如く兒童を抑壓することなく成るべく彼をして楽しく學問せしめ、學問と遊戯とを結びつけ、務めて趣味を有せしめ、德育に就きては僧侶の説教を聽かしめず、聖書を取りて直接に神の意志を知らしめ、敬虔の念を起さしむ。聖書を讀むと共に、此宇宙の廣大なる而も微妙なる神の業を觀察する事に山りて、神を敬愛する情を起さしめ、其全身を神の攝理に委ねしむ。かくして彼は全く完全なる一新人物となるを説きしものなり。即ち中世紀教育の反

動として、文藝復興、宗教改革の精神を極端に運び、以て科學的教育の必要にして且つ有効なることを唱道せしものなり。

ラベレーが死せしとき、モンテイン(一五三三—一五九二)は二十歳の青年なりき。氏はポルドー府の人にして、家門高く、夙に拉丁語、希臘語に通じ、二十一歳にして此府の議員となり、程なく此府の知事となりしが、其性質公共事業に適せざるを知り、文學を以て終生の業となし、あらゆる事に趣味を有し、時勢の批評家として其位置を占め、自ら古風の教育を受けたるに係らず、當時の教育が古風に染みて古語の研究に幾多の歳月を費し、而して其得る所は幾何もなきを譏り、先づ國語を理解し、次に隣國語を知らしむるこそ此世に處する上に必要なれと云ひ、又教授法が見童の自己活動に訴へず、其判断力を練らず、唯に書籍上の知識を多量に注入するを批難し、是の如きは單に心力を疲勞せしむるのみとし、訓練法に就きても鞭を以て善に就かしむるを止めよ、彼等をして耻を知らしむれば自ら善に進むべしと云ひ、教師は、嚴格なる溫和を有すべしと説き、尙此の實世間を教授訓練の實物教授の場所たらしむべしとて、此世間は吾人の反射鏡にして、絶えず、吾等に其當に爲すべき事を

示す所の一の大なる書籍なり、此書籍によりて、法律習慣を學び、判断力を養ふ、此世の國々の盛衰興廢、此世の人々の是非善惡、皆教育の材料たらざるはなし、否、當に現今の世界が吾人を教育するのみならず、吾人の前に葬られたる幾億万人のなしたる手本は、善の爲すべく惡の爲すべからざるを悟らしむと言ひ、品性あり品位ある實際的の判断力の確實なる人を造ることを目的とし、ラベレーと同じ立場に立ちながら、ラベレーよりは、教育を實際社會に觸れしめざるべからざることを主張せり。

以上の二氏は從來の人文主義、形式主義に反對し、自然、研究、實物教授を主張したる點に於て、教育史上、實科主義を唱へたるもの、率先者なりと稱せらる。而して此の實科主義は十七世紀に於て英吉利のロックに傳はり、新教育を起さしむる基となれり。

第十一節　デジュイット派　上來述べ來りしが如く十五、六世紀に於ては、從來の宗教に對する反動起りて、新教唱へられ、新教は其の勢力を擴張せんが爲めに教育の力を借るの必要起り、従ひて教育の改革に力を盡したるが、過去一千年間は歐洲人の

宗教道徳を支配したる舊教徒は、徒らに手を束ねて傍觀すべきにあらず、即ち起ちて新教に對し、舊教の教育を振興せんと企てたるの徒をデジニット派となす。其の起源は十六世紀の末にありしも、其事業として見るべきは、十七世紀に盛なりしが故に、十七世紀の條に於て委しく述ぶる所あるべし。只此所には新教徒が獨逸を中心として其教育事業を營みたるに對し、舊教徒は佛國に中心を置きて、其教育事業を起せる事を注意するに止むべし。而してかく舊教の根據地たる佛國にラベレイ、モンテインなどの新教育思想の起りし如きは、此國民の性質として、極端より極端に赴く處あるによる。

第十二節 批評 教育の目的に關して先づ批評を試みんに此時代(十五、六世紀)は所謂過渡期に當り、新舊の思想相混雜し、教育の目的も複雑となり、人文主義を取るの徒は、希臘、羅馬の古風に歸らんと、其の人生觀を抱きて、古人の如き人物を養成せんとし、宗教改革家は自己の良心を本として立ち、實世間に活動し、以て神の榮光を現はす如き人物の養成に勉め、而して舊教徒は從來の出世間主義を守りて、是れに反抗せんとす。一言の下に當時代の教育目的を批評する事難しと雖も、概して是れ

を言へば、中世紀に反し、人の感情、人の智力を練り、以て實世間に働くが如き人を造らんとしたるものと見ることを得べし。即ち從來の宗教教育、文學教育に反抗して、科學的教育の立場を取り來れりと言ふを得べし。而して是を社會的方面より見れば、中世紀の如き世界主義を捨て、國家主義に歸り、其國家主義は希臘、羅馬のそれとは異なりて國民のすべてを含めて其國家に盡すが如き人たらしめんとする國家主義を取りしものと見るべし。此傾向は次の世紀に入りて一層明かに現はる。

教育の方法につきて言へば、教授の材料として實科的の科目加はり來り、教授法を快活ならしめんとし、訓練に於ても、從來の苛酷なる風を改めて、自然に善に導くが如き方針を取らんとするに至りしも、しかも詳に兒童の心理を究め來りて、教授訓練の方法を改むるが如きは、未だ此時代には發達せざりき。

學說につきて言へば、ラベレイ、モンテイン等が實科主義を唱ふる所ありしも、文學的に之を説くに止まり十分科學的の根據より新教育思想を探求せんとする迄には進まざりき。

制度につきて見れば、ルーテルに依りて、普通教育を起すべく、又教育の權を國家の手に纏むべき意見唱へられたるも、猶實際に現はるゝには至らず。次の十七世紀に入りて、之を事實に現はす基を開けり。而して古典中學が此時代に創設せられたるは特記し置くべし。

第七章 十七世紀の教育

第一節 總説 十六世紀に宗教改革ありて新教起るや、是の舉に同情する君主の出てしと共に又反對に舊教に左袒する君主も現はれ、宗教の争は政治の争と觸み合ひ、遂に千六百十八年より三十年間に渉る三十年戦争を惹起して千六百四十八年に漸く其決着を見るに至れり。此戦争に加はりしもの獨逸、佛蘭西、和蘭、丁抹瑞典を主なるものとし、殆んど全歐洲之に關し、宗教上の争に政治的の争も加味せられて、さながら修羅の卷を現出せしが、英吉利に於ても宗教に關する内亂起りて千六百八十八年、クロムウエルの革命に終れり。斯くの如き社會の狀態なりしかば、力を教育に注ぐ事十分ならざりしこと勿論なりといへども、かゝる際にも猶教育は發達し、教育制度は定められ、學説は新たに唱道せられ、殊に英、佛、獨には有名なる教育家出て、教育の革新に盡力せり。

ルーテルの主張によりて教育を國家の手に管まんとせしは獨逸の諸州を初めとなす。而して新學説によりて教育を改革せんとしたる者は、英吉利、佛蘭西、獨逸に

起り、宗教改革時代に現はれたる實科的教育を起すべき主張者は英國に先づ起りぬ。之をペーコンとなす。ペーコンの思想は一は獨逸の新教徒にして、新教と科學とを結合せんとしたる獨逸のコメニウスに傳はり、一は自國のロックに傳はれり。ロックは實科的教育の充分有力なる主張者なり。コメニウスの如く新教徒にして新教の精神と科學的教育とを結合せんとせしものに英國のミルトンあり、獨逸にフランクあり、之れに對し舊教を固守して中世紀傳來の教育を經營したるもの佛蘭西に二派あり、共に舊教徒にして一はジュシェイット派とし一はジャンセニスト派となす。要するに此世紀は、普通教育が國家の手に營まるゝ端緒を開き、新教の精神と科學的精神とが結合して新教育を起し、中世紀傳來の煩瑣學派風の教育と舊教の教育とを破らんと試みたる時代なりとす。

第二節 學制確立の着手 國家の手によりにて初めて普通教育令を發したる名譽は獨逸之を荷ふ。即千六百十七年ヴァイマル公爵は、凡ての男女兒、六歳より十二歳迄の者は小學校に入學すべきことを命ぜり。此命令出でたるに倣ひ、ヴェルテンベルヒ、ホルスタインなど教育令を出して小學校を組織し、國家の手にて教師を

命じ、千六百四十五年にはゴーター公爵は學校令を發し、凡ての兒童は六歳にて學校に入り、國語を解し、ルーターの宗教問答を讀み、算術及び唱歌に一通り達するまでは在學せしめざる可らずとせり。但し是等の法令は實際には現今の如く嚴重に實行せられたるにはあらず。

第三節 ペーコン(一五六一—一六二六) ペーコンは英國宮廷の尙書となり、夙に科學的精神を有し、千六百〇五年に學問の進歩と題する書を出して、智識の新原野即ち自然の研究せられざる可らざることを説き、千六百二十年に「新機關」を出し、歸納的論理學を唱へ、從來の如き傳説と教權とに依頼する弊を打破し、一々事實に就て實驗、證明を試むにあらざれば正確なる智識は得べからざる旨を説けり。之に依りて從來忘れられし自然の研究を獎勵し、其自然研究の新研究法を示し、科學的歸納的研究法を紹介したり。但し氏は其思想を教育に應用するには至らざりしが、此思想は獨逸のコメニウスによりて繼承せられ、實際教育に應用せらるゝに至れり。

第四節 コメニウス コメニウスは近世教育第一の改革家と呼ばる。千五百九

十二年今の埃士利のモラヴィアに生る。父は水車を業と爲し、熱心なる新教徒たりしが、其子をして十分の教育を受けしむること能はず。さればコメニウスは十六歳にして初めて拉丁語を學び、進んでハイデルベルヒ及びヘルボルン大學に入り、卒業して郷里に歸り、新教徒の設立せし宗教學校の長となりしが、たま／＼三十年戦争起り、此地の新教徒敗北するに及び、郷國を去りて波蘭土のリッサに逃れざるべからざるに至れり。これ千六百廿七年の事なりき。此所にて新教の監督に擧げられ、此地の宗教學校の長となり、此折六ヶ月間に拉丁語を學ばしむる方法を發明したりと唱へたる獨逸のラトケの教授法及び英のペーコンの著書を讀みて、大に刺激せらるゝ處あり、新教育意見を發表せる「大教授學」を著はし、次ぎて其書に基づける原理により拉丁語を學ぶ者の階梯として、開かれたる言葉の門を著し、名聲大に揚り、遂に英國より百科全書を編し、ペーコンが前に計畫せる「世界大學」を起さん爲めに招聘せられしが、政治上の變亂ありて計畫熟せざりき。次ぎて瑞典より招かれ、更に匈牙利に招かれ、バクダに模範小學校を起し、此所にて有名なる「世界圖繪」を著はせり。之れ繪によりて百般の智識殊に自然の智識を得しめんと企て

たる繪入讀本の初めなり。千六百五十四年再びリッサに歸りしが、僅かに二年にして、此地波蘭土の舊教徒に荒らされしを以て、氏は家族と共に身を以て逃れ、氏が多年苦心して編纂したる百科全書及び拉丁、ホヘミヤ對譯字書も皆悉く焼失せり。氏慨嘆して「此恨みは死するにあらずば滅せず」と言へり。斯くして和蘭のアムステルダムにある知人を使りて移住し、茲に自宅教授と著書の訂正とに年を送り、千六百七十一年に逝けり。獨逸の教育史家ラウメル氏を評して「人間の悲しみを代表し之と戦ひて屈せざりし人」と言へり。

氏は新教徒なりしを以て教育の目的を宗教に置けり。氏は人生の目的を神の旨に叶へる人となりて天國に入るに在りとし、人は母の懷、國土及び天國の三つの家に住するが、其の第三の家こそ人の正に安堵すべき處なれと考へたり。従つて教育は人の自然の性情を發達せしめて天國に入らしむる如くすべし。然らば人の自然の性情は如何なるものぞ、人間には植物的生活、動物的生活ありながら、しかも其れより進める人間的即ち精神的的生活あり。此精神的的生活は、知らんとし、行はんとし、神に忠實ならんとする傾を有す、故に教育の目的は、人をして智識德行及び敬

度の念を一品性に具有せしむにあり。人を斯くの如き完全のものたらしめんに如何なる方法を要するか、曰く天然自然の法則に従つて教育す可し、自然が萬物を化育するや、時を撰び其材料を供し、内部より次第に成長せしむる如く、教育も亦兒童の發達する時期に隨つて、實物の材料を與へ、其心力に應じ順次に之を發達せしめざる可らず、確實に楽しく教へざる可らず、之れが爲めに兒童をして實物を探究し、試験し、證明せしめざる可らず、從來の如く書籍より學ばしめずして自然の大書籍につき、天より地より木より森より學ばしむ可し。徳性の涵養に至つても又自然に従はざる可らず、太陽が時には光と熱とを與へ、時には風雨を起し、雷電を起すが如く、或時には寛大に或時には嚴格にし、教育者自ら身を以て兒童を率ゐざる可らず、學校は常に活潑、快樂の場所たらしめ、躰罰を禁じ、常に徳性の涵養に勉め、敬虔の念を起さしむべし。訓練なき教育は水なき水車の如し、教授と訓練とは一致結合せざる可らず。氏の學説は、其原則を自然に取るの點に於て教育史上是を客觀的自然主義といふ。後にロック、ルソーに依りて唱へられたる主觀的、自然主義に對するなり。進んで氏の教育制度上に於ける意見を見るに、氏は生初より二十

四歳迄を教育の時期とし、更に是を四つの均しき時期に分ち、之に四ヶの學校制度を配當せり。第一期は一歳より六歳迄にして母の學校に育たしむべく、第二期は六歳より十二歳迄にして國民學校に入らしめ、國語にて讀書、習字、算術、唱歌、宗教、地理、歴史を教へ、遊戯を獎勵し、躰育を爲さしむべく、第三期は十二歳より十八歳迄にして、拉丁學校に入らしめ、拉丁文法、物理學、數學、倫理學、論理學、及び修辭學を學ばしむべく、第四期は十八歳より二十四歳迄にして此學校は、大學と呼び専門的研究をなさしむべし。各家族に一の母の學校あるべく、各村落に一國民學校あるべく、各市に一拉丁學校あるべく、各王國に一大學あるべし。

氏が此意見は一方には其著書に依りて全歐洲の教育に對する注意を喚起し、其開かれたる言葉の門の如きは全歐洲のみならず東方諸國にも譯せられて拉丁語を教ふる教科書とせられき。而して氏が制度に關する意見は盡くは行はれざりしも、國民學校はゴーター、公エルンスト一世に依りて設立せられ、前に第一節に言へる如く法令として發布せられき。即ち氏が影響は當時の教育全体の革新を促すに至りたり。但し氏には適當の後繼者なかりしより、其後世に對する影響はロック

がルーソーを得たる如くにはあらざりしが、猶十八世紀のバセダウの如きは其感化を受け、近世教育改革家として第一位に推されるに足る。

第五節 ロック ロックは千六百三十二年、英國プリストル附近のリングトンに生る。父は新教の一派なる清教徒 (Puritans) にして内亂の際には議會黨に與せり。氏は十四歳に至るまで家庭に於て教育を受け、十八歳にして清教徒の設立せる中學ウエストミンスター校に入學し、六年の後オックスフォード大學に入りて卒業せり。此大學に在學中より當時の煩瑣學風の教育に満足せず、自己の考により哲學を研究し、兼ねて醫學を學べり。氏が哲學にてはデカルト、教育上にてモンテインの著書を読みたるは此時なり。卒業後、オックスフォード大學のクライスト、チャルチ、コレツチの講師となり、哲學及神學を教授したり。程なく獨逸に於ける英國公使館の書記生となりけるが、罷めてオックスフォードに歸り、醫を以て立てり。會、シャフツベリ侯爵の創を治して侯と相知るに至り、是れより政治的生活に入りて侯と進退を共にし、侯の子女の教育をも托せられき。氏が教育上の意見は實にかゝる經驗の結果に本づくものといふべし。千六百八十三年侯が朝廷より斥けらるゝや、侯と

共に和蘭に免れ、此地にて哲學上の名著「人智論」其他種々の政治論を出せり。千六百八十八年オレンジ公ウィリアム、王位に就くに及び、歸りて又政治界に活動し、千六百九十三年「教育雜感」を出せり。其後二年通商殖民の長官に擧げられ英國立憲政治の基礎を固くすることに從事し、千七百四年に死せり。

氏が教育論は和蘭に在りし際友人に送りて其子の教育を論ぜし手紙を集めしものにて、其子を紳士たらしむるの道を説きたるものなり。系統的のものにあらずと雖も、彼自身の心理學に加ふるに、其教育上の意見を以てし、他方にモンテインより得たる實科的教育の思想を繼ぎ、當時の教育の、宗教及文學に偏して世間有用の人を造るを怠りたるに反し、英人の特色ともいふべき堅實にして實利を尊ぶ教育を主張し、當時の一切の僻見に驅られず、全然新教育を主張したる點に於て大に時人の注意を惹き、直ちに佛語に譯せられ、又獨語にも譯せられ、獨逸のライプニッツをして其「人智論」よりも勝れりと嘆賞せしめき。

氏が此書にて説ける處は英國の中等社會を組織すべき紳士の教育を論ぜしものなり。其序文に最も注意すべきは紳士の教育なり、もし紳士の階級にして教育の

正しく行はれんか直ちに他の階級の者をも秩序に就かしむることを得べしと言へり。氏が所謂紳士とは善良なる風儀と智識と、美德とを備へ以て實世間に立ちて完全に己が義務を盡し得るが如き品性を有する人の謂にして、此書に於て細かに斯かる品性の人を養成する道を示せり。斯くの如き品性の人を作らんが爲めには、其精神を訓練すること、もとより必要なりと雖も、身体を強健にすること亦必要なり。健全なる精神は健全なる身体に宿る。故に身体を健全ならしめんが爲めに新鮮にして廣き大氣中に逍遙せしめ、睡眠を快からしめ、食物は簡單にして酒類は禁ず可し、衣服は寛かにして頭部と脚部とは之を冷さしむ可し。其訓練に就ては氏は之を自治に歸せり。即ち兒童自らをして、自己の道德的判斷によりて立たしむべし、道德の本は自己の私慾に勝ち自ら良心の命令に従はしむるにあり、之が爲めに答を以て罰するに宜しからず、須らく名譽の感情に訴へ、躰面を重じ自ら耻を知りて善に進ましむ可し、而して又天地萬有の創造者即ち神を信ぜしめ、神の心と其良心とを照し合はしむることも必要なり。教授に就ては氏は當時の人が前後十年も費やして古語を學ばしめながら、しかも是を世間の實務に當らしめん

とするの滑稽なるを笑ひ、此紳士たる可き兒童には第一繪畫、第二讀書、習字、作文、第三地理、第四數學、第五天文學、第六幾何學、第七歴史、第八倫理及び法律、第九自然科學、第十手工及び通商を學ばしむべし、而して斯くの如き科目を教ふるには、無論智識の源は感覺にある故、感覺を練るを以て初め、勉めて實物に訴へて教授すべし、兒童の自然に有する自己活動力に訴へ自ら進んで學問せしむ可し。故に單に暗誦せしむるは宜しからず。學習の必要なる手段として思考と對論とをなさしむべし。斯くの如き教育を施す場所に就き、氏は是を公立學校に於てするよりも寧ろ家庭に於てするを宜しとすと言へり、蓋し兒童が學校仲間の間に投じて、他人より揉まれて得る大膽と活氣とは、粗暴と不正との分子を含むものにして、眞正なる紳士たらしむる道を妨害する憂ひあり。

此書一方には英國教育學思想の基礎となり、他方には佛國のルーソーに傳はりて、全歐洲教育革新の道を開けり。

第六節 ミルトン 新宗教思想を抱き之れと當時起りし科學的教育とを結合し以て當時の宗教を改革せんとしたる者英國にミルトン、獨逸にフランクケあり。ミ

ルトン(一六〇八—一六七四)は清教徒の中心となり、クロムウェルを助けて英國の政治、文學、宗教、道德の改革に盡力せり。平常自家に二人の姪と甥と、友人の子數人とを預りて教育するを娛樂となし、少時又學校に教鞭を取りし事ありて教育に興味を有し、隱然英國々民の教育を以て任じ、時人よりは正義の化身と稱せられたり。其教育意見に「教育論」あり。氏は正しく神を知り、神の敬愛す可き所以を解し、自ら出來得るだけの道德を修めて神に似んとを務め、平和に處しても戦争に處しても、個人として公民として、一切の任務を正しく熟練に且つ泰然と處理すべき人、切言すれば國家の健固なる柱石となる如き人を造るを目的とし、教育に於ては、正しく神を知らしむること、能く世務を果たさしむること、を結合せざる可らずとせり。斯くの如き人物の養成には、宗教々育を與ふると共に、羅馬法、英國國法、拉丁文法、數學、幾何學、地理學、博物學、建築學、機械學、航海學、生理學及び醫學の如きを學ばしむ可し。蓋し神の榮光は天地一切の事に現はれ居るを以て、斯くの如き學科を知らしむるは即ち直ちに神を知らしむる所以にして、而して同時に能く世の務めに當らしむる所以なり。之れと共に又劍術、角力の如きを以て其體力を練らしむべ

し。かゝる教育を施す爲めには、廣き校地を求め、美麗なる校舎を建て、生徒の定員を百三十人となし、十二、三歳より此學校に入らしめ、凡そ二十三歳迄學ばしめ、然る上、海外に旅行し、直接に海外の地理、歴史、及び政治を觀察せしめ、以て市民たる資格を有せしむ可しといへり。ロックと均しく英國の中等社會を組織すべき紳士の理想を描き、是を以て當時の教育を改革せんとせしものなり。

第七章 フランケ(一六六三—一七二三) フランケはミルトンと殆んど同様の立脚地に立ちたるものなれども、ミルトンとは異なりて一生を教育事業に委ね、數多の學校を設立し、獨逸の教育制度を整ふる事に盡力せり。獨逸のリーベックに生れ、エルフルト及びキール大學に於て神學、哲學、語學、自然科學を研究し、千六百八十七年ハンブルグに小學校を起し、大に教育に興味を感じ、千六百九十一年、新教徒の手にてハルレ大學の創設せらるゝや、新教の一派として「敬虔派」を起したるスピノーネルの推選にて語學の教授に聘せられ、兼ねて此地の一教會を司れり。氏が教育史上に残る大事業をなし、起源は始めは單簡なる動機に基づけり。氏が管理せし教會は木曜日毎に貧民に麵包を與ふる例なりしが、氏は彼等に精神上の麵包をも與

へん事を志し、其貧民を飭ひて、自宅に來らしめ、問答法に由りて宗教の初歩を教へたりしが、會々一婦人の寄附金を投ぜるものあり。氏、此金を基として貧民學校を起さんと志し、書を購ひ、ハルレ大學の學生を連れ來りて、一日二時間づゝ貧民に教授せしめしが、此企圖を耳にし、寄附金を投ずるもの相繼ぎて現はれ、遂に貧民のみならず、身分ある者も亦來りて教を受くる者あるに至れり。依りて氏は貴族もしくは市民の子弟と貧民の子弟とを區別して教育する各種の學校を起し、千七百二十七年、病を得て没せし時、氏が監督の下に在る學校は自家の家塾、拉丁學校、獨逸國民學校、孤兒院、無料寄宿舎、書籍協會、婦人協會の各種の學校、及び教育會を含み、之に入れる者の總數實に四千二百七十三人に及べり。第一の家塾は貴族の子弟に大學の豫備教育を授くる所にして、希臘拉丁の古語を教へ、數學、地理、歴史、幾何學、天文學、植物學、生理學及び醫學の大意を授け、其教授を助くる爲め、博物室、理科實驗室、及び植物園を附設せり。拉丁學校は即ち市民の子弟に大學に入學せしむる豫備教育を與ふる中學にして、獨逸國民學校は普通の小學校なり。孤兒院は現今の孤兒院と幼稚園とを合併せしが如きもの、無料寄宿舎は、大學生などの貧困なる者を容

れ、書籍協會は貧民の子弟に書籍を販賣せしめ、傍ら彼等に教育を施せり。婦人協會は女子教育研究の爲めに設けたり。是等の諸學校及び教育會に通じて、氏は理科實用の智識を重んじ、實科的智識を得しむることに心を注ぎたり。從ひて、氏は獨逸に於ける實科學校の創立者と稱せらる。其他、氏は教職は相當の練習を爲すべき必要あるを認め、一の教員養成所を起し、月謝を徵集せず、食費を給して是れに教育を授け、三年の後、氏が監督の下に在る諸學校を教へしめたり。是に依り、氏は又獨逸に於ける師範學校の創立者と稱せらる。加ふるに、氏は普魯西亞王、フリードリッヒ、ウイヘルム一世の信任を受け、王の教育上の顧問となり、王に勸めて千七百十六年に、高等教務院を創設し、學者を徵集して教育上の事を議せしめたり。是れ後の文部省及び學士會院の初めと爲す。此時の王の敕令に曰く、適當なる方法を以て全國の子弟を訓練し、是を善良の國民たらしむるは、方今最大の急務なり、此目的を達するには、一の確實なる中央教育機關を設け、諸般の教育事務を舉げて悉く是れを其一手に歸し、一定不變の方針に基づきて之を處理せざる可らず。故に茲に全國の教育を總括すべき高等教務院を創立す」と是れ愈々明かに國家が教會の

手より教育の權を取り上げ、教育を國家行政の一部と爲す端緒を開きたるものと
いふべし。此故に氏は亦普魯西學制の建設者と稱せらる。氏の教育事業は之れ
に止まらず、牧師としても能く其任務を盡し、新約全書を印刷して、之を世界に廣げ
んが爲めに印刷所を設け、又印度に傳道の道を開きたり。而して大學教授として
は大に學生の道德的品性を高めき。常に學生に諭して曰く「活きたる信仰の一粒
は死せる知識の一ポンドよりも尊く、愛の一滴は科學の大海よりも尊し」と。
フランクの教育事業は一に神の意志を奉じて之を營むにあり、即ち教育の根本と
して敬虔の念を取り、是れに有用なる智識を結合して現社會によく活動せんとす
るが如き人を造らんとするにあり。氏曰く「眞に敬虔なる人のみ、社會のよき公民
たるべし、誠實なる敬虔の念なくんば、凡ての智識、凡ての思慮、凡ての才能は寧ろ害
となる」と。氏が事業は今猶ハルレに於てハルレ學院として存在す。

第八節 ジェニイット派 新教起りて宗教と教育との改革を企て大に世人の同情
を得るや、舊教徒中のジェニイット派又之れに對して教育事業を經營し、以て其勢力
を高めんと計りたる事は既に前章に述べ置きたり。此一派は中世紀風の教育を

繼承して近世風の教育と戦ひたる一團體と見る可く、十六世紀の末に起り、十七世
紀に尤も其勢力を有し、十八世紀の末に至りては漸く其勢力を失ひたり。
ジェニイット派は西班牙の貴族にして軍人なりし、ロヨラ(一四九一—一五五六)が創め
し處なり。彼れ軍に在りて負傷し、其治療の爲めに病臥せる間に大に宗教に考を
向け、遂に一身を宗教に委ねんと決心し、恢復するや、ジェルサレムに詣りて、巴里に來
り、此所にて一層深く宗教を研究し、遂に千五百三十四年を以て耶蘇教會を組織し、
教會によりて宗教の新領地を廣げ、教育によりて其信仰を維持することを此會の
事業とし、千五百四十年、羅馬法王ポール三世より許可を得て其事業を開始せり。
彼れ性狂熱、加ふるに軍人の氣質を以てし、其事業の方針、目的は方法を神聖にすと
いふにありて、宗教を廣ぐる爲めには政治家風の策略をも取れり。即ち一種の救
世軍とも見る可きものにして、彼れ自ら將軍となり、以て一切の會の事務を處理せ
り。次の將軍アクエヴィヴァに至り、此派の教育事業の施設につき一の憲法を定め、千
五百九十九年に之を公にし、之れに依りて其教育事業を營むに至れり。

此派の學校は初等科、高等科の二科に分れ、初等科は更に第一級、第二級、第三級、第四

級、第五級に分れ、高等科は二級に分れたり。初等科第一級は初歩文法、第二級に中等文法、第三級に高等文法、第四級に文學、第五級に修辭學を授けたり。初等科には十四歳より入學せしめ、初めの四級は各々一ヶ年を要し、最後の五級は二ヶ年を要し、都合六ヶ年を以て終らしめたり。高等科第一級は哲學級とし、論理、倫理、心理、數學を授け、二ヶ年を費さしめ、第二級は神學級とし、教會史、宗教法典、聖書及びヘブライ語を教授し、四ヶ年乃至六ヶ年を費さしめき。初等科は現今に比すれば恰も中學程度に相當し、高等科は大學に當れり。教授の方法は悉く記憶力に訴へて暗誦せしむるを第一義とせり。而して各級を各二組に分ち、其優れたる組には此學校の精神とせる劍を與ふる事とし、又優等の生徒には學校の内外に於て之に名譽を與ふる道を計り、卒業の際は莊嚴なる儀式の中に優等生には賞品を授與せり。訓練に就きて言へば、此學校は凡て寄宿舎生活にして世俗の惡風に感化せざらしめんが爲めに世間との交通を絶ち、甚だしきは家族との交通をも拒絶せり。毎朝禮拜あり、讚美歌を歌ひ、宗教を其教育の根底とし、捷つとは甚だ稀なりしも、盲目的の從順要求せられ、假裝舞會、遠走、乘馬、擊劍の如きは之れを獎勵して其心を樂しまし

めん事を計りたれば、生徒は家に在るよりも學校に在るを却て樂みとしたり。斯くて此派は新教が獨逸を中心とするに對し、佛國を中心とし、又新教が普通教育に力を注ぎたるに對し、此派は高等教育に力を注ぎ、尙又新教が一般人を相手としたるに對し、貴族と富豪とを相手とし、千六百年には二百の學校を有せしに過ぎざりしが、千七百十年には六百十二校を有し、二十四の大學を此派の者にて占領し、之と並び、教師と牧師とを養成する爲め、百五十七の養成所を有せり。是れ佛蘭西に於ける師範學校の初めなり。此學校にて養成せられし者が歐洲はもとより、日本、支那、印度或は南北亞米利加等に入りて布教せり。彼等は其出立の際、必ず「我れ行く可し、しかも歸らざるべし」と誓言せりといふ。

第九節 ジャンセニスト派 ジェニイット派が右の如く、其目的の爲めには方法を撰ばずといふ方針にて、宗教家らしからぬ方法をも執り、其勢力を張りたるに對し、セントアウガスタンの嚴格なる信仰を復活せんが爲め起りたるものをジャンセニストとなす。此派は和蘭の僧ジャンセニウスが創めしものにして、教育を以て一の慈善的事業となし、千六百四十三年初めて佛國巴里の近郊ポルト、ロイヤルに「小學校」と

名づくる學校を建てたり。此の學校は今の小學校と中學校とを合せたるが如きものにして十二歳迄に國語の讀み書きの初歩、聖書史、地理及數學を學ばしめ、十二歳より正科に就かしめ、從來の科目の外に、拉丁語、論理學、神學及び自然研究を學ばしめたり。此時に及びても務めて、學問を興味あるものとせんと考より、夏は生徒を引率して木蔭又は小川の邊に行きて教へ、冬も天氣よき時には郊外に連れ行きて教授せり。其教授の目的とする處は、兒童の能力と性質とに應じ、其判斷力と理性とを養成するにあり、従つて一學級の生徒は多くも十人を超えざるとせり。訓練は親切なるを主とせしも、宗教的訓練の嚴格なる點は失はず、己が道理心の上立ち以て神の意志に従ふが如き確實なる人を造らんとせり。斯く此派はジュニョット派に反し近世的の教育法を探ると共に各學科の教科書を作り、其編纂の方法は凡べて心の發達の順序を追ひ、務めて實物に訴ふるが如くし、大に教育社會の注意を惹けり。此派の主領としては、バスカル(一六二三—一六六二)あり。其教育の精神と方法とに於て、大に佛國の識見ある人々の同情を引き、學校は僅かに一箇所に過ぎざりしも、其名聲ジュニョット派を凌がんとするに至りしかば、彼等は力を極

めて妨害し、遂に創立後十八年にして閉校するの止むを得ざるに至れり。其間に養成せし生徒約三百人に過ぎず、形に於ては早く滅びたりといへども、佛國の小中學校を起す一大刺激を與へたり。而して此派の精神を繼ぎて教育の改革を唱へたるもの二人あり、即ちフエネロン及びローランなりとす。

第十節 フエネロン及びローラン フエネロン(一六五一—一七一五)は二十四歳の時、舊教の僧侶となり、舊教の一女學校長を勤めしが、千六百八十七年に、女子教育を出せり。此書佛國に於て教育學を説きし者の最初のものとして稱せらる。氏は實に佛國教育學の祖先たり。千六百八十九年、ルイナ四世の孫の教育を託せらる。此幼君極めて狂暴の質なりしが、氏が其の教育に盡したる結果、順良僧侶の如き人に化せしむるに至れり。「テレマクス」は此君の爲めに著はしたる物語なり。氏は其女子教育論に於て、人は婦人を知力の劣れるもの、従ひて高き教育を與ふ可らざるものなりと言ふも、實は其知力劣れるが故に益々教育を要するにあらずや、婦人は人間生活の根底を組織す可き務を有し、一家の盛衰其賢愚に依り、従ひて國家の盛衰に及ぼす力、小少にあらずといひ、審かに女子の教育法を論じ、婦人は婦人の性質に

従ひて男子と異りたる感情的教育を施すの必要なることを唱道せり。佛國に於て、又歐洲全體に於て女子教育の大に起りしもの氏の主唱與かりて力あり。

ローラン(一六六一—一七四一)は巴里大學の總長となり、ジャンセニストの精神を承け、千七百二十年より二十八年間に「學科論」を出し、國語教授、實科教授の必要、及び歴史は兒童の心情を陶冶する上に、最も有力なるを論じ、大に當時の教育社會を動かし直ちに英語にも翻譯せられき。

第十一節 ラ、セール 佛國にありてジャンセニストの如くジュニョット派に對して起りしに、あらず、寧ろジュニョット派の教育の足らざる點を補はんが爲めに起りたるをライムのカトリックの僧、ラ、セールとなす。氏は巴里大學にて苦學し、千六百七十九年「學級編制法」是れなり。蓋し從來小學校には、學級編制法十分に立たざりき。課目は、讀書、算術及び宗教問答とせり。千六百八十一年、益々其事業を擴張せんが爲めに、基督敎學校組合を組織し、巴里及び其他に小學校を設立せり。小學校を建つるに及び其教師として特別に修養ある人物の必要あるより、千六百八十四年教師

養成の目的を以て、ライム及び巴里に師範學校を設立せり。之れ獨逸のフランケが師範學校を立てたるに先つと十三年にして、而して又ジュニョット派の教員養成所とも其趣きを異にし、是れに附屬小學校を附設せり。而して氏が没せしとき、牧師養成所一、師範學校四、附屬小學校三、小學校三十三、工藝學校一ヶ所ありき。氏が教育上に於ける効績少なからず、佛國に於ける小學校の發達は氏が力に負ふ所多し。

第十二節 批評 此時代の教育を第一に目的の上より見れば、中世紀の遺風を繼承せるジュニョット一派は猶出世間的の教育を施さんと欲したるも、他に實科的の知識を有して實世間に活動する人を作らんとする新教育意見は次第に同情を得べし。ベーコン、ロックは之が主唱者となれり。而して新教徒にありては、宗教を教育の根底としながら、尙實科的の知識を有して現世に活動し得る如き人を作らんと志したり。コメニウス、ミルトン、フランケ等の主張する所を見ても之を知るに足る。

即ち前の文藝復興時代に起り來りたる實科的教育が愈々勝利を得つゝあるものと認むることを得べし。従ひて又之を社會的方面より見る時は、前世紀よりの傾向一層著るくなり、世界主義に代ふるに國家主義を以てし各自國民の教育に力を

注ぎ來れり。第二に之を其如き人を作る方法の上より見る時は、知識の新原野と稱せらるゝ自然に關する學科及び社會的實業的の學科も加はり來り、コメニウスの如きは、繪に訴へて之を兒童に教ふる方法をさへ工夫せり。訓練も亦苛酷の風を改めんとする傾一層強くなれり。而して普通教育に於ける兒童管理の上には、學級編制法も設けらるゝに至れり。第三に之を學說の上より見れば此時代は教育學が科學的に研究せらるゝ基礎を得たる時と言ふべし。ペーコンは新論理學の上より、ロックは新心理學の上より、教育學研究の道を開き、コメニウスは客觀的自
然主義の立場より殆んど一切の教育學の問題を解釋せり。而して佛のフエネロンは女子教育論を唱へて佛國教育學研究の祖となれり。但し猶當時にありては宗教を教育の根底と見、或は教育學の基礎學とする所の心理論理倫理の諸學が十分科學的に研究せられざりしより、其基礎薄弱なる所あるは免れざりき。第四に之を制度の上より見れば、前世紀にルーテルが唱へたる教育を國家の手に營むべき意見は愈々實行せらるゝに至り、從來發達せざりし小學校の勃興を來し、又師範學校の創立を見加ふるに女子教育の必要漸やく世人の注意を喚起するに至れり。

第八章 十八世紀の教育 (其二)

第一節 總論 十八世紀は十七世紀の後を承けて新教育の明に成立したる時代なり。概して十八世紀は中世紀の反動が、其結論にまで達せし時代と見ることを得べく、自然研究、文藝復興及び宗教改革が自ら各々其論理的結論のある處に到達し、凡ての中世紀の遺風を一洗したる時代なり。故に此世紀を呼びて一洗時代又啓蒙時代と稱す。自然研究の論理的結論を追求したる者の代表者とも見る可きは英のニュートンにして、宇宙一切を機械的に説明し、其結論として萬物の創造者たる神の觀念に到達し、宇宙觀察の結果は神を假定せざるを得ずといふ一種の神學意見を立つるに至れり。所謂デイズム是なり。文藝復興の精神を追ひし代表者ともいふべきは佛のルーソーなり。彼は眼を自然に向け、此時代が一般に傾きたる唯智力を以て一切の事物を合理的に批評せんとする合理主義に對し、大に感情の要求を高めたり。而して宗教改革の精神を追ひしものは、同じく佛のヴォルテヤなり、彼は道徳上の要求として初めて神の存在を信ずるを得べしといふ合理的宗

教を唱へたり。

斯くの如く十八世紀は破壊の時代にして、哲學上に於ては英國のヒュームが懷疑説を以て立ち、實際上に於ては個人主義が遂に佛國革命となりて現はるゝに至り、教育に於ても中世紀の遺物たるジュニョット派の如きは全く其勢力を失ひ、愈々教育改革の道を開きしが、抑々此の使命を帯びし先驅者はルソーにして、自ら文藝復興の精神を代表しつつ、同時に自然研究の精神と、合理的宗教とを結合し、英のロックの影響の下に教育上の新福音を傳へたり。ルソーによりて獨逸のパセダウ、カント、瑞西のペスタロッチの如き大教育家を起たしめ、教育理論並びに實際の上に改革を促し、是れと同時に、英、佛、獨、諸國等しく教育制度を確立し、而して自然科学の研究は益々進みて、教育に新なる教授の材料を供給するに至れり。

第二節 ルソー ルソーは千七百十二年、瑞西のゼネヴァ府に生る。もと佛人の血統なり。父は時計師にてありけるが、母は文學的趣味を有し精神病の血統を帯びたり。母はルソーを生むや直ちに遊さしを以て、不幸にも父の手に育てられしが、父は性質極めて不規則の人にて、其子の教育に注意せず。ルソーの生

涯極めて變化に富み其行動一定の定規を以て律すべからざるものありしは、もと其天稟に依るといへど、其原因の一部を幼時の教育の行届かざりしに歸せざる可らず。十歳にして叔父の家に養はれしが、叔父はルソーを初め公證人、後に銅版師の家に送りたり。然れどもこれルソーの適する所にあらず。彼は到る所其意に満たず。遂に十六歳の時より全く漂泊の身となり、生涯を風雲に托し、パリ、リヨンを中心として漂泊し、此間に種々の職業に就き、又此間に種々の罪惡をも犯せり。三十歳の頃に及び稍々其素行を改め、上流社會の人にも交を結ぶに至り、學士會院の懸賞に應じて當撰し、文學者として、社會の批評家として名を知らるゝに至れり。千七百六十三年に「民約論」と「エミール」とを出せり。「民約論」は即ち佛國革命の導火線となり、「エミール」は教育の大改革を促したるものなり。殊に「エミール」に就きて言へば、全く當時の教育を破壊せんとの大膽なる企圖を含みしより、時人争ひて之を讀み、其勢力非常なりしかば、舊教徒は是を有害なるものとして、議會に迫り、「エミール」を焼き、且ルソーを處罰すべき事を議決せしめたり。茲に氏は郷國ゼネヴァに逃れ、轉じて英國に渡り、後餘燭の冷むるや、巴里に歸り、千七百七十八年、巴

里の近郊にありて、狂氣となりて死せり。

氏は一種の天才にして、教育家とは見る可らず、其天才より時勢を先見し、教育の新福音を傳へたる改革家として見ざるべからず。佛國の一文學史家言ふ、ルソーの文を讀めば其善美に對する熱誠表はれ、明確なる論理と雄辯とを以て正義道德の永劫の眞理を辯護せるも、其實際に行爲を見れば、卑しむ可く厭ふ可き處あり、氏は家庭の情愛、友誼、謝恩に就きて切々説く處あるも、其子は之を養育院に投じ、悪友に交り、恩人には却りて忘恩の行爲を取てし、而して自らは德行を愛し、道義的行爲を爲すと信ぜり。氏自ら余は罪を犯せども、而も余は善を愛し、我心は常に純潔なりと言へり。これ最も矛盾の一生にあらずやと。

氏が新時代を作れる教育小説「エミール」は其小説の主人公の名を取りたるものにして、此書を一貫する思想は氏が抱く處の個人主義自然主義より出て、自然の眞を全うし個人の自由を實現すべしといふ思想に立てり。此書の冒頭に曰く、凡ての物、造物主の手より來る時は善良なれども、人の手に渡るに至りて墮落すと。神は田舎を造れるに人は都會を作り、入らざる知慧を弄し、自然の眞を忘るゝ處より、人

も社會も墮落す。かく氏は萬物其初め神の手より來る時は善良なりと見るを以て、人の本然の性も又生れながらにては善なりと爲す。兒童は其性善良なるものなり、之れを惡に染ましむるは社會の腐敗するが故なり。社會の傳説、社會の教權(Authority)は、人間の眞、人生の善を失はしむ。故に人を教育せんと欲せば、須らく是等社會の弊風なき、自然の儘なる田舎に於てし、一切人爲を交へず、其兒童の自然の發達を追ひて、一方には其發達を妨害する物を除き、他方には其發達を助長せしめざるべからず。即ち其自然の發達をさへ追ひ行かば、茲に初めて理想的の人物を造ることを得べしと爲す。斯くの如くにしてルソーは茲に新らしく生れたるまゝの小兒ありと假定し、世に存する處の一切の傳説、一切の教權を脱し、己が理想の儘に其子を育て上げんと試みたるもの即ち此のエミールなり。

本書は全部五卷に分れ、第一卷はエミールの幼時期の教育、第二卷はそれより十二歳迄の教育、第三卷は十二歳より十五歳迄の教育、第四卷はそれより二十歳となりて結婚する迄の教育、第五卷は其妻となるべきソフィーの教育を説けり。男子も女子も理想的に教育して、茲に理想的の家を爲さしめんと企てたり。中にログより

來れる思想の面影を認むることを得べし。

エミールは自然の儘に育てらるべきを以て、頭には帽子を被らず、足には靴を穿たず、冷水に浴し、唯僅かに寛濶なる衣服を纏ひて自然のままに發育せざる可かず。エミールには只一人の師傅ありて之を育つるが、此師傅は唯エミールの自然の發達を助くるを主とし、毫も人爲的の助力を加へず。さればエミールが各種の慾望を表はすに當り、そが眞に自然の慾望より出でたるか否かを確め、其自然の慾望のみを満足せしめて其體力を發達せしめ、決して六ヶしき事を教へず、又強ひて束縛せず、兒童は何處迄も兒童たらしむ可し、大人を學ばしむ可らずといふ原則に従ひて教育す。是れ第一卷に説ける第一期の教育法なり。

第二期に至りて、エミールは其感覺を働かして外物を知らんことを求む。故に此際師傅は務めてエミールの感覺力知覺力を練らしめ、以て事物の眞を知らしめんと力む。而も決して其力に適せざる如きことは教へず、又兒童不相應の言葉を使はしむることを許さず、他くまで兒童として自然の發達を遂げしめんと勉む。かくて十二歳頃のエミールは自然の儘に行ひ、自然が彼れに與へたるものは一物を

も失はず又一物をも害せず、其談話は單純なれども而も明瞭なり、其思想は豊富ならざれども而も確實也。其理解せるだけを爲して毫も人爲的の事をなさず、性情純乎として曇りなき秋の空の如し。是れ第二期の教育にして第二卷に説ける所なり。

十二歳頃よりエミールは自然の研究に其眼を向け、幾何學、天文學、地理學、物理學の如きを學ぶ。但し斯くの如き學科は決して書籍によりて學ばしむるにあらずして、天然自然を實地に觀察せしめて是等の智識を得しむ。書籍に依らざるは書籍は人爲的の者にして小供に不相應なる知識を與ふるものなればなり。此際エミールが讀む書として許さるゝは唯一つの、ロビンソン、クルソー漂流記のみなり。此の書は師傅が認めて以て自然生活を實寫せしものとするが故なり。彼れエミールは此漂流記を讀みてより、己もクルソーの如く自然生活を營まんが爲めには何等かの業を知らざる可らずと感じ、大工の業を學ぶ。蓋し人は自ら額に汗して世に立たざる可らず、自力を以て働きて得たる者に對しては彼は其物の王たり、獨立自尊、他くまで自由に生活せざる可らず。斯くの如くにして、十五歳頃のエミール

ルは、智識の方面より言へば概括力を得るに至り、道徳の側より云へば、勤勉に節制に忍耐に、勇敢に其身を處し、其體力又強健にして、自然が許せるまゝに、幸福に生活す。彼れは少しも社會の腐敗に洒されず、純乎たる自然の兒として、のびくんと發達す。是れ彼れが第三期の教育の狀態にして、第三卷に説きたる所なり。

第四期即ち十五歳頃よりしてエミールは情慾の發動を感じ、人類に對する同情深くなる。彼は是れまで人類の歴史を知らず、又美術文學を心得ず、又神の存在をも辨へざりしが、此時に至り、一方には歴史を學びて社會を理解し、他方には宗教を學びて神を知り、是等を學ぶに依りて情慾を抑ふべきを知り、又其趣味を養ふが爲めに辯論の術を學び、劇場に行き、女性を知りて妻を求め、理想的の婦人ソフィーと逢ひて結婚の約を結ぶ。是れ第四卷に説ける第四期の教育なり。

エミールが結婚を約せし、ソフィーの家は元と富みたりしが、一朝産を失ひて田舎に墜遁し、極めて清淨に、極めて質素に、其生活を送り、一人子ソフィーを愛育す。ソフィーは順良溫和の性質にして、情に深く、女子たる手藝は母より學び、宗教は又母より己が理性の承認する神を信ず可きことを學び、男子の相談相手となり、男子の慰藉者

となり、其生活を快からしむるに適當なる教育を受く。茲にエミールは其師傅と共に彷徨ひ來り、ソフィーを見て愛に落ち、遂に結婚の約を爲し、も師傅はエミールを以て經驗尙淺く未だ家を爲すに適せざる者と爲し、エミールをして二年間大陸旅行をなし、各國の政體、其人情、其風俗を觀察せしめ、歸國の後目出度婚儀を擧げしめ、此の理想的の男女子が理想の家庭を作り、幸福に自由に其生を送り、程なく一子を擧ぐる段にて筆を結べり、これ第五卷に説ける所にして、主として女子教育の意見を述べしものなり。

「エミール」を科學的に論理を追ひて批評を試むれば、幾多の矛盾衝突を發見するに難からず。(一)エミールの如き小兒が實際此の世に存在すべきか、家庭に育たず、全く社會的關係を離れて教育せらるゝ所のエミールは、只是れ空想の上のみ有り得べき人物にして、事實上にはあり得べからざる人物なり。ルーソーは、人は社會的生物なる事を忘却せり。ルーソーは人の天性を損ふものは社會なりといひ、而してエミールを一切此の社會の腐敗に觸れしむ可らずとせり、而も第四期の教育に於ては歴史を學ばしめ、劇場に入らしむべきを説き、遂に大陸旅行を爲して其見

聞を廣うせしむべき事を説けり。ルソーにして初めより社會を以て天眞を損ふものとなし、社會より離れて教育すべきものとの原則を探らば、此後の教育は矛盾に陥れり。若しルソーの意見にして、エミールを社會より離して、田舎に於て教育するは、幼時にありては其力微弱にして社會の弊風に抵抗する力なきが故にして、社會の罪惡を排除する力を得たる曉には社會に十分交際せしむべしと言ふにありと見るも、猶彼の説の矛盾を免るべからず。田舎に於てせず、家庭に於て教育するも、斯くの如き教育は全うし得べければなり。抑々家庭親子の愛情は教育の根本にあらざるか、而して幼者は早くより社會に馴れしめ、社會の暗黒面は成るべく、知らしめざるべきも、其光明の方面は絶えず之を示し、以て社會的意識を興ふ可きものにあらざるか、ルソーは個人主義を固守するの餘り個人と社會との有機的關係あることを看過して、以て其の教育意見を立てたり。故に其の意見は其根底に於て薄弱なる處あり。換言すればルソーの社會學上の思想は健全なるものにあらざれば、此れに基づける所の教育意見は亦穩健なりといふを得ず。(二) ルソーはエミールの本性、廣く言へば、人の性質を解して、生れながらには善なり

と言へり。もし彼れの説くが如く人の性は善なるものならんには、エミールを道徳に慣れしめ、又彼が情慾の發動を感ぜし時に、歴史と宗教とによりて正しく之を導く如き勞を要すべきにあらず。ルソーはエミールの性質の心理的説明を誤りしと共に、エミールの性を主に感覺的感情的のものと觀、其理性的の力の發達に關する心理的説明を與へず、時には感情を道徳的理性に依りて導かざるべからざるが如くにも説けり。從ひてエミールをエビキラス學派の如く恣欲説に従ひて教育するかと思へば、他方にはストア學派の如く克己説に依りて教育するが如くにも説き、其立脚點分明ならず。一言にして言へば彼の心理學的思想は頗る科學的の明瞭を缺く。思ふに彼れは自ら情的人なりしが故に、情の一面より人性を解釋したるが如し。(三) ルソーはエミールを自然の儘に教育せよといへり。而も其自然の意義、甚だ不明瞭なり。自然の儘に教育せよといふは人を野蠻の状態に返し、唯現在を目當として働く人を造る所以にあらざるか。エミールは實に二十歳に至るまで十分獨立の人たることを得ず、唯師傅の助けによりて漸やく指導せられ得るの人たり。是れ自然主義教育の結果なり。自然主義といふもの、心の

自然の發達に従ひて教育すべしといふ心理的の原則にして倫理的の原則にあらず。抑々教育は一の理想を掲げて人を作る事業にあらずや、然るに彼が此の理想なるもの分明ならず。彼は自然を解して一定の目的あるが如くにも説き、或は自然とは社會を離れたる無人の郷に獨立獨行し、殆んど自由我儘なる生活をなすの謂なるが如くにも解し、其理想甚だ明ならず、従ひてエミールの品性亦確乎ならず。否エミールはこれエミールにはあらずしてルーソー其人の面影なり。彼れの教育目的は高尚なる理想あるにあらずして、一種の感情的生活の立脚地より教育の目的を定めたり。(四)教育方法として、ルーソーが取りし原則は衛生も、教授も、訓練も、一に自然に従ひて之を施すに在り。然れども此自然に従ふのみにて果してよく強健なる身體を得、完全なる智識を得しむる事を得るか、彼れは、衛生に於て自然の遊戯運動を爲さしむるのみにて體操の如きを課せんとせず、教授に於て人の手になりたる文物を退ぞげたり。然して尙よく社會に立たしめんとす、其訓練の方法に於て決して確實なる人物を養成するを得べからず。彼れの教育方法は何れの點より見るも、十分なるものにあらず。(五)教育の場所として、彼は田舎を撰擇せり、

而して一人の師傅に依りて教育せんとす。これ事實上あり得べき事にあらず。彼はロックが公立學校を斥けて家庭の教育に重きを置きたる思想を追求して其極端に走りたるものにして、學校といふ教育制度を斥ぞくる意見は取るべからず。但しかく論理的に追求して氏が意見を打破せんとするは、氏の意にあらず。彼は哲學者にあらず又科學者に非ず、文學的の天才にして平生、哲學と科學とを嘲りし所の人なり。此文學的の天才の人、時弊に感ずる處あり、當時の教育の中世紀風を脱せざるに慨する所あり、以て自己の人生觀を描寫し、教育を改革し、社會を根底より改造せんと試みたるもの、此エミールなり。されば此著の價值を當時代と相離して見んとするは、誤れり。本書は(一)古典或は宗教を根底とせる當時の教育に反對し一切の教權、傳説に支配せられず、内部より兒童自身の發達を求め、是を完成せんとせり。(二)當時の教育が外部的、機械的なるに反し、人の性情の根底に分入り、其心理的の原則に従ひて内部的に教育すべしとせり。(三)當時の教育が兒童の自己活動を看過し、兒童を受動的にし、教師が主となりて働きたりしに反し、教育は須らく兒童の自己活動を重んじ、教師は客となりて兒童の自己活動を助長する位置に立

ち、一に見童自身の發達を企圖せり。(四)當時の教育が宗教の立脚地よりして感情を排し、殊に十八世紀の教育が批評的懷疑的にして智力を重んじたるに反し、感情教育の必要を認め、自愛心を助長して博愛平等の精神を養成す可しとせり。(五)當時の教育が宗教文學の如き人間生活に關する學科を以て教育の材料としたるに對し、主に自然生活に關する學科に重を置き、之を以て教育の唯一の材料とし、殊に實業的の材料を重んぜり。(六)書籍の上の知識を輕んじ、實際判斷力を養成すべく、之れが爲めに實地實物に訴へて教授すべしとせり。即ち從來、記憶力を練ること、に傾き、書物に吞まるゝ如き人を作りたるに反し、彼れは活々たる知識を實物につきて與へんとせり。實物教授は「エミール」に於て殊に明かに其必要を認められたり。(七)教育の効力が時に社會の弊風の爲めに減殺せらるゝを慨し、之を一主宰者の手に統合し、教師の感化力を強固にして人を造るべしとせり。蓋し當時の教育が雜駁に流れたるを以て其統一を計らんと欲したるなり。要するに人心は自然に發達す可き性質を有す、教育は此を踏臺として之を助長せしむ可しと言ふ、主觀的自然主義はルーソーに由りて最も明に唱へられ、嘗てコメニウスが教育は天地

自然の法則に従ひて教育すべしといふ客觀的、自然主義に一步を進め、一の有力なる原則を掲げたるもの、バセドウ之を承けて以て新教育の如何なるものなるかを、實際の上に世間に示したり。

第三節 バセダウ バセダウ(一七二三—一七九〇)は獨逸のハムブルグに生れぬ。家貧しく家庭の教育届かざりしを以て家を出て、一紳士の僕となれり。幸に此紳士は氏が學才を愛し、氏を中學校に入らしめぬ。其後氏は更に友人の助けを得て、ライプツヒヒ大學に遊びて神學を研究せしが、其宗教上の信仰極めて自由なりしを以て大學を卒ることを欲せず、一富豪の家庭教師となり、其子に拉丁語を教ふるに實物を以てし、大に成功せしより、教育に興味を起し、千七百五十三年丁抹ソロの専門學校の文學科の教師となり、千七百六十一年歸國して普魯西アルトナの中學校の教師となりしが、此時ルーソーの「エミール」を讀みて大に刺激せられ、其所見の平素有せし所と符合せしを喜び、遂に奮つて新教育を起さんと決心し、世の志士仁人に告ぐといふ書を著して、己が新教育に關する意見を發表し、千七百七十年に「教育法」を著せり。此書は父兄に向ひ、其兒童の七歳より十八歳に至る迄の教育方

法を示したるものなり。千七百七十四年十八世紀の「世界圖繪」と呼ばれし繪入りの「初學讀本」を出し、兒童の讀物として極めて有益なるものなりとの評を得たり。是等の書によりて氏の名聲急に舉り、丁抹の教育事務長官ベルスドルフは第一にパセドウの意見に賛同して是れを其國に採用せんとを計り、又當時の有名なる文學者ゲーテも十分なる同情を表し、遂にゲーテの紹介によりて、獨逸のデッサウ侯、レオポルドに知られ、侯は氏をして其持論を實現せしむべく學校を起さしめたり。これ所謂「汎愛院」にして、其創立は實に千七百七十四年十二月二十七日にあり。蓋しデッサウ侯の誕生日を選べるなり。

翻りて當時の教育狀況を見るに、兒童の間は一生の中の苦しみ時期と思はれ、其教へ方は一般に苛酷にして少しも其心の自然の發達を顧みることなかりき。文法は一に記憶に訴へて教へられ、聖書及び詩歌も同様に暗誦せしめられ、學校に於ける普通の罰は百十九の讚美歌を暗誦せしめらるゝにありき。學校内は薄暗くして讀み書きをのみ責められ、誰が見ても學校は樂しき場所と見えず。活動的の生々したる兒童は却りて苦々しき罰を受けき。

此時に當り、パセグツは其新主義に依りて「汎愛院」を立てたり。創立の趣旨は千七百七十六年公衆に對し宜言したる書に明なり、曰く「幸福なる少年時代に有効なる學問を爲さしめんとする諸君は其子弟を我が汎愛院に送れ、我が學校に於て教育せんとするは舊教徒にあらず、又新教徒にもあらずして眞の基督教徒なり、我が教育の目的とする處は、毫も罪惡に染まず、社會に立ちて有用なる活動をなす處の歐洲人を造るに在り。我が學校の主とする處は人を有徳にし常に樂しみて善をなすが如き人を作るに在り。然るに現今斯くの如き人物を養成する處の系統ある思想を有する人幾人かある。我學校にては斯くの如き人物養成の一學科として宗教を探る。而も吾人の教ふる宗教は合理的の宗教にして哲學に叶へるものたらざるべからず、我學校の信仰にては神を此宇宙の創造者、保存者、及び監督者として見る外には細々しき信仰個條を守らしめず。宗教已に自由なり他の學問に至りてはもとより無理に兒童を強ひらることなし。而も我等は諸君に約す、我が教育法の優れたることと、博愛的の旨に叶へることと、又人間生活の自然の性に叶へる事とに依りて普通の學校に於けるよりは二倍の進歩を爲さしむ可し。殊に

吾人は兒童の思考力の眞の働きを練らしむる事によりて、健全なる道理心を十分に發達せしむる事を約す可しと。此宣言と共に氏は有志の人々に彼れの學校を參觀せしめんが爲めに招待せり。

汎愛院には寄宿舎の設けありて富豪の子弟と貧民の子弟とを別にせり。富豪の子弟は、睡眠八時間、食事及び遊戯八時間、課業六時間、手工二時間とし、貧民の子弟は睡眠八時間、食事及び遊戯八時間、課業二時間、手工六時間とし、是等の教育的事業を施す原則は一に自然に従ふにあり。故に此學校にては兒童の自由を許して毫も是れを檢束せず、強ひて宗教を教へず、先づ國語を教へ、拉丁語は後に至るにあらざれば教へざりき。其教へたる事柄は、第一人類學、第二動物學、第三植物學、第四礦山學及び化學、第五數學、第六商品、第七歴史、第八商業、第九郷土科、第十手工なり。而して是等の學科の教授法は、すべて實物に訴へて教へたり。當時の學科が古典と宗教とを主としたるに反し、此學校にては凡て實科に關するものを教授したり。尙此學校に於ては當時一般の教育と反し、大に身體の發達に注意し、體操を學校課程の一つとせり。之れには此學校の教師たりしグロツ、ムーツ

大に與りて力ありたり。バセダウ言ふ、兒童は運動と騒ぐ事とを好む。此所に自然の意味なかる可らずと。かゝる意見より氏は大に體操を獎勵せしのみならず、又遊戯に注意し各種の遊戯を工夫し、之れによりて、身體を練らしむるのみならず、又智識をも練らしめん事を計れり。

汎愛院は斯くの如き新らしき方法を取りて大に世間の注意を惹起せしも、一般の父兄はよく氏が教育趣旨のある處を理解するに至らず、却りて此學校は兒童を無信仰に導くものなりとの攻撃を受け、又此學校の教へ方は、學問の威嚴を汚して兒童を通俗的に陥らしむるものなりとの批難を受け、加ふるにバセダウ其人の性格不規律なる處ありしよりして部下を統御して校務を圓滑に舉ぐることを得ず。斯くの如く外部よりの攻撃に加ふるに内部の統一を缺き、爲めに發達すべき希望を有しながら次第に衰頽に傾き、遂に氏が死後僅かに三年、即ち千七百九十三年廢校の止むを得ざるに至れり。カントの如きは其廢校に歸せるを痛嘆して、其主義は善良なるも、施設其宜しきを得ざりしが爲め、斯くの如き末路に至れりと言へり。而もバセダウが人類の友として新教育を實地に世間に示し、實科的教育を重んじ

新教授法新訓練法を施して大に小學教育の進歩を促したる影響は永く存し、殊に其門弟に二人の有名なる人を出せり、カムペ(一七四六—一八一二)、ザルツマン(一七四四—一八一二)是れなり。

第四節 バセグウ一派に對する反抗　バセグウ一派が新教育の如何なるものなるかを實際に示して大に世人の注意を喚起するや、先づ第一に宗教家の側よりして人を無信仰に導くものとの攻撃を受け、第二に獨逸の新人文派と稱する古語の研究、獨逸國民精神の涵養、及び趣味養成を以て教育の第一義と主張する一派の攻撃を受けたり。新人文派の主なるものを、ゲッテンゲン大學の語學教授たりし、エルネスチー(一七〇七—一七八一)及び愛國的詩人として有名なりしハイネ(一七二九—一八一二)となす。これ即ち美的教育の主張者が實科的教育の主張者に向ひて戦を挑みたるものと見る可し。但し此時代の文學者が凡て是に反抗したるにあらず、ゲーテの如きは却りてバセグウの教育事業を助けたるとは前にも述べしが如し。此派の主張する處は拉丁語、希臘語の研究に重きを置き、之を以て教育の根底となすにあり。彼等は斯かる古典は人心教化の價值を含めるのみならず、又

實際的利益多しとなす。彼等は思へらく古典の研究は訓練上偉大の價值を有するのみならず、人の趣味を啓發し人心に力を與ふること極めて大なるに加へ、此等の古典を解するに依りて、現今歐洲の諸國語は希臘語拉丁語より出てたる所あるを以て今日の言語と思想とを理解することを得と、斯くて彼れ等は現在の國語及び自然科學を輕視し、古典を以て人物養成の主要なる科目となす。シュミット能く此派の意見を紹介せり。曰く第一、古典は眞の教化の基礎たり、古典の研究は單に夫自身にて人心を訓練する價值あるのみならず、又人間智識の凡てに關す。宗教、法律、醫學、哲學、修辭學、史學等皆源を希臘羅馬に發せり。第二、文法を研究することに依りてあらゆる學問を研究する基礎を得べし。文法は言語の眞の意味を理解するに缺ぐべからざるものなり。而して此文法の研究は近世語の教授にては學ばれず、古典の法則を研究するに由りて初めて得らるべし。第三、自然科學を除りに早く兒童に知らしむるは不可なり、是れは後に専門的に研究せしむ可きものなり。普通の學校に在りては、有ゆる學問の基礎となるべき言語の修練を主と、科學の如きは専門の學校に於て教授するを可とす。第四、古典の研究を以て、實際に益な

しと思ふは誤なり。何れの國か、いやしくも物知りと言はるゝ人にして希臘語拉丁語に負ふ處なきものあらんや。凡て餘りに早く有形の科學を學ばしむる時は、却りて心を狭くし、人物を養成する所以にあらず。要するに古典の研究を離れては、確實なる教育は行はれずと。更に此派の一人ニータムメルは能く此新人文派とバセダウ一派との對照をなせり。曰く、第一、人文派は人心全體の教化を、目指すに、汎愛派は實利を目的とす。第二、人文派は心力を練り、之を強めんと計るに、汎愛派は、只無用の知識を以て其心を満たさんと勉む。第三、人文派は僅かの學科を以て人を教育せんとし、汎愛派は無暗に多くの學科を以てす。第四、人文派は古人の高尙なる思想によりて兒童を教化せんとするに、汎愛派は卑近なる事物を以てす。第五、人文派は眞善美を以て人心を教化するの要素となすに、汎愛派は物質的のものを以てす。第六、人文派は過去の寶を以て教化せんとするに、汎愛派は現在のものを以てす。第七、人文派は學問を眞面目の事業となすに、汎愛派は之れを一の遊戯となす。第八、人文派は僅かの者を完全に理解せしむるに、汎愛派は多くの者を淺薄に知らしむ。第九、人文派は記憶を練り智識の貯蓄を計るに、汎愛派は之を怠

ると。

かゝる意見を抱く處より此派は汎愛派に反抗して、大に古典の人物養成に價值ある事を説き、科學的實科的教育に對して、文學的人文的教育を主張し、獨逸の兒童をして高尙なる趣味を有せしむべきを説けり。斯くて彼等は從來の古典中學に據り、且つ大學に於ける古典の研究を獎勵し、科學的教育に反抗せしが、而も科學的教育の勃興し來る勢を壓倒すること能はず。其結果十九世紀に於て、從來の古典中學の外に、實科中學を設けざるべからざるに至り、古典中學は古典に重きを置き、實科中學は科學と近世語とに重きを置き、て教育するに至れり。

Give me for few years the direction of education, and I agree
to transform the world.—Leibnitz.

數年間余に教育の命令權を興へよ、左すれば余は能
く世界を改造せん。
ライブニッツ

第十八世紀の教育 (其二)

第五節 カント カントは近世哲學史上に於ける大立物にして、其性格の謹嚴にして學術研究に熱心なる、獨逸大學教授の模範と稱せらる。教育上に於てはバセダウと均しくルソーの影響を受け、エミールを讀みて大に刺激せらるゝ所あり、エミールを讀みたる折には感動せる餘り、終宵眠らざりきといふ。バセダウが汎愛院を建つるや、熱心に之が成功を祈り、其失敗するや、意外の結果に終れりと痛嘆せり。氏は大學に在りて教育學を講ぜざりしも、時々教育につきて講義せしものを、氏が弟子テオドル・リンク、教育學に就きてと題し、氏が死する前年に出版せり。所論悉くルソーに依れるにはあらざるも、新教育を起さんとする思想は明に認むることを得べし。

氏は千七百二十四年、獨逸のケーニヒスベルヒに生れ、長じて此地の大學に入學し、卒業後九ケ年間家庭教師となり、己が好む所の哲學を研究せり。氏が教育意見は此間の經驗に基づく所多し。千七百五十五年、私教授としてケーニヒスベルヒ大

學に就職し、十五年間其職に勵み、千七百七十年、齡四十六の時、始めて哲學の教授となり、千七百九十七年、老病を以て退かざるべからざるに至るまで其位置の爲めに盡せり。

氏は其教育意見に於て、先づ人と動物とを比較し、動物は本能に支配せられて、發達する性質を有せざるを以て教育を要せず、教育を要するは唯人のみにして、人の人らしくなるは全く教育の力に依るといひ、其人を教育する目的は人が自然に附與せられたる力を發達せしめ、人間の運命を成就するところに向けしむ可しとせり。斯くの如き目的は決して一時代に完成せらるべきものにあらず、時代に時代を重ねて人間の共同目的を達せざる可らず。人間の共同目的とは此世界が善に進み行くことなり。乃ち教育は此世界共通の善を進むることを其理想とし、一代又一代、努力に努力を重ねて此目的を達せざるべからず。此故に兒童は世界の市民として教育せらるべく、決して現在の爲めに兒童を教育すべからず、須らく人間將來の運命の爲めに之を教育すべし。

かゝる人間を造るには第一に其體育に注意すること必要なり。兒童の身體は勉めて之を活動せしめ、同時に衛生上の明瞭なる智識を興ふべし。快樂に耽らしむる事なく、忍耐節制の必要を知らしむ可し。遊戯と體操とは身體を強壯ならしむるのみならず、自信敢爲の氣象を養ふ。第二には其心を開發すべし。心を開發するには、先づ作業を課す可し。作業は一定の目的に其努力を注ぐものにして、其れにより勤勉の徳を養ひ、同時に種々の智識技能を得しむ。心の開發に於ては推理判斷の力を練らしむ可く、此力を練らしむるには、數學最も効あり。教授の形式としては、ソクラテスの如く問答法を用ふべく、かくして得たる智識は盡く實地に應用せしめざる可らず。第三には、其人となりて徳化すべし。一體教育は、人を教化し、開化し、遂に徳化する事業なり。兒童を徳化するには、先づ道德的の命令に依らざる可らず、道德的の命令によりて、徳行の何たるかを示し、之を其自由意志と結合せしめざる可からず。次には道德的の教化を施して善の何たり惡の何たるかを知らしめ、如何なる主義を行爲の根本とすべきかを知らしめざる可からず、主義一度定まらんか、是には義務の念より絶對的に従はしめざる可らず。主義に従ふは他より強ひらるゝにあらず、自己の自由意志に依り、自らの理性に照して服従するもの

なることを知らしめざる可らず。斯くして従順、誠實、友愛及び公平の徳に馴れしめ、以て世界的市民たる徳性を完成せしむべし。此徳性の涵養には宗教的教育必要なり。而も宗教は徳性の養成に必要なが故に取るべく、宗教ありて茲に道徳ありとは見るべからず。宗教の要は、吾人の良心を神の現はれと見、此良心の本たる神を敬し、我良心と神と相照さしむるにありて斯くの如くにして同胞に對する友愛、公平の徳を一層深くすることを得べしと説けり。要するに氏の教育意見はルソーに刺激せられたりといへ、己れ一個の見解を有し、教育の目的に於ては世界主義を取り、其方法に於ては嚴格主義を取れり。此世界主義を時勢に驅られて、フイヒテは國家主義と爲したり。

第六節 フイヒテ氏は千七百六十二年、獨逸上部ルサチャのラムメノーに生る。幼にして知力あり且つ道徳的意志に富めるを以て注目せられき。十八歳にして神學研究の爲めエナ大學に入りて哲學に興味を感じ、熱心にスピノザを研究せり。然るに學資十分ならずりし故、所々の家庭教師となり、後瑞西に赴きて家庭教師を務め、千七百九十年歸國し、ライプツヒに私塾を開けり。此時カントの知遇を受け、

カントの勸によりて著述を公にし、爲めに名聲頓に擧り、遂にエナ大學の哲學教授に擧げられたり。當時エナにはゲーテ、シレーゲル兄弟、ウエルヘルム、フォン、フムホルト等ありて獨逸學術界の中心となれり。千七百九十三年氏は其友ニータムメルが編輯せる哲學雜誌に宗教意見を公にせしが、無神論を抱けりとの批難を受け、遂に職を辭せざるべからざるに至り、伯林に來りて私塾を開けり。千八百六年佛帝ナポレオン一世來りて普魯西を蹂躪するや、フイヒテ憤慨に堪へず、獨逸國民に告ぐと大演説を読み、教育に依りて國民を改造し、此屈辱を雪がざるべからずと絶叫せり。幸に當時の普魯西王フリードリッヒ、ウエルヘルム三世、國運を恢復するには一に教育の力を借らざるべからざるを感じ、千八百九年に伯林大學を起せり。フイヒテ此大學の創設に盡力し、始めに教授に擧げられ、後總長となりて、大に盡力せしが、千八百十三年に及び、普魯西國民、佛帝の壓制に堪へず、遂に起ちて、自由軍を起すや、フイヒテ之に投じ、氏が妻は亦看護婦となりて軍に従ひ、大に士氣を鼓舞せしが、陣中の傳染病に襲はれ、翌年一月二十八日遂に恨を呑んで没せり。

氏はカントの思想の影響を受けたと共に、亦自己の哲學意見を有せり。謂へら

く此宇宙の本體は一大活動的の「我」にして、此「我」が之に對抗する「非我」を征服し、之を理想化して漸次善美の境に赴く。これ即ち宇宙の道德的秩序なり。此宇宙の大法を承けて人は生る。故に人の道德的進歩も亦段階あり。第一段は全く自然の衝動に驅られて少しも自由を有せず、第二段は我意志を以て外界を征服せんとし、稍々道德的自由を有す、第三段は自ら其道德心に従ひ、獨立自由にして國家と世界とを理想化し、以て宇宙の道德的秩序の發展を助く。これ道德の極致にして、眞の道德は其意志が自由に於て潔よく其道德心の命ずる所に従ふ點に存す。人の人たる價值茲に至りて始めて現はる。而して人は孤立するものにあらず、一の協同社會の一員としてそれ〴〵の職業を有して其道德的目的を果さざるべからず。即ち人間相互の力を併せて以て國家社會を進め、宇宙の道德的秩序を助けざるべからずと。此哲學意見、其教育意見の根底に横はれり。

氏が教育意見の最も能く現はれ居るは其「獨逸國民に告ぐ」といふ大演説なるが、此演説は十四章に分れ、初めに其謂ふ新教育の意義を説きて之を舊教育と比較し、獨逸の國家は新教育に依りて始めて救はるべきを述べ、遂に其國民教育の方案に及

べり。氏いふ國家を組織するものは各個人なり、而して其各個人の價值は其内部の意志の訓練に關す。こゝを以て國家を改造するには、須らく之を組織する所の各個人の内部の意志の訓練を本とせざるべからずと。

教育の目的は意志の自由を有して國家社會に盡し、宇宙の道德的秩序を助くるが如き人を造るにあり。所謂意志の自由とは、野卑なる欲情に制せられず、高尚なる道理心の命をこれ奉じ、以て其道德上の任務を果す所の強健にして且つ自由なる力を指す。此くの如き意志の自由を得しむるには、もとより知力の開發を計らざるべからず、又其意志を實行する手立となる體力を練らざるべからず。しかも此知育體育は自由なる意志を練る方便たるべきものにて、教育究極の事業は、堅忍不拔にして獨立に自由に道理心の命に従ふ所の意志を練らざるべからず。かくして始めて氣力ある國民を造ることを得。

舊教育は果してかゝる目的を目指して施したりしか。新教育は高尚なる道理心を養成し、以て共同生活を進むるが如き人を造らんとするに、舊教育は卑しき感情の満足を基とせり。舊教育は單に利己的感情の満足に訴へたり。斯くの如き教

育を受けたるもの、如何にぞ國家社會を發展せしめ、宇宙の道德的秩序を伸ばすことを得んや。新教育は敢て自愛心を排斥するにあらず、寧ろ之を基とするも、而も新教育は此自愛心を擴張して、國家社會を理想化し、一大「我」たらしめんことを要求す。舊教育は宗教を重ぜざるにあらず、而も又利己的の傾向を免れず、來世の苦樂を説きて勸善懲惡の動機たらしむる如きは、全然宗教々育の本旨を誤れるもの、新教育は正しき道を踏みて以て神の恵に答ふべき事を要求す。舊教育は又道德、法律の思想を興へ、社會の秩序の重んずべきことを知らしめざるにあらず、而も其社會と我とを別物の如く數へ、之を全然同一視し、社會の秩序を守るは即ち己が道徳心の命に従ふ所以なることを教へず、新教育は道德法律を教ふる事によりて個人の意志を陶冶し、國家社會の爲めには己が一身を抛つに躊躇せざるが如き人物を養成せんことを要求す。舊教育は又其教育を一階級に限り、同時に女子教育を看過せり。新教育は國家の兒女全體を擧げて教育せんことを要求す。是れ高尚なる道徳的の共同生活を營まんが爲めに必要なればなり。「人は國家社會の一員として教育せらるゝを要す。」各兒童は一様に學習し、作業せしめざるべからず。之が爲

めに學校に校舍校具を備ふべきは勿論、學校の基本財産として學田を有す可し。若し生徒にして學校の共同生活に服せざる如きものあらば嚴に之を罰するも妨げなしといへど、其以外に於て罰は狼りに施すべきものにあらず。氏は此の共同の精神を養はんが爲めに、大に歴史教授に重きを置き、尙共同の精神を養ひ、意志の修養を計るために、古の希臘人の如く體操に熱心なれと説けり。

斯くの如く國家教育を盛にして一に獨逸の進歩のみを計り、毫も他國の利害を念頭に置かざるか。フヒテ答へて曰く「我が非我を理想化するは即ち道德の根本にして、獨逸國が宇宙の倫理的運動を擔ひ、大なる「我」となり、以て諸々の道德に従はざる「非我」の國々を獨逸化するは、即ち世界の共同生活の目的を達する所以にして、同時に宇宙の道德的秩序を助くる所以なりと。かくして眞に國民を作らんとせば、教育に由るの外に途なく、國家の盛衰興廢は、一に教育の如何に由るとなし、各個人の體力、智力、道德力を高めて以て獨逸の國運を回復せん事を熱望せり。

第七節 シュワルツ及びニーマイエル フヒテの外カントの教育思想を承けて教育の事業に盡瘁したるものに、シュワルツ及びニーマイエルの二人あり。シュワルツ

はハイデルベルヒ大學の教授として、教育學を著はし、教育を人類學委しくは生理學及び心理學に基づけて研究し、人類が自然に固有せる心力と體力とを其發達の順序に依りて圓滿に發達せしめ、以て神に似たるが如き圓滿の人を造るべしと説けり。氏の功績として殊に記すべきは、教育史の研究が氏に依りて發達し、世人をして其必要を認めしめたることなり。

ニーマイエル(一七五四—一八二八)は、ハルレ大學の總長となりて教育に従事し、教育學の著あり。氏はカントの外、フランケの影響をも受けたり。氏に従へば教育は人の自然の性、委しく言へば其理性を啓發し、其心力を強め、其意志の自由を得しむるに在りとす。十九世紀に至り、科學的教育學を建てたるヘルバルトは、氏の感化を受けたり。

第八節 ヘスタロッチ ルソーの教育意見は、幾多高才の人を奮起せしめしが、東西のヘスタロッチの如きも、又ルソーの意見に影響せられて起りたる一人なりとす。氏は十八世紀の後半より、十九世紀の前半にかけて教育の爲めに働き、其一身を教育の犠牲に供せり。氏はコメニウスに次げる教育改革の大家にして、其影響

は廣く歐米一般に及びたるが、其事業は寧ろ十九世紀の前半に涉れる所多きを以て、茲には唯氏が十八世紀に出でたることのみを記し、次の世紀に於て委しく述ぶる處あるべし。

第九節 獨逸の文學者 十八世紀の後半には、獨逸に有力なる文學家輩出し、各其意見に従ひて教育の發達に盡力せり。先づ初めにレッシング(一七二九—一七八二)あり。氏は人類全體の發達と一個人の發達とは相似たるものにて、其個人並次に人類全體の發達の目的とする處は、即ち人道の發達にあり、従ひて教育も又此所に着眼せざるべからずと説けり。其賢人ナタンの如きも、宗教は種々に異なるも皆人道の發展を計る點に於て一に歸すといふ趣旨を説けり。

ヘルデル(一七四四—一八〇三)は、人間の歴史の哲理といふ書を著し、此中に教育意見を發表せり。即ち歴史の發展を以て人道の發展と認め、人道はあらゆる時代を通じて走る處の根本原理にして、各國民の歴史は人間の威嚴の最上位に達せんとする奮勵の記録と見るべきものなりと説き、教育も従ひて人道の發展を成就する事に向けざるべからずと説けり。

ゲーテ(一七四九—一八三二)は十八世紀末に於ける最も大なる詩人にして、一種の
 人世觀を有し、其の「ファウスト」はもとより、「ウイヘルム・マイステル」「ヘルマンとドロ
 テア」自然の娘の如き、皆教育的趣旨を含める著作なり。氏は人には、それ〴〵異り
 たる性質あれども、皆均しく人道の光明を望みて精進せんとす。故に人の個性は
 決して抑ゆべきものにあらずして、寧ろ助長すべきものなりとせり。蓋し個性は
 即ち其人の價値の存する處にして、従ひて其個性に依りて各々人道に進ましむる
 如く教育せざるべからず。此の故に男兒の教育と女兒の教育とは其間に自ら區
 別あるべく、男兒は男子らしく女兒は女子らしく教育せざるべからず。男女兒が
 初めて教育せらるゝ場所は家庭なり、家庭の教育は人の一生の運命に關す。「母は
 自然の教育者なり」。兒女長ずるに及んでは之を世の激流中に立たしむべし。「才
 能は靜なる中に熟すれども品性は世の激流の中に成る」。斯くの如くして男女各
 々其個性を完成し、同時に人間の運命を成就せしめざるべからずといふもの、氏が
 著作の間に現はれたる教育觀なり。

ゲーテの友にシルレル(一七五九—一八〇五)あり。シルレルは「哲學的詩人」と稱せ

られ、熱心なるカント哲學の研究者にして、教育に就きて其考を致せる所少からず。
 氏は教育を以て人間の圓滿なる發達を計るに在りとなし、而して其圓滿なる發達
 とは美的生活を意味するものとなし、美的教育論を著し、此論に於て美的教育は其
 結果、道德的感情を高め、高尚なる品性を造るに極めて大切なることを述べたり。
 次にリヒテル(一七六三—一八二五)あり。氏も又心を教育に向け、羅馬の神話に於
 ける家庭の神の名を取り、「レヴァーナ」と題する教育論を著し、大に家庭教育と感情教
 育との必要を鼓吹せり。

以上の文學者は共に人道の教育、感情の教育を主張し、一方に宗教に偏せるが如き
 人を造らんとするに反對し、他方に又實利的機械的の人を造るにも反對し、大に人
 道の教育を主張し、獨逸の國民教育を健全に導かんことを力めたり。

第十節 佛國の文學者 佛國には百科全書派と稱する一團の文學者ありて、一般
 の人をしてあらゆる智識を一目の下になるべく早く而も容易に會得せしめんと
 力め、百科全書二十八冊を發行して以て一般人の知識を啓發せんことを企てたり。
 其首領とも見るべきは、デイデロー(一七一三—一七八四)にして、氏の意見によれば、宇

宙は自然法によりて統一せられ、以て活動しつゝあるが故に、其宇宙の間に存する自然法も之を一括して一般人に了解せしむる如くすべしといふにありて政治、法律、宗教、道徳も亦自然法を本として説けり。従ひて當時の宗教道徳を破壊したる點もあれども、亦大に一般の知識を廣めたる點もありき。

第十一節 自然科学の進歩 十八世紀に於ては、文學者が教育の進歩に盡しゝのみならず、自然科学者は亦自然の理法を明かにして、教育界に向ひ、自然に關する新材料を供給し、教育を益々實科的に導く道を開くに至れり。天文學者には佛のラブレースあり、物理學者には英のニュートンあり、植物學者には瑞典のリンナウスあり、電氣學者には伊太利のガルバニあり。其他生物學、地質學などにもそれの學者出て、之を研究し、其結果大に一般人の知識を開發し、兒童の心を多方面に開發すべき機運を促せり。

第十二節 國家教育制度の確定 十八世紀に至り、國家教育制度は愈々其基礎を固くし、以て中世紀以來宗教が握りたる教育の權を全く國家の手に奪はんとするに至れり。是れ蓋し國家と國家との競争激烈となり、各々其國民の體力、智力、道徳

心を高むべき必要を認めたるに基づき、同時に此世紀に起れる個人主義の叫び聲に覺され、下層の階級の者の權利をも尊重し、個人の自由平等を全ふせんとする精神に出でたり。此運動は英佛獨、共に同時に起りしものなるが、就中獨逸の普魯西を以て其先驅と認むべし。

第十三節 獨逸の學制 獨逸の普魯西に於ては、フリードリヒ一世(一六五七—一七一三)深く當時の教育家ランケを信用し、教育上の法令を出す毎に、氏と諮り、教育の權を國家の手下に統一せんと企て、次ぎてフリードリヒ、ウイルヘルム一世(一六八八—一七四〇)位に即きて、先王の志を繼ぎ、千七百三十六年に教育令を出して普通教育を起すべきとを命ぜり。次ぎてフリードリヒ、大王(一七一二—一七八六)位に即くに及び、ランケの弟子ヘッケル(一七〇七—一七六八)を擧げて教育顧問となし、千七百六十三年に普通學校令を出し、全國の兒女五歳より十四歳迄のものは皆小學校に送り、宗教の大意を學び、讀書、算術の力を得しめざるべからずとなし、かくの如き普通教育を等閑に附する父兄は、必ず相當の處罰を受くべき旨を規定せり。是れ即ち現今獨逸の小學校令の本となれるものなり。フリードリヒ、ウイルヘ

ルム二世(一七四四—一七九七)に至り、大王の志を継ぎ、千七百七十四年に普通國法を出し、教育事業を國家行政の一部として規定せり。フリードリッヒ・ウィルヘルム三世(一七七〇—一八四〇)位に即くにおよび、佛帝ナポレオン一世より破られ、其の國力を恢復せんが爲めに大に教育振興の策を講ぜしが之れは十九世紀の事に屬す。

第十四節 佛國の學制 佛國も亦此世紀に國民教育の制度を確立するに至れり。其初めはジエジュイット派の形式的の宗教々育を排斥するに起り、遂に教育の權を國家の手に奪ふに至れり。之に對し、ラ・シャ・ロッセ及びローラン革命前に働き、タレイラン、コンドルセの二人革命後に働けり。佛國に於て其革命以前は國民教育萎靡して振はず、男子の百分の五十三、女子の百分の七十三は自ら其結婚の宣誓書に自己の姓名を書すること能はざるが如き状態にありき。此時に當りラ・シャ・ロッセ(一七〇一—一七八五)出で、大に普通教育の必要を説けり。氏はエミールの出版せられし後一年、國民教育論を著はして、ジエジュイット派の教育を攻撃し、公立の教授は政府の事業たるべく、宗教家にして教師の位置にある者に代ふるに俗人の教師を

用ひ、宗教的の學校を廢して公立の學校を創設すべしと主張せり。氏は人もし佛國に來り遊ぶ者あらば教會と拉丁の殖民地とを作りつゝあるを見るべし。死語を研究し、或は寺院的の訓練を施すことによりて、如何にして軍人を作り、國家の施政者を作り、或は家族の主宰者を養成し得べきやと言ひ、深く宗教的教育を批難し、國家的教育の起さざるべからざる必要を説き、宗教より離れて道德、政治の知識及び此の世に立ちて働く上の生命あり活氣ある知識を與ふべき必要を痛論せり。氏に次ぎて巴里の國會議長たる、ローラン(一七三四—一七九四)は千七百六十八年に自己の學制意見を發表せり。氏の案によれば、公立學校の學制として第一に小學校を置き、第二に中學校を設け、第三に進んで専門學校を置き、第四に大學校を設くべし。而して是等四種の學校に於て教育の任に當るものは純然たる俗人の教師を以てすべく、是等の教師を養成する目的を以て師範學校を設くべし。而して其各學校を監督する爲め、視學官を置き、其視學官は必ず中央教育行政機關に屬せしめざるべからず。此機關を名づけて通信局といひ、是れに教育の全權を委ね、而して佛國中如何なる場所と雖も其教育は悉く同一通信局に依りて纏められ、從ひ

て、同一の教育方法を探り、同一の制度の下に其子弟を教育して國家的精神の養成に勉むべしとせり。

程なく佛國革命は來れり。此革命によりて佛國全體の舞臺は一洗せられ、教育上にも又革命を起せり。此革命の當時に教育制度を一新せんことを企てたるを、タレイラン、コンドルセの二人と爲す。

タレイラン(一七五八—一八三八)は即ち革命以後に於て新政府の教育制度の改革に盡力したる人なり。千七百九十一年九月三日、新政府に依りて發せられたる憲法に各市民に共通なる公立教授の系統は組織せらるべく、之に對しては無謝儀の制を取るべしと規定せしは氏の助言に依れり。氏はモンテスキュー(一六八九—一七五五)が教育の法令は國家の法令中の一部を占めざるべからずといへる原則を奉じ、又無學は則ち人民を不自由にするものなれば其教育を進むるは之を自由にする所以、同時に人の平等の權利を伸ばさしむる所以なりとの考より、大に學制改革に盡力せり。教育はすべての者に共通たるべく、町に於けるが如く村にも學校あるべし。教育を受くる上に特權はあるべからず。而して其教ふることは、すべ

て人生の交際問題に觸るゝものたるべし。「能く組織せられたる社會にては、假令人々一切の知識を有するに至らざるも、少くともあらゆる事を學ぶに適せざるべからず。」これ氏に一貫せる思想にして、氏は初等教育より通じて高等教育に至るまで、人權問答、言ひ換ふれば政治法律の思想を與ふべきことを殊に強く主張せり。之と同時に氏は宗教教育に反對し、普通の道德の教授を重んじ來れり。氏曰く、道德は一の獨立なる科學として教へらるべく、其原則は各人の理性に依りて承認せられ、又各時代の人に依りて承認せらるゝものたるべしと。宗教と教育とを區別せんとする意見頗る明なり。氏に依れば學校制度は分ちて小學校、中學校、專門學校及び大學の四種と爲す。小學校の教科は、國語、算術、初歩、宗教大意、道德及び憲法の大意にして、體力、智力、及び道德力の發達を期すべく、女兒の教育も亦男子と同様なるを要すとせり。

コンドルセ(一七四三—一七九四)も又佛國革命後新政府の命を奉じ、一千七百九十二年に公立教授の案を立てたり。氏は深く自由平等の精神を重んじ、自由平等の理想を實行せんには教育の力に依りて人民の無智を開き、かくて、一時代は一時代

より進歩し行き、遂に自由平等の域に達せしめざるべからず。人民が不徳に陥り、其自由平等を全うし得ぬは、畢竟無智より來る。故に酒の瓶に代ふるに書籍を以てし、飯食店に代ふるに圖書館を以てせざるべからずとせり。其公立教授の制度は分ちて尋常小學校、高等小學校、中學校、高等中學校、及び國立學藝院となし、尋常小學校に於ける教科目は讀書、習字、算術、農業、工業の大意及び倫理法制の大意とし、進んで高等小學校に至れば加ふるに地理及び歴史の二科を以てすべしとし、ダレイランと同じく女子教育の男子教育と共に行はれざるべからざるを説き、女子は子を育つる自然の教育者なるが故、其夫を助けて社會的生活に當るべきが故、無學は不徳の本なるが故、男女兩性均しき教育を受くべきは、其權利なるが故に、之を等閑に附するは、人權を無みし社會的生活を危うするものなりとせり。

第十五節 英國の學制 獨逸に於ても佛蘭西に於ても、學制改革が進歩せしに拘はらず、英國の教育制度は格別改められざりき。當時英國は思想界に於ては極めて重要な位置を占めたりと雖、其特質とも見るべき保守的の習慣は、急に其國民を促して教育制度の改善を爲さしむるに至らず。古典を中心として教育する中

學校の如きは、依然として其態を改めず、小學教育に至りては、國家は殆んど干渉せず。彼の富國論の著者として有名なるアダム・スミス（一七二三—一七九〇）の如きは、其國を富まし國を強からしめんが爲めには、偏に教育の力をかり來りて國民一般の智能を啓發し、訓練せられたる徳性を有せしむるを必要なりとし、國家は自ら教育の權を握り、以て國民を教育する所の學校を設立し、併せて是れが監督の任に當るべき所以を當路者に建議せしことありしも省みられざりき。素より英國に於ても普通教育の必要を認めざるにはあらず。しかも、之は私人の慈善事業に任したりしより、所謂貧民學校の設立は續々として現はるゝに至れり。千六百九十五年に創立したる、基督教的知識普及會は此世紀に至りて漸次その事業を擴張して、多數の無謝儀の學校を起し、千七百六十一年には日曜學校の創立を見るに至り、千七百八十五年には、日曜學校保持獎勵會なるもの起りて、益々日曜學校の隆盛を計れり。是等の學校に於ての課業は宗教を中心とし、讀書算術の初歩を教へき。

第十六節 十八世紀教育の批評 第一に十八世紀の教育を教育目的の上より見れば、此時代は中世紀の弊風を一洗し、古典若しくは宗教を中心とする教育を排除

し、新教育を起さんとし、其養成せんとする理想の人物も従來とは異なれり。此世紀に於て一時勢力を逞うせしジューニット派も全く教育界より其勢力を失ひ、新教育は國君、施政者、哲學者、文學者等よりも等しく注目せられ、社會各方面の注意の教育に向けられたること従來に無かりし所故に、此時代を呼びて「教育的時代」と稱す。教育的時代の教育目的の大體の傾向ともいふべきは、一切の教權を脱して全く新たなる人を造らんとするにあり。所謂新たなる人とは合理的の宗教心を有し、同時に實科的智識を有して現社會に十分活動し得るが如き人を指すにありて、科學的實科的傾向を彌々明に帶び來りたりといふべく、之を心の方面より見れば、知の人を作るに急にして、情の人、意の人を作ることは怠られ、之を社會的方面より見れば、國君もしくは執政者は國家主義によりて、其國民を教育せんとしたるも、教育家、哲學者の大體の傾は寧ろ國家主義に反し、個人主義、或は世界主義の見地に立ちたり。之が反動として十九世紀には理論の上よりも、國家主義、社會主義の教育唱へらるゝに至れり。

第二に以上の如き人を作る教育方法の上より言へば、教授の材料として、従來宗教

と文學とに偏したるに際し、自然の材料、實業の材料、又社會に關する材料殖え來り、而して成るべく是等を見童の心の自然の發達に従ひて教授せんとするに向へり。訓練も亦従來の苛酷の弊を脱せんとするに向ひたるも、教授が注意せられたる程は注意せられざりき。近世に於て遊戯體操が學校課程の一として實際に行はるゝに至りしも此時代に始まる。

第三に之を學說の上より見れば、十七世紀に於ては、コメニウスの客觀的自然主義の唱へられしを重なるものとせしが、十八世紀に至り、ルソーは英のロックの説を敷衍して、コメニウスの客觀的自然主義に對し、主觀的自然主義を唱へ、見童の心理の發達を研究して以て教育の目的方法を定め、バセダウはルソーの説を取りて實地に之を施し、大に新教育の發達を刺激せり。是れと同時にルソーの影響を受けたるカントの弟子、シュタルツ及びニーマイエルの如きは生理的もしくは心理の研究を基礎として教育學を組織する道を開き、而して瑞西に於てはベスタロッチ出で、ルソーの主觀的自然主義を承けて、十八世紀末より十九世紀の初に亘り、近世教育學思想の全體を握り、自ら之を實地にも行へり。教育を科學的に研究する

道は此世紀に十分に開かれたり。

第四に之を教育制度の點より見れば、此世紀に於て教育が國家の手に營まるゝに至り、之に伴ひて文部省の萌芽とも見るべき中央教育機關の設立を見るに至り、同時に小、中、大學が中央行政權の下に統一せらるゝこととなり、劃一教育の實施を見るに至り、教師の位置も國家事務の一部を行ふこととなりて其威嚴を加へ、専門に教師を養成する師範學校の創立を見るに至れり。尙此世紀に至り、女子教育の必要認められ、女子も男子と同様に教育せられざるべからざる氣運高まれり。

第九章 十九世紀の教育 (其二)

第一節 十九世紀教育の總說 既に説きしが如く、中世紀風の宗教的文學的教育は、十七世紀に至るまで其勢力を保持し、教授に於ても訓練に於ても、猶古典と宗教とが中心となりて教育事業を營みしが、世の進運に伴ひ、時勢の推移に従ひて教育理想も變遷し來り、中世紀風の教育は、遂に十八世紀に至りて其衰頽を來し、全歐洲に於ける教育は其面目を一新するに至れり。

十八世紀の教育は正に舊思想を排除して其方針を一變し、新學說に依りて新教育を起し、時代なるがしかも創設に急にして未だ建設の運に至らず。十九世紀の教育は、即ち是等の状態に於ける教育事業を繼承し建設せんと試みたる時代なり。十八世紀が中世紀より流れ來りし弊風を破壊して新舞臺を開きたる時代と見れば、十九世紀は其新舞臺の上に立ちて新なる活動を演じたる時代なりとす。従ひて教育學說の上にも、實際の上にも、又制度の上にも、共に種々なる計畫行はれ教育の發達大に見るべきものあるに至れり。而して其舞臺も是迄は先づ英佛獨に限

られたりしが、此世紀に於ては、全歐洲に教育的活動高まり、米國亦世界の教育國として之に加はり、其餘波引きて東洋諸國にも及び、日本、支那、印度諸國の教育をも振起せしむるに至れり。但し十九世紀に於ても、世界各國に亘りて、教育の理想は容易に定まらず、猶一の過渡時代の状態にあり。

十九世紀に於ける教育の真相を究めんとせば、先づ此世紀を動かしたる大體の思想の傾向を述べ置かざるべからず。蓋し是等思想の傾向と勢力とは、教育の上及び學說の上にも、實際の上にも、制度の上にも、少なからぬ影響を及ぼし、を以てなり。

其第一は國家的思想の著るく發達し來りしこと是なり。十八世紀に於ては、個人主義、世界主義唱へられ、ルソーの如きは、國民及び本國てふ文字を、辭書の中より削り去るべしとまで極言せしが、十九世紀に入りては、是れが反動と見るべき思想の變遷を生ぜり。即ち此世紀に於ては、國家と民族とを尊重して、世界主義を斥け、國家を以て社會の最も確かなる組織なりと考へ、種々の方面より國家の統一を計り、國民をして悉く國家的意識を有するが如くならしめんと計るに至れり。教

育は茲に國家を統一する最も大切なる事業と認められ、各國家は何れも其國費を投じて強迫的に其國民を教育するに至れり。教授の材料に於て國語と國史とを重んじ來り、訓練に於て愛國心を養成せんと勉むるに至りたるは此傾向の必然の結果なり。

第二は是と伴ひ歴史的思想の發達し來りしこと是なり。獨逸のヘーゲル一七七〇—一八三一が歴史哲學を唱へ、佛のラマルク一七四四—一八二九英のゲルウイン(一八〇九—一八八二)が進化論を唱へたるは殊に此歴史的思想の發達を促せり。十八世紀はすべて舊風を一洗せり、すべて歴史を破壊せり。十九世紀は歴史を意味あるもの發達を示すものと見、何事を爲すにも先づ其歴史的研究を試むべき必要ありとするに至れり。之が結論として、教育は歴史的發展を促がす重なる事業と見られ、時代に時代を重ねて世の開明を計るには、教育に依らざるべからずとせらるゝに至り、國語を教授するに當りても深く其淵源に溯りて研究し、歴史を教ふるにも單に政治上軍事上の變動を知らしむるに止まらず、廣く人間生活のあらゆる方面に於ける歴史的發展を知得せしむ可き方針を取るに至れり。

第三は生物學の見解の承認せらるゝに至りしことなり。植物動物は素より有機的關係を以て其生命を保つのみならず、人類によりて組織せらるゝ國家社會も又同じく有機的關係のもとに存立するものにて、國家社會は一の有機體と見らるるに至れり。國家社會既に有機體なりとすれば、その一分子とも見るべき個人が國家社會を離れて孤獨の存在を爲し得べき理由更らになく、個人主義は其根底より破壊せられ、個人は須らく國家社會の進歩發達を助長せざるべからずといふ社會主義は盛んに唱道せらるゝ事となりぬ。従ひて兒童を教育するに當りては、社會的意識を與ふるを目的とすべしといふ社會的教育學唱へられ、學校に於ける實際上の教授に於ても、社會を理解せしむるが如き學科を加へ、其他の學科すべて現社會を知らしむる如く教授すべく、訓練に於ても、主として社會的の道德心即ち公德の養成に力を注ぐべきことゝなれり。

第四は科學的精神の益々盛になりしことなり。科學的精神は、十七八世紀より次第に起り來りしが、十九世紀に至りては、科學は益々専門的に研究せられ、如何なる神聖なるものといへども、悉く科學的の見地よりして批評せられ、解釋せらるゝこと

となりぬ。教育に於ても、勢ひ其影響を免かるゝこと能はず。乃ち從來の教科目に加ふるに是等自然科學を以てするに至り、自然科學は人文的學科と對し、學校課程に於て主要の位置を占め來り、從來神聖とせられたる宗教の如きも、科學的精神を以て研究せられたる結果、之を各人に強ふることを止め、代ふるに一般に認めらるべき道德の教授を爲すに至れり。

第五は實業的精神の高まり來りしこと是なり。自然科學の應用によりて、機械は發明せられ、實業は發達し、交通の便は増して、物質的文明大に進み來り、爲めに國家社會の活動に大變動を起し、實業を以て國力を固めんと競争するに至れり。其結果として、實業的の専門學校は設立せられ、普通教育にさへ、實業的の學科加はり來らざるべからざる勢となれり。

斯くの如く、十九世紀の教育は、常に其舞臺の擴張せられたるのみならず、國家社會の狀態に大變動を生じて、種々なる教育的事業要求せられ、遂に今日見るが如き複雑なる教育を生ずるに至れり。今此複雑なる教育を説くに當り、先づ其新教育學說が出て、此新學說が如何様に實際の教育を改善し行きたるかを見、然る後教育制

度の發達に入り、如何にして今日見るが如き歐米諸國の教育制度が成立したるかを見るべし。

第二節 ペスタロッチ 十九世紀の教育を開きたる人は、ペスタロッチと言ふも不可なる所なし。近世教育史上、コメニウスを第一の改革家とし、ペスタロッチを第二の改革家と爲す。氏は千七百四十六年、瑞西のツールリッヒ府に生る。六歳の時父を亡ひしかば、母の手一つにて育てられ、極めて感情深く生ひ立てり。されば小學校に入りても、往々他生徒の爲めに凌がれたるが、其性質の順良にして且つ物に熱中する傾あるとは、夙に人の注目する所となれり。曾て氏が家に必要ありて、氏は其金を借る使に遣はされたるが、歸途會々一牧童の牝牛を失ひて道途に泣く者あるに逢へり。氏之を見て愛憐の情に堪へず、盡く其借りたる金を出して之に與へ、其禮を述べるを聞かじとて、耳を掩うて急ぎ去れり。十八歳の時、僧侶とならむとせしかど、初度の説教に失敗せし爲め、法律家に轉せむとせしが、大に健康を害したるより、田舎に引き込みて農業に従事し、一新宅を構へ、之をノイホーフと名づけたり。これ氏が二十一歳の時にして、後二年にして妻を娶れり。

かゝる幸福なる生涯の來れりと思ふ間もなく、氏が農業はすべて失敗に歸せり。氏決心して曰く、我が所有地をして教育事業と農業とを結合せる中心たらしめむと。是蓋し此以前、氏はルーソーの「エミール」を讀みて大に感奮し、教育に興味を感じたるに依る。即ち諸方より貧兒五十人を集め、且つ教へ且つ働かしめたるに、中には逃亡する者などありて、五年の後閉校せざるべからざるに至り。茲に氏は窮迫の餘、著述家となり、千七百八十年に「隱者の夕暮」、千七百八十一年に「リオンハルトとケルトロード」を出し、幸に世間の注意を惹き、大に氏の名を高からしめき。かくて暫くは、或は書き或は耕しけるが、千七百九十八年、スタンツ府は、佛兵の爲めに焼かれ、數多の孤兒を生じたり。氏即ち是等孤兒の父として、瑞西の政府より送られ、一寺院に、四歳より十歳までの孤兒八十人を集めたり。こゝにて氏はノイホーフに於けりしが如く、學問と手工とを一緒に教へ、家庭教育の精神を以て之を感化せり。氏記して曰く、一切の世話、一切の教授は、皆余自ら之に當らざるを得ざりき。我手は彼等の手と觸れ、我目は彼等の目と離れざりき。彼等泣けば余も亦泣き、彼等笑へば余も亦笑へり。彼等が食物は即ち余が食物にして、彼等の飲物は同時に

余が飲物なりき。余は何物をも有せず、家なく、友なく、召使なく、唯ある者は彼等孤見のみなり。余は彼等の中央に眠りぬ。余は夜には寢床に就く最後の者にして、朝には起き出づる第一の人なりき。余は彼等と共に祈りし、彼等が眠に就く前には、寢床にて彼等に教へきと。以て當時の苦境を察すべし。然るに千七百九十九年に、佛兵は又も侵入し來りて、此寺院を病院と爲し、かば、已むなく此學校を解散せり。

氏はこゝにブルグドルフに行き、一小學校の教師となりしが、同僚に氏を妬む者ありて、氏は此校を辭し、更に此地の古城址に、グルーヂーと呼ぶ教育家の一學校を立つるに加はり、相共に力を盡し、が模範小學の評を得たり。千八百〇二年、瑞西に内亂起り、瑞西政府は之が處置を佛國政府に一任したりしが、此時氏は佛國巴里に於ける談判委員に選ばれて出席し、此機を利用して、佛帝ナポレオン一世に其教育意見を開陳したる結果、帝は部下のネイ將軍をして、氏の教育主義を佛國に導く計畫を爲さしめたり。

然るに此學校も經費の都合にて閉ぢざるべからざるに至り、此所を距る三里許のブッフゼーの教師に轉ぜり。此所にて都合思はしからざりしかば、千八百〇五年に、イフエルテンに學校を開けり。氏を慕ふ所の生徒、直ちに此所に群集し、前に氏と共に働きし教師も亦來り助け、ブルグドルフに於けるよりは、一層の盛況を呈せり。會々此時獨逸は佛國と戦ひて敗北し、之を恢復するには、教育を盛にするに如くはなしとし、普魯西王フリードリッヒ、ウーヘルム三世は、熱心に氏の教育法を採用する方針を取り、其皇后ルイゼの日記中に、又屢、氏の精神に感服せる記録あり。かくて千八百〇八年九月、普魯西政府は、二人の留學生を氏の許に送りて、教授法を研究せしめ、丁抹和蘭よりも、亦留學生を送り、千八百〇九年には、氏が下に十五名の教師働き、生徒の數百六十五名に達し、教授法研究の爲め、歐洲各國より派遣せられし人々三十二名に及び、更に歐米の知名の人々參觀に來り、爲めにイフエルテンの小都府は、天下に名高くなれり。獨逸の哲學者ヘルバルトは、前きに氏がブルグドルフにありし時來り學びしが、イフエルテンには、フレーベル來りて研究せり。

千八百十五年、氏は、此の五十年間、氏と困厄を共にせし最愛の妻を失ひ、次ぎて右の學校教師間に内訌起り、千八百二十五年遂に閉校せり。氏はこゝにもとのノイホ

ーフに退き、千八百二十七年、八十歳を以て歿せり。碑銘に曰く、こゝにハインリッヒ・ベスタロッチ眠る。千七百四十六年正月十二日ツリーツヒに生れ、千八百二十七年二月十七日ブルグに歿せり。ノイホーフに於ける貧民の救済者、ソーンハルトとゲルトルードにて人民への説法者、スタンツに於ける孤兒の父、ブルグドルフ及びミンヘンブッフゼーに於ける新國民學校の創立者、イフルテンに於ける人類の教育者。此人や、眞の人間、眞の基督教徒、眞の市民にして身の爲めをば思はず、一意他の爲めに盡したり。彼の名は不朽なれと。

氏の教育意見は、明に之を系統立て、論ぜるものなく、其著書の多くは小説體にして科學的の形を具へず。蓋し氏は情の人にして知の人にあらず。氏は強く感ぜり、しかも不明瞭に見たり。デッテス評していふ、氏が近世教育改革家の第一位に置かるゝは、教育學上先見の明ありしに依るにあらず、又其教育法の完備したりしに依るにあらず。是等の點よりすれば、氏は或は他の教育家に劣りたらん。唯氏を偉大ならしめし所のものは、氏が人間に對する無限の愛情なり、教育に對する燃ゆるが如き熱心なり、教育改革の犠牲となりたる献身的の行爲なりと。コムペーレ

も亦いふ、氏が著書を見れば、氏が名を聞きて豫想せし所に反することあり。しかも氏が行を見れば、又更に驚嘆すべき所ありと。故に教育史家中には、氏が一生即ちこれ氏が教育學なりと言へる人もあり。さりながら、氏は感情の方面より、暗々に教育の眞目的、眞方法を摺み、在來の新教育思想を集めて、更に十九世紀の教育を開く所の幾多注目すべき意見を有し、なかくに暗示的の所あり。ラインの如きは、ベスタロッチの教育意見中に、ヘルバルト教育學の大體の結構を見ることを得べしと言へり。

氏は教育を樹木の成長に例へて曰く、健全なる教育は、水分ある所に植ゑられたる木に例へらる。木の資質、其形態、其比例を含める小さき實を此土に植ゑよ。直ちに芽生えして、葉となり、幹となり、枝となり、花となり、實となるべし。かくて此全き木は、相依りて其生命を保ち、有機的部分より成る絶つべからざる鎖の如くなるべし。而して斯く成ることは、もと其實に存する計畫に依れり。人も亦此木に均しく、新らしく生れたる小供には、其一生涯の中に現はるべき種々の働潜在し、それ等のもの、次第々に一の調和せる全體に發達し、遂に神の面影を爲すが如き人とな

ると。此思想には、三個の重要なる原則含まる。第一人には教育せらるべき自然の能力の具はれること、第二其教育せらるる方法は、一に自然の發達に従ふべきこと、第三其教育には自ら統一ありて、人を神の如き品性を有する人に練り上げべきこと是なり。第一の原則は、これ教育の可能及び必要を説き、教育の基礎を定めたるもの、第二の原則は、教育の方法の根本義を示せるもの、而して第三の原則は教育の目的を説きたるものなり。

第一人には教育せらるべき自然の能力ありとは、自己活動の力と、清淨無垢の感情とあるをいふ。此自己活動力が、知識を得、欲望を達せんとする働となりて現はれ、此感情が、親子相愛し、同胞相親み、遂に神を敬愛する高尚なる情に發達す。しかも之を教育せずして願みざらんか、此自然の發達なるもの終に遂ぐべからず。教育茲に於てか要あり。但し教育は、元來人の自然の性に具はらざるものを、外部より附け加ふることも能はず、寧ろ内部より其發達すべき種子の成長を能く助長するにあらざるべからず。切に言へば教育は注入するにあらずして開發するにあらずるべからず。兒童を受け身の狀態に置くにあらずして、能働的の位置に立たしめ

ざるべからず。而して此兒童の自然に有する資質は、各々異なる者なれば、教育に於ては此個性を尊重し、之を發達せしむる方法を取らざるべからず。換言すれば教育は兒童の自然に固有せる性情より出立せざるべからず。是氏が教育の原則は人の性情に求めざるべからずと言ひたる所以にして、氏を開發主義の最も善き代表者とする所以なり。此點に於て氏は儘にルソーに影響せられたる所あり。第二に氏は其教育するに付きては、自然の發達の順序に従ふべきことを言へり。教育は兒童の生れながらに有する種子を開發し成長せしむる事業にして、其種子の成長するには自然の順序あり。此故に教育に於ては、此順序を踏まざれば、教育の効終に擧るべからず。此自然の順序に従ふべしといふ原則の中に、氏は種々の細かなる原則を含めたり。(い)心の發達する始めの間は殊に注意すべし。(ろ)心身の能力の總べてを調和的に發達せしむべし。(は)一切の能力を常に實際に働かしむべし。(に)單より複に、具體より抽象に進ましむべしといふ如き諸原則是なり。是亦ルソーの影響に出づる所あり。

(い)人を自然の順序に従ひて教育すべしといふ中には、自ら其始めの間に能く注意

すべき意を含む。猶草木の柔らかなる時はたやすく揉み得られ易きを以て、能く之を伸ばし、又風雨の爲めに摧かれ易きを以て之に十分の保護を與へざるべからざるが如し。此故に家庭の教育には十分の意を致さざるべからず。而して此家庭教育の重任を負ふ者は即ち母なるを以て、母の教育力は人の一生を支配し、又國家社會の隆替に關す。氏は叫んで、幼兒の教育者として、其慈母を措きて他に適當のものあることなし。余は國民の教育を母の手に委ねんことを欲すと言ひ、愛情を基とせる家庭教育の力には、何等の教育の力も及ぶべからずと言ひ、此家庭に於て兒童の生れながらに有する清淨無垢の感情を發達せしむることが、殆んど教育の根底を作るものなりと説き、家庭の教育に於ては、此感情の發達と共に、亦自然の順序を追ひて其知力の發達を計らざるべからざる旨を述べたり。母の力の教育上偉大なる効果あることを、氏は其、リンハルトとゲルトにて示し、又幼兒の教育の槩として、母に與ふる書を著はせり。教育は家庭を基として學校の教育も家庭教育の精神を繼かざるべからざる旨を主張せし點を承けて、フレイベルは幼稚園を起せり。

(ろ)かくて幼兒の心を開發するには其心力全體を發達せしむることを計らざるべからず。氏言ふ、年既に長せる者に生活の必要上より、或特殊の教育を與ふる場合は致し方なしとするも、幼稚なる者を教育するには、是非とも其固有の力のすべてを發達せしむることを計らざるべからず。若し教育に於て、或一の力の發達のみを計りて、他の力の發達を顧みざらんか、これ不具者を養成する所以にして、人を養成する所以にあらず。教育は宜しく人間の性情全體の圓滿なる發達を爲さしめんことを目指すべし。人の心の發達は、其一切の力が、平等に發達して、自ら全體の上に美はしき調和を保つこと、恰も樹木の鬱蒼として茂りながら、猶一樹木としての調和を保てるが如くならしむべし。氏が所謂あらゆる能力とは、知情意の働一切を指せることにして、猶其知力にては感覺知覺の力も練るべく、推理判斷の力も練るべく、すべて人を不具者に教育することを批難せり。氏が人の心を多方面に開發するにあらずば、人を教育すといふこと能はずとて、教育の威嚴の尊き所以を唱へたる思想を承けて、ヘルバルトは、教育に於ては多方の興味を起さしむるにあらずば、

其品性の全きを致すべからざる旨を、其教育學思想の根本とせり。
 (は)自然の順序に従ひて教育すべしといふ中には、力めて兒童を活動せしめ、活動に依りて知識技能を得しめ、又之を實際に働かしむべき意を含めり。人には生れながら活動すべき力具はれり。此活動力、即ち知識を得、技能を覚えんとする傾となりて現はるゝものなれば、知識技能を得しむるには、此動力に訴へざるべからず。人には活動すべき性質の備はるものなるに、今の教育は之を抑へ、之を静止せしめて、之を適當に使用し發達せしむる事を怠る。斯くの如きは、死したる知識を與へ、死したる人を作るに均し。須らく其體力心力を働かしめて、常に活々したる状態にあらしめざるべからず。凡そ自ら活動せずして知れることは、これ空の知識にして、未だ眞に其有とはならざるなり。而して又其知れる所は、之を實地に活用せしむるにあらずば、眞に徹底せるものとならず。故に氏は、明智には活力の結ばるるを要し、理論的知識には實際上の熟練の結はるゝを要すと言ひ、又活動は兒童の天性なり、兒童をして爲すことに慣れしめよ、手を教育せよと云ひ、實際に手工を重んじ、園藝に従事せしめ、遊戯體操を重んぜり。此方法は、フレイベルの幼稚園に至りて十分發達せり。

(に)今一つ自然の順序に従ふべしと言ふことの中には、兒童の心力を、單より複に、具體より抽象に進ましむべき意を含む。氏は之を教授原則に言ひ現はして、教授の基礎は直覺にありと言へり。各學科は、すべて其簡單なる實物より出立して、遂に之を總括する原則に進ましめ、之を纏まりたる知識と爲さしむべしとの意なり。此點より氏は實物教授を主唱し、其學校には、殆んど教科書を用ひず、務めて實物若しくは繪畫に訴へて兒童の知識を開發せんことを企て、兒童自らをして、觀察せしめ、試験せしめ、遂に其纏まりたる知識、即ち概念に達せしめんことを計れり。而して其正しき直覺を得しむるには、言ひ換ふれば正しく事物を認識せしむるには、始めに其目の前にある物の數は幾個なるかを明にし、次に其物は如何に見ゆるかの形を明にし、遂に之に名稱を附し其性質を言葉に言ひ現はさしめざるべからず。事物を其數に依りて確め、其形と内容とに依りて同不同を判別し、且つ之を言葉に表出して肥號と爲し、長く之を記憶に留めしめざるべからず。此故に教授は第一數、第二形、第三言葉の三立脚點よりせざるべからず。此三立脚點より兒童の心を

開發して、始めて眞の直覺を得しめ、又此三立脚點より各種の學科を教へて、始めて能く其心を開發したりと言はるべし。即ち數の概念を得しむるには算術、形の概念を得しむるには幾何學、圖畫、習字、言葉の發表に慣れしむるには、語學と唱歌とを學ばしむべく、而して是等諸學科の材料となる者は言ふまでもなく實物にして、實物に依りて之を教へ、順次に其纏まりたる知識即ち概念に達せしむべしとせり。』

第三に氏の教育思想には、教育には自ら統一ありて、一切の教育事業は、すべて之に綜合せざるべからざることを含めり。其統一する點は、言ふ迄もなく神の面影を爲せる如き人を作らんとすることにて、これ即ち教育の目的なり。教授も畢竟此目的の爲めに施すに外ならず。此目的を達し、人の心に統一あらしむるには、教授もとより必要なるも、亦かの兒童の自然に有せる清淨無垢の感情を發達せしめざるべからず。此感情、親子相愛する情となり、國家社會の民としては、自由を愛し、正義を尊ぶ情となり、而して吾等人類は、すべて神の子なりと言ふ偉大なる信仰に發達し、茲に確乎として助すべからざる宗教的、道德的の品性成立す。故に氏の訓練法は、愛情を本とし、此愛情を發達せしめ、其信仰を確立せしむることが、其品性を練

り、神の面影を爲す如き高尚偉大なる人と爲す所以なりとし、大に感情教育を重んじ、此點より教師の資格を論じ、教師たるものは、實直溫和にして慈愛心に富み、兒童に親たるべき人ならざるべからずと言へり。此目的の意見に至りては、ルーソーと大に異なれり。

氏が助手たりしモルフは、氏が教育主義を(第一)直覺は教授の基礎なり。(第二)兒童の經驗し觀察せる所と、其言葉とを結合せざるべからず。(第三)十分學びたる後に之れを判斷し批評せしめよ。(第四)各學科の教授は、簡單なる處より、心の發達する順序を追ひて、次第に進歩せしめざるべからず。(第五)兒童が學びたるものを、我物となし得る迄は、十分叮嚀に教授するを要し、よく理解したる後にあらざれば、決して前に進ましむべからず。(第六)教授は心理の發展の順序を追ふべきものにして、論理的の順序を追ふに及ばず。(第七)兒童の個性は尊重すべし。(第八)普通教育に於ける教授の目的とする處は、兒童に智識を授け技能を得しむるにあらずして、其の心力を發達せしめ、之れを増加せんことを目的とすべし。(第九)明智には活力の結ばるゝを要し、理論的知識には、實際上の熟練の結ばるゝを要す。(第十)師弟の關

係は敬意を基とせざるべからず。(第十一)教授は教育の目的に従はざるべからずとの十一個條に約めたり。

氏が教育上の意見は、科學的明瞭を缺き、説きて未だ到らざる所ありといへども、しかも新教育の要點を擧みて、優に十九世紀の教育を開くべき方針を示せり。而して氏自ら之を實地に試みて以て、新教育の如何なるものなるべきかを世間に示せり。先きにバセドウあり、ルソーの思想を奉じて、一度自然主義に依れる教育の實例を示し、一時大に世間の耳目を聳動せしも、未だ全歐洲に影響するに至らず。氏に至り、ルソーの思想を今一層之を完全に示し、全歐洲はもとより、米國の教育をも振ひ興すに至れり。今日の普通教育の主義方法は、氏が其基礎を置きし所なりといふも不可なることなし。デッテスが當時の教育狀況を記せしものを見るに、當時教師として用ひられしは、役に立たざる職工、免役後の兵士、若しくは墮落せる學生にして、多くは道徳上稱賛すべからざる人物なりき。従ひて報酬は低く、勢力は無く、而して學校に出席する生徒は不規則にして、夏は全く學校を閉せり。村落に至りては、學校を有せる處なく、兒女の一般に就學することは中々困難なりき。

殊に女兒に至りては、殆んど教育の恩に浴せざりき。一般の人民、殊に貧民は、學校を邪魔者の如くに感じ、僧侶は常に學校の保護者を以て任ずるも、實際は何事をもなさず、却りてその發達に抵抗せり、貴族は又教育に興味を有せず、甚だしきは人民を愚にするを以て得策とせり。教授は全く機械的にして、暗誦をのみ責められ、訓練は苛酷にして凡ての生徒は鞭の傷絶ゆることなかりきとあり。以て十八世紀の半に、バセドウが汎愛院を起したる時と左程の差違なかりしを見るべし。

此の時に當り氏はかゝる教育と反し、一に兒童の心理の自然の發達に訴ふるを旨とし、宗教、道徳、政治、法律のことは素より、讀書、習字、算術、幾何學、物理學、化學、動物、植物、地理、歴史、圖畫、唱歌、體操の如きを、凡て實地實物に訴へて教へ、之を暗記せしむることなく、深く理解して、之に對する興味を起し、判斷力を養はしめん事を計り、而して教育に對する熱心と兒童に對する愛情とに驅られ、教師と言はんよりは、寧ろ親の如き心を以て教育に従事せり。氏や感情に深き點に於ては、ルソーに似たり。しかもルソーと違ひ、高潔なる道義心を有し、教育を以て己が一生の事業とし、教育を以て國家、民人を改善する唯一の手段と信じ、一身の利害を棄て、之に殉せり。

其教育改革家として主要の位置に推さるゝは當然の事に屬す。

但し氏が教育史上の位置は、かく高さものありといへど、其主義方法は、一面當時の教育に對する反動に出でたるものあるを以て、一方に偏せる傾あるを免れず。即ち氏が當時の教授法の注入主義に對して開發主義を唱道し、一切記憶力を練ることを斥ぞけ、觀察概括の力を練らしむることに傾きたる如き、又當時の訓練法の苛酷にして形式的なるに對し、感情を練らしむることを重んじ、理性の命より出づる權威を以て兒童に臨むことを忘れたるが如き、幾分氏が性格に依る所あるも、亦當時の時弊を矯めんとして、知らずく一方に片寄りたるものと見ざるべからず。而して又氏が教育思想は、新教育思想の主要なる點を櫻みしとは言へ、先きに言ひし如く、科學的明瞭を缺き、説きて未だ到らざる所ありしより、幾多の後繼者出て、之を大成せんと企てたり。學理的方面に於ては獨逸のヘルバルト一派、之を科學的、教育的に組織し、實際的方面に於ては、同じく獨逸のフレイベル、幼稚園を起して、氏が意見の應用を廣くし、ディーステルウヰヒ、亦氏が意見を繼ぎて小學校教育の改善を計れり。之に依り、十九世紀の教育は、大に其活動を多方にし、其面目を改め來

れり。

第三節 ヘルバルト及び其一派 ヘルバルトは、千七百七十六年、獨逸のオルデンブルヒに生る。祖父は此地の中學校長を務め、父は政府の高等官なりき。母は嚴格なる性質の人にして、嚴しき訓練を氏に與へしが、不幸にして父母の縁離るゝに至りしかば、氏は幼時家庭教師によりて育てられ、十二歳にして此地の中學校に入り、六年の後卒業し、千七百九十六年、エナ大學に入り、當大學の教授たりしフイヒテの感化を受けたり。三年にして業を卒へ、瑞西のフォン、スタイゲル家の家庭教師となり、此間にベスタロッチの許に行き、其教育法を研究せり。而も専門の學者として立だんと、の念止み難く、獨逸のフレイメンに歸り、千八百二年、ゲツチンゲン大學の講師となりて教育學を講ぜり。氏が普通教育學を書きしは、此地にして、千八百六年に出版せり。千八百九年、ケニホスベルヒ大學の哲學教授となり、教育學の講座を受持つと共に、教員練習所を附設して之を監督せり。是れ實に獨逸大學に教員練習所を附設したる初めなり。此練習所には、二十人の生徒を容れ、教育學研究の學生をして之れが教育に當らしめ、氏自ら之を監督し、其學說を實地に應用せしめたる

り。千八百三十三年再びグツチンゲン大學に歸り、死する二日前まで其講義を續け、千八百四十一年八月十二日没せり。

氏は哲學者にして最も心理學に詳しく、其哲學の全量を注ぎて科學的教育を建設せりと公言せしほどにして、教育學を一個の科學としての位置に高めたるものは、實に氏の功に歸せざる可らず。氏は教育學を組織するに當り、其目的は倫理學是を示し、其方法は心理學是を示すとて、是等二科學を基として教育學を組織せり。』氏は教育の目的を倫理學に求め、而して其倫理學に於て、道德的意志の最も簡單にして且つ根本的なる形を研究して五個の道念を得たり。第一内心自由、第二完全、第三好意、第四權利、第五公正是れなり。此五個の道念を備へたる人は、即ち有徳の人、道德的品性を有する人にして、教育の目的として養成すべき人なり。』かゝる品性を有する人を如何にして作るべきかを定むるには、心理學に依り、先づ心の性質と心が如何にして發達するかとを究め、以て品性陶冶の實を擧げざるべからず。茲に於て、氏は心理學研究の結果を教育學に持ち來せり。當時心理學說としては、所謂能力說採用せられき。即ち心には知情意の三要素備はり、其知情意

の三つの中には、更に多くの能力ありて以て心の活動をなし、諸種の行爲をなすと説けり。此の説に依れば、教育は、知或は情或は意といへる如き、各種の能力を一々に鍛練し、而して其鍛練せられたる各能力を一括するによりて初めて全體の心の發達を得、完全なる品性の陶冶をなしたるものと爲す。然るにヘルバルトは、此能力說を破り、自ら一種の新心理學說を立て、之に依りて其教育學を組織せり。氏の意見に従へば、心的生活は、其初め單一なる觀念より成るものとなし、此觀念の活動表現の如何によりて、智となり、情となり、意となるものにして、決して初めより是等三種の心的能力あるにあらずと爲す。氏に依れば、觀念が心的生活の基礎なり、觀念と觀念とが相結合して他の新なる觀念を生じ、かくして觀念發達して全き心的生活を爲す。觀念の心理學に於けるは、例へば元素の化學に於けるが如く、細胞の生理學に於けるが如し。智力といふも決して特殊なる能力にあらずして、觀念が或は再現し、或は構成し、或は比較し、抽象し、概括し、推理する作用に外ならず。感情といふといへども、是亦觀念相互の關係に外ならず。觀念と觀念との調不調が快不快の感情となる。意志とても亦觀念の働に外ならず。意志は或物を待んとす

る觀念と、そが得らるゝといふ觀念と結びて生ずる所の心的活動なり。品性もとより別種のものにあらず、或觀念が位置を正しく落ち付け、其觀念が主座を占めて、他の觀念を裁斷する状態たるに外ならず。之を品性とも、人と爲りとも、又自治心とも言ふ。此故に倫理的品性を得しめんには、先づ心の本たる觀念を陶冶せざるべからず。觀念を陶冶して之を道念に向はしめざるべからず。蓋し道徳は善を爲す所の道念に屬し、道念は其心全體の修養に屬するが故なり。

倫理的品性を有するが如き人を作る方法としては、管理、教授及び訓練あり。管理は兒童の疎野なる性情を矯むるにあり。疎野なる性情を矯めざれば、意志の養成に取り掛ることを得ず。管理の手段に二個の羈絆あり。權威と愛情と是なり。權威は監督、命令、若しくは罰となりて現はるべく、愛情は保護の暖き恵みとなりて現はるべし。もとより此管理は現在を目當てとするものにて、次第に不用と爲し、後には全く之を除き去らざるべからず。教授は觀念を練る事業にして、教育方法の中の最も重要なるものなり。前に言へる如く、教育の目的は、兒童の意志を道徳の方向に向くるにありて、而して其意志の根底は觀念にあるを以て、此觀念を練る

には十分力を盡さざるべからず。觀念を練るには、多方の興味を起さしめざるべからず。多方の興味とは、觀念の働が多く、物の物に向けられ、或る一の力が意識を横領することなくして、出來得べきだけ多方面に働くといふ。其多方の興味の種類は、之を概括して言へば、先づ智識に關するもの、經驗的興味、推究的興味、審美的興味、三種、感情に屬するもの、同情的興味、社交的興味、宗教的興味、三種、都合六種あり。此の六種の第一は事物を見聞するの興味にして、第二は事物に關し推理するの興味、第三は是を味ふ所の興味、第四は自己の知れる人に對する興味、第五は國家社會に對する興味、第六は神に對する興味なり。即ち是等六種の興味を起さしむるによりて、天地自然を知り、人間社會に同情し、進んで神に及び、興味が天地人の三才に亘り、同時に觀念全體が圓滿に修養せられ、其結果自ら善に對する慾望を起して、永久道徳を追求することゝなるべし。教授に於て興味を起さしめんには、觀念同化の理に従はざるべからず。觀念の同化とは、已に有せる觀念の力によりて、新に來たるべき觀念を消化するの謂にして、已に有せる觀念の力強ければ、強き程、新に來り來る觀念を容易に且つ速に消化するを得るものにして、此場合

に生ずる一種の快感を名づけて興味と稱す。即ち興味を起さしめんには、此同化の理を追はざるべからず。而して此同化に於ける心理作用を分析すれば、専心と致思との二作用を含むを見るべし。専心とは第一に其同化せんとすることのみを一時暫く他の事より引き離して一意是れに注意する状態にして、其事物が心に享け入れらるゝに及べば第二に其以前に之れに類似せる觀念を呼び起して之れを連結するを言ひ、致思とは第一に新しき觀念と舊き觀念とを對照して之れを比較し系統立て、第二に是れを活用せんとするに至る心的状態を指す。此故に事物を教授するに、第一明瞭、第二聯合、第三系統、第四方法の四段を踏ましむれば、最も能く其心に同化せられて興味を起さしむることを得。其教授の材料としては、人間生活に關するものと、自然生活に關するものを選びざるべからず。最後に教育の方法として訓練を施さざるべからず。訓練は兒童の品性を練る事業にして、之を管理と對すれば、管理の現在を目當てとするに比し、之は將來を目當てとし、又教授と對すれば、教授が一先づ觀念を練りて然る後品性を練らんとする間接の事業なるに比し、之は直接に品性を練らんとする事業なり。訓練の務は觀念を行爲に

移し、かくて品性の基礎を据ゑ、品性の道德的勢力を高め、道德に對して常に精進の態度を取らしむるにありて、五個の道念を以て世に立ち、世の風波に抵抗して、其品性を發揮するに至らしめんことを期す。

これヘルバルト教育學の大要なるが、此教育學は、其倫理學と心理學とを基礎として建てしものなれば、此二個の基礎學を承認するにあらずば、之を採用すべからずといへど、其研究の仕方、全く之を一個の科學と爲さんとするにありて、其教授論の如きは精微に亘り、教育史上、科學的教育學を建設せんとしたるものとして重要なる位置を占め、殊に其後繼者にチルレル、ストイ、ヴァイツ、一八二一—一八六四、リンドホルム、一八二八—一八八七、ケルン、一八二三—一八九一、フリック、一八三二—一八九二など出で、之を記述し、一大學派を爲せり。其後繼者の中に、チルレル、ストイの二人を重ねる者とす。

チルレル(一八一七—一八三一)は、ライプツヒ大學にて教育を受け、熱心にヘルバルトの教育學説を研究し、千八百五十六年に、普通教育學要義を出せり。ライプツヒ大學教授に擧げられ、同大學に教員練習所を附設し、千八百六十三年まで監督せり。

千八百六十五年、其最も有名なる「教育的教授原論」を著し、此書に於てヘルバルトの意見を祖述したりと稱しつゝ、縦には開化史的發達の段階に従ひて各學科を排列すべきこと、横には之を宗教歴史の二科を中心として湊合すべきこと、及び各學科を教授するには必ず五段の順序を踏むべきことを主張し、大に世間の注意を惹けり。千八百六十八年には、自ら「科學的教育學會」を組織して其長となり、獨逸全國に支會を設けて、大にヘルバルト主義の教育學思想を鼓吹せり。開化史的發達の段階に従ひて各學科を排列すべしとの意見は、ヘルバルトが「吾等各個には過去の全時代が生活す」と言ひし言を本とし、若し吾等の心の發達と歴史の發達とが相一致するものとすれば、各學科を各學年に配當するには、須らく歴史的發展の順序を踏まざるべからずといふにあり。横に之を宗教歴史の如き心情科を中心として湊合すべしとの意見は、あらゆる學科を心情科を中心として、湊合し、打ちて之を一團とし、教授的教授を爲して、以て宗教的・道徳的品性を練ることに役立たしめんといふにあり。各學科を五段を踏みて教授すべしとの意見は、ヘルバルトが定めし四段の順序の第一段明瞭を、分解・總合の二段に分ち、之に他の三段を加へ、第一分

解、第二總合、第三聯合、第四系統、第五應用とせしをいふ。第一の意見を開化史的段階説、第二を中心湊合説、第三を形式的段階説と言ひ、ヘルバルト派の教育學思想の中心と爲す。氏はかくヘルバルトの意は承けながら、大に自己の思想を以て之を祖述したるが故、ヘルバルト派中の改革派と見做され、其保守派よりは師説を認るものとして攻撃せられき。

保守派の代表者はストイ（一八一五—一八八六）なり。ストイはゲッチンゲン大學にて、ヘルバルトの教を受けて其熱心なる弟子となり、卒業後、エナ大學の講師となり、千八百五十四年教授に擧げられ、千八百八十六年まで教へて死せり。エナには、教員練習所を設けて熱心に之を監督し、其師ヘルバルトの説を其儘に奉じて之を實地に行はんと力めき。此練習所は、今日まで繼續し、今も猶ヘルバルト主義の教育學思想を廣ぐる機關となり、ライン此所に働けり。

ラインは現今に於けるヘルバルト派の代表者なり。「小學校教授の理論と實際」教育學綱要などに於て、ヘルバルト派の教育學説を主張せり。氏はチルレルが定めたる五段の教授の順序の名稱を改めて、豫備・提示・比較・總括・應用とせり。

第四節 フレーベル ペスタロッチの影響を受けたるものとして、ヘルバルトが理論的方面に働きたるに對し、フレーベルは幼稚園を起して實際的方面に働けり。氏は千七百八十三年、獨逸のシワルツブルグに生る。幼にして母を失ひ、其繼母氏を愛せざりしかば、時には獨り森の中に逍遙して其悲を慰藉せり。十歳にして叔父の許に養はるゝに至り、初めて親切なる待遇を受け、身心急に發達し、十五歳の時、山林家の徒弟となりて植物研究に深き興味を起し、十七歳に至り、友人の助を得て、エナ大學に入學し、自然科學を研究せしが、中途にして學費に窮して退學し、二十三歳の時、建築技手として獨逸のフランクフルトの師範學校を建築せしが、其校長、氏が教育家の資格あるを見、氏を教師に引上げたるに、此時氏は無上の喜びを感じて、魚の水に於けるが如しと言へり。千八百八年、ペスタロッチの許に行き、助手となり、其教育を研究し、千八百十三年、普魯西亞の自由軍起るに逢ひ、義勇兵として之に加はり、ナポレオンの兵と戦ひしが、戦終りて後、伯林に來り、礦物館の書記となりて礦物學を研究せり。千八百十六年、キールホウに一學校を建て、手工によりて兒童の自己活動力を導くといふ教育方法を採りしが、生徒の減少せし爲め閉校せり。

而も此間に氏は兒童の天性を觀察して得る處あり、曰く「余は兒童の活動力及び其遊戯を教育的に導きて一の作業に變ぜしむべし。此の兒童の自然に有する力を教育的に利用すること、即ち教育の務めならざるべからず」と。斯くて氏は千八百二十六年に是等の思想を「人の教育」に著せり。此書は兒童の天性を導きて、神の心に叶ふが如き正義の人たらしむるべきことを説けり。千八百二十九年には、暫く瑞西ブルグドルフの孤兒院に奉職したりしが、千八百三十七年、獨逸に歸りて、ブランケンブルヒに初めて其幼稚園を起せり。即ち今より六十八年前にして、之に依り一の新なる教育制度を加ふることゝなれり。氏が心に言ふ、兒童は植物なり、學校は花園なり、而して教師は園丁なりと。氏は幼稚園創立の際、其主旨を一般に公表せり。中に曰く「幼稚園は兒童が學校生活に入らんとする前に之を看護し、其性質に従ひて之を勵まし、其體力を強め、其覺め行く心を利用し、彼等をして自然界と人事界とに注意深くならしめ、正しき方向に其心を指導して、すべての生活の根源たる神を知らしめ、神に一致せしめんことを目的とす」と。即ち氏が幼稚園は、ペスタロッチが教育に於ては兒童の自己的活動力を導くを本とすべしといひ、又兒童發

達の初めは殊に注意すべしといへる意見に依り、遊戯を教育的に導くを教育の出立點とし、直覺は教授の基礎なりといふ原則を奉じて、手工を課し、又恩物を弄せしめ、以て人間生活の基礎と、教育の基礎とを與へんとするにあり。ペスタロッチは國民の教育を母の手に委ねんとせしが、フレイベルは其母の案外に教育思想なく、家庭教育の十分届かざるを見、之を助けんが爲めに幼稚園を起せり。これ正にペスタロッチが立てし教育原則を小學校以前の兒童に應用せしものなり。然るに此幼稚園は、資力續かず、加ふるに世間より正當に理解せられざりしより、閉校せざるべからざるに至り、氏は遺憾止み難く、如何にもして模範幼稚園を立てんと企て、獨逸全國を漫遊せしが、思はしき結果なかりしより、大に落膽し、カイルホウに歸りしに、千八百五十年、マールンホルツ、ビーロー夫人の贊助を得、其マリエンタール城を借りて、茲に再び幼稚園を開き、傍ら婦人を集めて兒童教育法を説けり。氏思へらく、國民の運命は母の手にあり、吾等は人類の教育者として、婦人を教育せざるべからず。然らざれば新時代は完全となることを得ずと。かくて氏は千八百五十二年に死したるが、其死後次第に幼稚園教育の必要なることを認められ、初めに獨逸、佛

蘭西、澳太利に擴がり、遂に亞米利加に及び、今や東洋諸國にも其設立を見るに至れり。

第五節　　ディーステルウヰヒ　　ディーステルエヰヒ（一七九〇—一八六六）は、獨逸のペスタロッチと稱せられ、ペスタロッチの主義を獨逸の普通教育に擴ぐることに盡力せり。氏はヘルボルン大學卒業後、家庭教師となり、尋ぎてフランクフルトの中學校の教師となれり。此頃よりペスタロッチの教育法を研究し、一千八百二十年、メルスの師範學校長となり、高尚にして確實なる精神的修養を有し、思慮深く、獨立心に富み、常に研究的態度を取り、如何なる困難にも屈せざるが如き教師を養成せんと志し、傍ら教育雜誌を出して其意見を公にし、千八百三十二年伯林の師範學校長となり、更に伯林市選出の代議士となり、大に普魯西の學制改革に盡力し、近時獨逸の普通教育の父とも言はれり。

氏は人の性質を、自己活動を有する處の有機的統一を保つものと見、是れを其稟賦と名づけたり。教育とは、此の稟賦を發達せしめ、人類として、市民として、又國民として、眞善美の爲めに働かしむるに至る事業にして、教授も此目的を目指して行ふ

ものとなし、教授の原則を分ちて、生徒に關するもの、學科に關するもの、時に關するもの、及び教師に關するもの、四つに分ち、第一に於ては自然の發達に従ひ、近より遠に、簡より繁に進み、初めより科學的に教へず、努めて初歩的に教へ、かくて智識技能を得しむると共に、其心力をも練らしめ、智識と技能とを聯絡せしむべしといひ、第二に就きては兒童の發達段階に従ひて、各學科の材料を排列し、初歩の教授を丁寧にし、折り／＼教ふる事柄を其基本的觀念に歸らしめ、而して各學科は適當の階段と、小さき全體とに分ち、順序を踏みて、一步々々に其事柄の根底に至るまで理解せしめ、其の場合に學科の性質に應じて、教授の形式を撰擇すべしといひ、第三に就きては一時に凡ての事を知らしめんより、順次に是れを知らしめ、且つ兒童將來の位置に注目し、其時代の開化に従ひて、教授せよといひ、更に第四に就きては、教授を興味多からしむることに力めよ、氣力を有して教授せよ、而して靜止するなかれといへり。

十九世紀の教育 其二

第六節 ヘーゲル及び其一派 獨逸に於て、ヘルバルト學派と並び、教育學派として一派を爲したるはヘーゲルの一派なり。ヘーゲルは、カント、フイヒテ、シュルリングの影響を受けたる大哲學者にして、もとより教育學者を以て目すべからずといへど、其哲學思想より來れる教育學思想を有し、又其教育學思想を繼げるものありて、教育學の發達に大なる貢獻を爲せり。

氏は千七百七十年、獨逸のシュットガルトに生れ、十八歳にしてチュービンゲン大學に入りて神學を研究し、卒業の後、家庭教師となりて瑞西に行き、後歸りてフランクフルトに來りて又家庭教師を務め、千八百一年エナ大學の講師となり、一千八百五年其の教授となれり。千八百六年、エナ大敗の時氏は彈丸雨の如くに降來る間にありて、「精神現象論」を書き終りき。エナ大學の暫く閉されし後、或は雜誌を出し、或は中學校の校長となりしが、千八百十八年に至り、伯林大學に聘せられ、次いで千八百二十九年、其總長となりて大に經營する所あり、曾てフイヒテが管理せし時よりは秩序立

ちしが千八百三十四年虎列刺に犯されて没せり。氏は伯林にある間、隠然一大學派を爲し、其のいふ處、普魯西亞政府に用ひられ、なかく、に實際上の勢力をも有しき。氏が教育上の意見は、氏が死後、門人タウローヘーゲルの教育教授意見と題して出版せり。

氏が教育學説を知らんと欲せば、先づ其哲學思想の大要を知らざるべからず。氏は一大普遍理性を宇宙萬物の本體となし、其が進化發展に於て、第一に物として自然界に現はれ、第二に精神として人に現はれ、第三に其人が歴史をなして再びもとの普遍理性即ち絶對に歸入すといふ意見を懷けり。従ひて教育上の見解も、又生理學と心理學との上より、兒童の自然物としての發達、及び精神としての發達を、幼時期、兒童期、及び少年期の三期に分ちて研究し、次に倫理學上の見地より、兒童をして歴史の發展を助けて遂に普遍理性に合體する處の普遍的道德を體せしむべく、人がかゝる普遍的道德を體するに至りて、始めて道德的自由の境界に入るを得べしとなせり。

氏が教育の目的とする所は、人を倫理的生物たらしむるにあり。其倫理的生物とは、物として又精神としての發達を全うし、而して宇宙の合理的進化を助くるが如きものたるを意味せり。是の故に氏は大に社會的、進化的の教育意見を主張して、各家族は其兒童を獨立の精神的存在として養育薰陶すべく、而して各の家族が斯くの如く子孫の教育に盡力するは即ち國家を進歩せしむる所以、國家を進歩せしむるは即ち世界を進歩せしむる所以、世界を進歩せしむるは、即ち天地人生の目的を達する所以に外ならずと説けり。氏が教育方法を論じたる中につき、カントとフイヒテとに異なる點は、是等兩哲學者は、ともに意志の修養に重きを置きたるに反し、氏は知見を開く所の智育に重きを置ける點にあり。蓋し氏は人をして普遍理性を認めしむるを以て教育の第一義なりとし、従ひて智見を啓發せしむることを先きとせり。斯くの如く其の智育を重ぜし結果は、少年少しく事理を解するに至れば、具體的智識よりも寧ろ抽象的智識を授くべしとの極端なる意見を吐くに至れり。

氏の教育思想を承けたる者に、ローゼンクランツ（一八〇五—一八七九）あり。氏はケニヒスベルヒ大學の哲學教授として、嘗てカントが占めたる位置に就けり。氏

は其師ヘーゲルの思想を継ぎ、之を最も系統的に表はせる人にして、教育學の著あり。

教育を以て、一人の意志が意識的に他人の意志の上に働きて之を感化し、之れをして自己の努力により、己を完全に實現せしむるに至る事業なりとし、兒童の心に固有せる道徳的自由を實現し、完全なる人格を陶冶するを以て教育の目的となせり。即ち教育の務めは、各個人が固有せる理性を啓發するにあり、教育は新たに人を造るにあらずして、兒童が固有せる理性を啓發するにあり、兒童の可能性を啓發して之を實現になすにありて、猶一の産婆術に外ならず、兒童をして自ら立ちて其理性に従ひ其自由を保つことを得しむれば、教育の目的は達せられたる者となせり。教育はかく人間固有の理性を啓發するものにして、兒童の動物性を化して理性に一致する人間性たらしむるにあり。而してその人間性を分析すれば、生活、認識及び意志の三者より成るを以て、之を教育するの道は身體の修練、智力の修練、及び意力の修練の三つとならざるべからず。

身體の修練に就てきは、衛生の理法に従ひて食事をなさしめ、體操を習はしめ、又其色情の發達に注意せざる可らず。智力の修練に於ては、心の發達する直覺、想像、推理の三時期に應じて各學科を配當し、終に兒童をして、獨立に思考せしむるに至らざるべからず。意力修練に於ては、第一に開明社會の作爲したる禮儀に習はしめて其利己心を抑へ、第二に獨り快樂にして實益あるもののみならず、尙且善良の主義によりて其行爲を規定するが如き境涯に進ましめ、第三に此天地人生を普遍理性の現はれなりと悟らしめ、萬物皆一體なるが故に、仁愛の道を守り、しかも又謙遜なる心を以て此世に處するに至らしめざるべからず。即ち第一には禮を習ひ、第二には義を行ひ、第三には仁に進みて、天人合一の境界に入らしめんことを要し、茲に始めて眞の道徳的自由を得しむるものなりとせり。

現今に於ては、北米合衆國の教育事務長官ハリス、ヘーゲル派の教育思想を代表せり。ハリスは、ローゼンクランツの著を英譯し、又別に、教育の心理的基礎の著あり。第七節 シュライエルマッヘル シュライエルマッヘル(一七六八—一八三四)は一派を爲したるにはあらざるも、神學者として名高く、教育學上倫理學上の意見をもち、名聲、フイヒテ、ヘーゲルに次ぎ、柏林大學に於て、神學、倫理學、及び教育學を講ぜり。其著

「教育學」は、今猶一般に愛讀せらる。

氏は教育を人類の進歩といふ點より見、教育の目的は、兒童をして種々の共同生活、即ち家族、國家、及び教會に於ける有爲なる働手たらしむるにあり。兒童の個性人格を伸ばして、其處する所の三つの社會の不完全なる點を改善せしむるにありとし、此點より、教育者は、其國中に於て最も發達し成熟したる人にして、其時代の不完全なる點を知り、且つ其の缺點を改善する方案を有する人ならざるべからずとせり。

教育は斯くの如く兒童を導きて種々なる共同生活に適せしむべき事業なれば、勿論國家の事業として營まれざるべからざるものなること明なり。人は社會的動物にして、自ら國家をなすべき性質を有し、而して、其國家をなすによりて共同生活の目的を達することを得。故に國家の進歩を計るは、即ち人類の共同生活の進歩を計ると同意義にして、教育に依りて個人を完全にし、同時に國家を發展せしむべし。此意味よりして、教育を以て國家の進歩を圖る方便と見るも不可なることなし。然れども、單に教育を以て國家の進歩を計るのみにありとすれば、其目的狭小

に失す。國家は一の政治的社會なり。政治的社會の外に、なほ精神的の社會あり、教會是なり。人はかゝる精神的社會なる教會に入るに及びて、初めて精神的の安慰を得て、眞に人類の共同生活の目的を達することを得べし。宗教的社會は社會の半面とも見るべきものにして、政治的社會といふべき國家と共に一の大なる活動的社會なり。此二社會相俟ちて初めて人類の共同生活の目的達せられ、同時に人間の發達を全うすることとなるべし。故に教育は單に政治的社會を組織するに足る人物の養成のみを以て満足すべきにあらずして、進んで宗教的社會を組織するに足る十分なる人物の養成に移めざるべからず。教育の目的は、一方に於て國家の發達を促して、其國家の強富を計る如くし、他方に教會の進歩を促して、人類の精神的結合を高むるに至らしめんことを期せざるべからず。

兒童を導きて斯の如き理想の社會に導かんが爲めに、教育者の取るべき方法は、第一に國民としての共同一致の感情と其一致を計る才能、第二に教會に對する宗教的感情と其一致を計る才能、第三に學問を愛する感情と是れを應用する才能、第四に交際社會に對する社會的感情と其才能とを養成すべきものなりとし、各兒童を

共同生活の爲めに養成するは、其一個人たる自由と人格とを損ふ恐れなきかとの疑に對し、氏は社會的人を造るは、即ち其人格を完成し、其自由を伸ばす所以にして、此二者は其根本に於ては同一なるものとなし、教育に於ては、國家的、宗教的の平等教育を施すと共に、其個人々々の差別性を發達せしむべく、人類の平等性を發達せしむると共に、其特殊の才能を發達せしむべく、又學校に於ては各兒童を共同に教育すると共に家庭に於ては各兒童の性質に適する教育を施すべしとなし、かくて平等の中に差別を寓し、差別の中に平等を寓せしむべしとなしたり。要するに氏は教育目的を達せんが爲めには、個人を個人として教育すると同時に又、共同的のものとして教育すべく、差別の教育と共に平等の教育を施し、而も差別といひ平等といふ其根本原理は同一なるを以て、從ひて教育の目的を達する上に於ては、何等の矛盾障害あることなきのみならず、是れによりて其國民として完全なるを得、宗教的社會の一員として眞の信仰を有し、所謂人生の目的に徹底せるが如き人物を養成することを得とせり。教育を施すべき制度を氏は分ちて三つとなせり。即ち第一は家庭なり。家庭に

於ては、各其兒童を養育薰陶して、兒童の有する差別的個人性の發達を計ると同時に、共同的生活に必要な感情を養ひ、以て教育の目的に適順せしむべし。第二は國民學校にして、此所に於ては、兒童が發達して將來一國民として完全なるべき才能と感情との養成につとめ、同時に教會の一員として立つ上に要する感情と智識技能とを授くべし。第三は専門學校にして、此所に於ては、學問を愛する感情と學問を應用實現するに足る才能とを養はしめ、以て共同生活に於て有爲なる人物たらしむべし。

以上の如き意見なるを以て、氏は其教育學を組織するに當りて、倫理學、人類學、政治學及び宗教學を借り來り、就中教育の目的を示す上に於て、倫理學は最も深き關係を有する者となし、其倫理學の示す人間の共同目的の何たるかは、時と處とによりて解釋異なるべきものなるを以て、教育學は何時の世如何なる所に於ても行はるべき普遍的の目的を立つること能はずと論じ、此點に於て教育學は科學として其性質に缺くる處ありといへり。

第八節 ベネーケ及び其一派 ベネーケ(一七九八—一八五四)は、伯林に生れ、中學

校を卒りたる後、ハルレ及び伯林大學に學び、大にシュライエルマッハルの感化を受けたり。ヘーゲルに反對し、又ヘルバルトの學說と相容れず。自ら一家の心理學說を立て、之に基づきて教育學を説けり。初め伯林大學の講師たりしが、其學說、總長たるヘーゲルと相容れず、ヘーゲルは又己が說に異なるものを痛く排斥せしかば、ゲッティンゲン大學の講師に轉じ、ヘーゲルの死後、再び伯林大學に歸りて教授となり、死するまで講義と著述とを以て全く學者風の生活を送れり。心理、論理、宗教、哲學に涉りて著述あり。教育に關するものを「教育學及教授學」といふ。

ペネーケの最も力を盡して研究せし所は心理學にあり。氏はヘルバルトと均しく心に知情意といふが如き能力あることを拒む點に於ては一なりといへど、ヘルバルトの如く、自己の形而上學を本として心理學說を立てず、反對に形而上學其他すべてを心的科學は、心理學を基として立てざるべからずとせり。かくて氏は心を科學的に説明するに當り、全く内部の經驗即ち自覺を本とし、吾等が自身の何たるかを知るも此自覺あるが故にして、外界を観察するも亦此自覺を以て之を推すに外ならず。故に心を説くには此自覺に訴へて、心が漸々に發達する状態を調べ

ざるべからず。氏は此自覺を原基力とも言へり。此原基力が、外界の刺激を受けて發達するに四段の經過あり。第一の經過は外界の印象を内部に取り入るゝにあり。第二の經過は其感覺知覺を新らしき始めの心の力と爲すにあり。第三の經過は、それ等の心の力が動搖し混雜して其原形を失ひ新らしき形を取るにあり。第四の經過は、それら變形せる心の力が、或は背叛し、或は一致して比較判斷の如き働を爲すにありとし、而して感情は其外界の刺激と内部の自覺との一致不一致より生じ、更に欲望は記憶せられたる快樂が、之を繰り返さんとする働なりとせり。人の心、斯くの如しとせば、教育は此心理的陶冶に力を盡さざるべからず。即ち教育とは、年長者が年少者の心を知情意の極致たる眞善美の標準に引き上げんとする事業たるに外ならず。其教育の事業は、分ちて教授及び教育とす。教授は主として心を知力的方面を陶冶する事業にして、精神の内部に存する原基力を働かしむるにあり。其力を働かしむる材料となるものは、地理、天文、歴史、物理、化學、博物、數學、語學、宗教、習字、圖畫、音樂、體操なり。教育は主として其心情を陶冶する事業にして、我欲の起るを拒ぎ、善美の標準に其心情を向け、精神をして堅牢にして如何なる世

の風波にも抵抗する力を養はしむるを務めざるべからず。此爲めには宗教々育の助を借らざるべからず。

かゝる教育を施す制度につき氏は小學校、實科學校、中學校、及び大學校を設くべしとし、前二者は成るべく實地に役に立つの人を作るべく、後の二者は、深く精神的修養を爲さしむべしと言へり。

ベネーケの思想を、實際的方面より更に細かく祖述せし人を、澳大利維那の高等師範學校長たりしデッテス(一八二九—一八九一)と爲す。デッテスは、ベネーケの外、デューステルウヰヒの影響をも受け、ヘルバルト派及び次に説く社會的教育學派に反抗せり。「教育學全書」の著あり。

デッテスは、教育につき、五つの問題を掲げ來り、之を解釋するを以て教育學の務とせり。即ち第一は誰を教育するか、第二は誰が教育するか、第三は何の爲めに教育するか、第四は何を用ひて教育するか、第五は如何なる規則に従ひ、如何なる制度にて教育するか、の諸問題はなり。第一問につきては、詳に兒童の發達する状態を知るを要す。兒童の發達は之を五期に分つ。第一期は生れてより滿一歳までにして

體育を主とし、知情意の教育、みな身體に關係せしむ。第二期は二歳より三歳までにして、直覺を得しむるを以て主とす。第三期は四歳より七歳までにして、自覺、明瞭となるを以て、内部の力を働き始めしむべし。第四期は八歳より十五歳までにして、自己活動力強くなるを以て、外部の羈絆を脱せしむべし。第五期は所謂青年期にして、知識發達し、志操鞏固となり、人生の理想を作らしむべき時なり。これ兒童の發達する大體の順序なるが、之は一般の通則にして、各兒童は此通則に従ひて發達すると共に、それの個性あり、又男女に依りて、男女性相異なるを以て、能く是等を觀察し、之に應じたる教育法を施さるべからず。第二問につきては、自然社會及び運命は、皆教育者なれど、是等は意識的に教育を及ぼす者にあらず、意識的に教育を施す者は、第一は兩親、就中母親にして、體育と情育とは其擔當する所なり。第二は教師にして、人性の全體を陶冶する任に當る。従て、教師は、身體強健、精神快活、知識豊富にして、眞善美に對し、常に高尚なる熱情を有し、かねて愛國心に深き人ならざるべからず。第三問につきては、健全にして修練を経たる身體、知識に富みて、思考の能ある知力、道義純潔にして、實行の力強き意志、快活にして、美妙を味ふ心

情及び合理的の宗、教心を有するが如き人を作るを目的とすべし。従ひて教育の事業は體育、知育、美育及び宗教々育の四つとならざるべからず。第四問につきては是等の教育の目的を達するに足る者は皆之が方便として使はざるべからず。即ち第一は外界の事物、第二は人間開化の結果たる禮儀、法律、科學、技術、第三は兒童の既に有せる習慣と經驗、第四は教師の見識學問及び感化力なり。第五問につきては以上の諸材料を、兒童の發達に應じて利用せざるべからずとし、其規則は、兒童の自然の發達に従ひて教育せよ、時の開化に従ひて教育せよの二つに依るべしとし、其教育を施す制度は、第一幼稚園、第二國民學校、第三各種専門の職業學校たるべしとせり。

第九節 社會的教育學の主張者 是迄舉げたる教育學派と違ひ、殊にヘルバルト派を、個人的教育學を唱ふるものとして攻撃して一派を立てたるを、社會的教育學を唱ふる人々と爲す。其主張は、近時起り來りたる社會學的研究の結果、社會は一有機體にして、此有機體の生命は、之を組織する所の個々の協同一致に依りて高まるるといふ見解を本とし、社會を本位と見、個人は社會に役立つに依りて始めて價値

あるものにして、個人の知識德行も、其價値あるは、畢竟そが社會に役立つ上に有効なるがゆゑなり、社會の進歩發達を離れては、個人の存在は殆んど其意味を失す。然るを従來の教育學者は、個人を個人として教育することをのみ務め、此大切な人生の社會的意義を看過せり。これ手段を以て目的と謬れるもの、個人の知徳の完成は、畢竟社會の進歩を助くる手段たるに過ぎず。此故に教育の目的は、兒童に社會的意識を興ふるにあらざるべからずと。これ現今ウイلمان、ナトール、ベルグマンなどの唱ふる所なり。

社會的教育學者の意見は、大體に於ては右の如くなりといへども、其各自の立脚點に至りては多少異なれり。ウイلمانは舊教の信者にして、且つ理想説を取るを以て、自ら社會を善き方向に進歩するものと假定し、此社會の進歩に役立つやうに少年を導くを以て教育の事業とし、教育は小さき野蠻人を化して大なる開化人と爲す所の事業、言ひ換ふれば教育は少年を歴史化する所の事業なりと言へり。ナトールは、新カント學派にして、カントと均しく意志を一定の理想に従はしむるを以て教育の事業なりとし、意志の發達する段階を衝動、欲望及び合理的意志の三つ

とし、衝動の徳は適度、欲望の徳は勇、合理的意志の徳は眞なるを以て、意志を此三つの道徳に従はしめて練らざるべからず。而して個人に於ける意志の此三段階は、社會に現はれては、生産的活動、法律的活動、及び教化活動となるを以て、意志を此三個の徳を備へしむる如くに練れば、即ち能く社會に適合せしむるを得べしとせり。ヘルゲマンは、進化論を本とし、個人を社會の進化を助けしむるやうに教育すべく、而して其個人と社會との關係は有機的にして、個人といふも詰りは社會全體の影を宿せるものに過ぎずとて、我を解剖して、其社會的自我たる旨を説けり。此一派の主張は聞くべき價值あるも、もと十八世紀の個人主義に對する反動より出てたるを以て、一方に馳せたる所あるを免れず。而して此考を教育の實際に施すに至りては、未だ十分精密ならざるものあり。

第十節 ジャコトー 轉じて佛蘭西に入れば、此世紀の始めに當りジャコトー（一七七〇—一八四〇）ありて教授法を工夫し、獨逸にも其影響を及ぼせり。氏が教授法の主義とする所は、十分なる觀察と能く練られたる思考とに依りて、深く一事物を知らしむれば、依りて以て容易に他の事實を了解する秘訣を知らしむることを得と

いふにあり。これ氏が普通教授法に説ける所にして、亦自ら實際に施し、所なり。氏いふ兒童は十分深く一事物を學び、然る後之を他のものに應用せざるべからずと。かくて氏は教授の段階を、學習、復習、思考、證明の四つに分ち、此法を以て深く一國語を修めしむれば、二ヶ月もせば獨習に依りて漸々進歩する道に入らしむるを得べしとせり。氏が格言にすべてはすべての中にあり（All is in all）と云へるは、拉丁語の全體は其一頁の中に存し、音樂の全體は其一階音に含まるとの意にて、一時は此教授法大に注目せられき。

第十一節 コムト ジャコトーは單に、教授法の理論を立てし人なるが、他に自ら一種の哲學を立て、大に社會學を研究し、引きて教育の理論の上に少からぬ影響を與へたる人あり。コムト是なり。氏は千七百九十八年、モンペリーエに生れ、巴里の工藝學校に入れり。夙にサン、シモンの社會説に動かされ、此學校卒業の後暫く數學の教師となり、又所々の工藝學校を教へ、千八百四十四年に職を已めて退職し、千八百五十七年に死せり。『實驗哲學』を著はし、實驗學派の一派を起せり。氏は吾等人間の知り得るものは現象のみにして、其現象の本に本體あるか否かは

知るべからずとし、此現象を観察し彙類して其法則を得れば即ち足る。吾等は、何故を問ふを要せず、如何にを問ひて、其法則を實際に應用せざるべからずと。かゝる考より、氏は人間の發達を三段の時期に分てり。第一神學的時代、第二哲學時代、第三實驗時代是なり。第一に於ては、鬼神を置きてすべてを説明し、第二に於ては之に代ふるに絶對とか理性とかを以て説明し、第三に於ては全く現象の繼續と共存とに就き其法則を研究して之を實際に活用す。此法則を研究するもの即ち科學にして、科學に數學、天文學、物理學、化學、生物學、及び社會學あり。此中氏が最も力を盡して研究せしは社會學にして、氏は之を靜學的と動學的とに分ちて説き、社會は利己より利他、戰爭より實業に進むを説けり。氏の意見にては宗教は置かず、其代りに人類を尙び、其大發達を尊敬し、己れ一人犠牲となりて社會を進めたる人を祭るべきを言ひ、遂に女性を尙び之を崇拜すべしと言へり。人類教是なり。かゝる哲學説を有するより、氏は教育を以て人類の進化に合せしむべしとし、新教育は斷じて實驗的ならざるべからずと言了ひ、又從來の神學的哲學的教育に代ふるに、實驗的教育を以てし、以て我々の時代の精神に一致し、近世文明の要求に合せ

ざるべからずと言ひ、科學の教育は、教育の根底たるべく、而して諸科學をすべて社會に役立つやうに統一して教へざるべからずとし、現今の社會が下層の民の教育を等閑に附することを攻撃せり。此思想は英のスペンサーに至りて最も明瞭に言ひ現はさる。

第十二節　グヨール及びフイエ　佛國には、コムトと同じく、社會學的立脚地より教育を解釋しながら、しかもコムトと反對したる傾向を取れる二人の學者出てたり。グヨール一八五四—一八八七、及びフイエ一八三八—現存是なり。グヨールは詩人兼哲學者にして、フイエの養子となり、非常に有望の人なりしに、三十三歳にして死せり。其教育上の著書に、教育と遺傳とあり。氏いふ社會の終極善は教育の目的と方法とを規定する所の唯一の標準なりと。此考より、氏は教育を以て第一人類に適當にして且つ有用なる資格を個人の上に發達せしむること、第二人類に對して害とならず、而して其一個人の特別に有し居る能力を十分に發達せしむると、第三人類全體に對し、害となる所の勢力が、個人の上に現はるゝを拒ぐこと、かくの如くして漸次遺傳を改善して、人類の完全とならんことを期し、自ら社會の終極善に近

づく如くするを以て其務とせり。従ひて氏は一個人の進歩は、其社會的同情を弘め且つ深くするに依りて出來得るとし、公共の利害心同情心を有する人を作るべきことを主張し、其如き人を作るには、文學的の教育を施して、社會に對する同情心を養ふべく、文學的の教育は、科學的の教育よりは大切なりと云へり。

フイエはグヨの養父なるが、グヨが人類全體より教育を觀察したる考を轉じて之を國家に持ち來し、大に國家主義の教育を主張せり。其著を國家の立脚地より見たる教育といふ。此著一面は、佛蘭西が普魯西に破られたるに慨する所ありて著したりと言はる。氏謂へらく、人類社會の最も確實なる團體は國家にして、國家には一個人と均しくそれ自身の本能と天職とあり、國家は人道上よりそれ特有の天職を有せり。而して其國家と國家との間には生存競争行はる。其生存競争に於ては、唯に有形上の事に依りて勝敗の決するのみならず、猶且つ理想の淘汰行はる。即ち理想の高き國家は、理想の低き國家よりは勢力を占む。教育は即ち其國民に高尚なる理想と、確實なる國家的思想とを養はしめ、其國家が生存競争に打勝ちて、益々進歩し行く如く計る所の事業に外ならず。此點より國家は先づ

其國民の體力を強めんことを計らざるべからず。國民が將來大なる進歩發達を爲さんには、其心的活動の基礎として先づ體力を養はざるべからず。體育を盛にすると共に、知育德育に於て、國民の思想を眞善美の三標準に従ひて練らざるべからず。理想の低き國家は、國家と國家との競争に於て敗るゝが故に、國民の教育は常に理想を高むることを計らざるべからず。而して其眞の理想を與ふる自然科學は、常に善美の理想を與ふる學科の後に來り、又常に之と連結せざれば不可なり。單に科學的の教育のみを施す時は、人を機械的にし、高尚なる理想を與へず。科學は動もすれば人を卑俗にす。かくて其國民を作る場合に最も注意すべきは、中等教育なり。中等社會を組織すべき者に十分國家的思想を與へ置かざるべからずとの考より、氏は主として中學校の學科を論じ、中學校の學科としては、第一祖國の文學、第二近代文學の源たる拉丁文學、第三國史及び世界史、第四數學、第五理科大意、猶進んでは希臘語、近世語、應用科學、地理學、哲學、社會學、經濟學、倫理學の如きを加ふべしと論ぜり。

第十三節 コムペーレ 佛國に今一人の教育學者として擧ぐべき人あり。現今

リヨン大學の總長たるコムペーレ（一八四三年生る）是なり。教育學、心理學、教育學史等の著あり。其說折衷的にして又實際的なり。氏は教育に定義を下し、教育とは人の完全人の幸福及び社會上の運命を全うすることを得しむる目的を以て、其體力、知力及び道徳力の發達に於て自然を幫助する所の系統的努力をいふと言へり。

第十四節 スペンサー 轉じて英國に入れば、此所にも亦社會的教育學思想の唱へらるゝを見る。英國には夙にジン、ステア、ルト、ミル（一八〇六—一八七三あり）、教育を社會的立脚點より見、教育とは現代のものが後代の者に、今日まで得たる文明を維持し、更に之を進歩せしむる爲めに、後代の者を感化する事業をいふと唱へ、同時にチャールズ、ダルウヰン（一八〇九—一八八二あり）、佛のラマルと對し、生物進化論を唱へ、生物に自然淘汰、優勝劣敗の行はるゝとを唱へたり。スペンサー（一八二〇—一九〇二）は即ち是等諸氏の思想を受け、又佛のコムトの思想に感化せれて、其哲學を立て、其立脚點より教育を論ぜり。

氏は英國のダービーに生る。始め機關師として工業に身を投ぜしが、程なく之を止めて、其総合哲學の完成に一身を捧げ、三十二年間掛りて之を成就せり。其第一原理に於て、其哲學の立脚點として進化論を取るとを明にし、之を基として、生物學、心理學、社會學、倫理學を説けり。氏が是等の科學以外の者を不精密なる知識とし、斥くる點は、コムトと均しといへど、其科學以外の境を不可知と呼び、宗教の如きは此不可知の境涯に其信仰の據り所を求むるものと認め、コムトほど烈しく之を排斥せず。氏が學說の根據かく進化論にありて、其倫理學に於ては、自ら社會の進化を助くるを道徳の標準とするより、教育の目的も亦社會の進化を助くるが如き有用の人を作るべしとし、其教育論を書けり。其書題して、教育論、委しくは體育、知育、徳育論といふ。氏は先づ如何なる知識が最も價值ありやと問ひ、社會の進歩發達を助くる所の知識、即ち理科の知識是なりとし、理科を以て其目的とする如き人を作る伏線を布き、進んで教育の目的に入り、教育の目的は、人間相互の幸福を全うし、又其相互の進歩發達を促す如き完全なる生活を營ましむる準備を與ふるにありとし、此點より拉丁語、希臘語の如き古文を虚飾の具として退ぞけ、人間の完全なる生活を五種に分ち、第一自己を保存する活動、第二自己の生計を立つる活動、第三一

家を整理し子孫の繁榮を計る活動第四政治社會に處する活動第五心身を慰樂する活動を此中に含むとし、此五個の活動を附與せば、即ち能く一身を支へ、家族と國家との務に當り、傍美術を解して愉快なる生活を營ましむることを得べしとし、是等知識の收得、道徳の訓練を、皆理科の教ふる所として論ぜり。其教育は社會有用の人を作るを目的とすべしとし、其教育の材料として一切古文を用ひず、一に理科を以て爲さんとする所、全く實利派を代表せるものと見るべし。氏思想を、本國にては、ベイン、一八一八、一八一九、三承けて教育學を著はし、米國にては、ページ、ジ、ホ、ト等之を敷衍して、各教育上の著述を爲し、是等の思想一時大に我教育界を動かせり。

十九世紀の教育 其三

第十五節 獨逸の教育制度 以上歐米に於ける教育學說の發達して新教育を起し、状態を述べたるが、茲に轉じて其教育制度が如何に發達して現今の状態を爲すに至りたるかを述べべし。

獨逸は既に十七世紀より教育制度を確立せんとし、十八世紀には其基礎成り、十八世紀に普魯西王フリードリッヒ、ウィルヘルム一世が起したる高等教務院は文部省の萌芽を爲し、其後の諸王相次ぎて教育に心を傾けしが、十九世紀の始めに至り、千八百六年に普魯西が、ナポレオン一世より蹂躪せられ、屈辱の平和を請はざるべらざるに至りし一大打撃は、益々普魯西をして教育制度確立の必要を感ぜしめ、新に伯林大學を起し、普通教育にはベスタロッチの教育法を採用して之が振興を計れり。かくて普魯西は率先して教育を經營したる結果、千八百七十年より七十一年に涉れる普佛戰爭には、佛蘭西をして巴里城下の盟を爲さしめたり。此國運動興の機に乗じ、普魯西は從來の獨逸聯邦を一帝國と爲し、而して普魯西王は同時に獨

逸皇帝の冠を戴くこととなり、萬事他聯邦の模範となれり。故に茲に普魯西の教育制度を擧ぐれば、自ら獨逸全般を推すことを得べし。

普魯西には文部大臣ありて、全王國の學事を總轄す。文部大臣は國會に對し學校の利害を代表し、學事の要求に耳傾け、學校の豫算を組み、一般の教育の行政事務長官なり。其下に州學務局、縣學務局、郡學務局、區學務局屬す。

普魯西には十三州ありて、一州に一學務局あり。其學務局長は其州の教育最高の行政官にして、之に學校視學官と屬官と屬す。其務は其州の學校經濟を整理し、高等なる學校に用ひらるゝ教科書を選択し、又師範學校の教師を選任し、毎年一回文部大臣に報告す。此十三州更に三十六の縣に分れ、一縣に一學務局あり。其務は州學務局が高等教育の事務に關係するに對し、普通教育に關し、國民學校の教師を選任し、其教科書を選択す。縣更に郡に分れ、一郡に又學務局あり。其局長は學校視學なり。此視學は終身官にして、全力を其郡の教育に盡す。其務は國民學校の校舍を建築し、教師の俸給額を定め、學校經濟を監督し、又強迫就學法を監督するにあり。郡更に區に分れ、區學務局あり。其務は不就學兒童の就學を督促し、校舍校

具を修繕し、又教師の任命に容喙す。健全なる各兒童は、六歳より十四歳まで學に就くべきことを強迫的に規定せらる。若し之を守らざる父兄あらば罰金を課せられ、或は禁錮の刑に處せらる。實際貧にして學に就かしむること能はざる場合には感化院に送らる。従ひて普通教育は能く行き渡り、不就學者は一萬分の二に過ぎず。而して徴兵の百分の九十九半は、優に讀み書きを爲すことを得。

學校の種類を言へば、先づ國民學校あり。村落にては男女兒混同なれど、都府にては分たる。時間は午前に於ては八時より十一時まで、午後には水曜と土曜とは休みにして、他は二時より四時までなり。學科は宗教、國語、數學、地理、歴史、理科、唱歌及び體操とし、女子には手藝を課す。一年の授業時數大抵四十二週なり。大體は無謝儀の制を取り居れども、未だ全く無謝儀に至らず。此國民學校は中學校と聯絡なく、下民の子弟の國民學校を卒りて高等教育を受くる唯一の進み路は、師範學校に入るにあるのみ。國民學校を卒りたるものゝ爲めに、實業補修學校、夜學校、日曜學校の如き制度備はれり。

中學校には二種類あり。文科中學校と實科中學校と是なり。他に是等を折衷せ

る。若しくは是等の多少變形せる幾多の中學あれど、大體は先づ此二種類なり。文科中學校は保守的にして、拉丁語希臘語の如き古典に重きを置き、人文派の精神を承け、而して大學の神學科、醫學科、法學科、哲學科に入る豫備たり。實科中學校は、進歩的にして、近世語と科學とに重きを置き、實利派の精神を代表し、理科大學、工科專門學校に入る準備を爲す。此二種の中學とも、小學校との連絡なきを以て、高等教育を受け、一の専門を以て世に立たんとする者は、九歳晚くも十歳より此何れかに入らざるべからず。されば大學に進まんとする者は初めより國民學校に入らず、九歳にして此何れかに入るか、又は小學の最初の三年若しくは四年を終りて直ちに之に入らざるべからず。大學に進むには此二個の中學校を過ぐる外には道なく、而して大學を終るにあらざれば一の専門を以て世に立つこと能はざるが故なり。

學校制度の頂上は大學なり。大學は多くは神學科、醫學科、法學科、哲學科、理科を含む、年限は三年若しくは四年なり。獨逸大學は、古より學問の自由を尙ぶを以て稱せらる。教授は學問上よりは如何なる解釋を與ふるも咎められず。學生は亦學

問を自由に研究し、其學科と教授とを自由に選び、講義を聞き、試験を受くるも全く其自由に任せらる。其學生指導の方針、單に學生をして學ばしむるより寧ろ科學的に思考する習慣を付けしめ、獨立の思考力を養はしめんと力むるにあり。猶其自由なる一例は、獨逸にては勝手に一大學より他大學に轉ずることを許さるゝこと是なり。學生の多くは、少くも二校、多きは七八校に轉ずるものあり。これ學生をして獨逸全國の状態に通ぜしめ、又名高き諸教授の教育を受けしむる上に大なる益あり。

國民學校の教師を養成する爲めには、師範學校の設あり。師範學校に入る者は、其國民學校にある間、教師に適すと學校視學より認めらるれば、父母の承諾を得たる上、國民學校を了るや、三箇年間其豫備校に送らる。かくて十七歳にして師範學校に入りて、三年間在學す。其最終の三學年は殆んど實習に費さる。師範學校各級の生徒定員は三十人より三十六人にして、一校の定員約百名とす。師範學校を卒業すれば三ヶ年間准教員として務め、結果宜しければ、國家の試験を受けて正教員となり、不適任か不道德の故にあらざれば其位置を動かさるゝことなし。俸給は

高からざれど、住宅は無料にて貸し渡され、年功加俸、退隠料の規定も備はれり。師範學校中學校の教師は、大學附屬の教員練習所を出てたる者之に當る。獨逸の教師は献身的にして一生涯教育を以て樂みとす。普澳戰爭、普佛戰爭に勝ちたる時、モルトケ將軍が此戰に勝ちたるは學校教師の力なりと言ひしは、蓋し此精神に答へたるなり。

現今獨逸全國の小學校數は、一昨年にて五万九千三百四十八校、中學校數は七百三十八校、師範學校百八十五校、大學二十一校、外に實業學校あり。

第十六節 佛國の教育制度 佛國の學制は十八世紀の所に言ひし如く、千七百八十九年の大革命より漸々整頓し來れり。此大革命は、一部は自由平等博愛の精神の實現せられたるものなるを以て、自ら其人民の知識を開き、以て共和政府の基礎を固うせんと企つるに至り、千七百九十三年に、其新政府は佛蘭西全國を通じて小學校を建つることを命令せしのみならず、同時に就學を強迫的にせり。

ナポレオン帝位に即くに及び、教育を等閑に附せず、佛蘭西大學寮と呼ぶ一大中央機關に佛蘭西全國の教育力を統一する方針を取り、之に一人の長を置き、之を初等

中等高等の三部に分ち、初等部は小學教育、中等部はリセー及び專門校、高等部は文科、醫科、法科、及び神學科の分科大學事務を扱ふ如くせり。

ナポレオンの死後、又舊の王室起るや、ナポレオンの學制を改めざりしとは言へ教育は概して衰頹し、僧侶は之に乗じて直ちに教育の權を握り、大學寮の長にも僧侶を戴くに至り、大に勤王心を起さんことを計れり。千八百三十年に又革命ありてルイ、フィリップ王位に即くや、ナポレオンの制度を改め、新に文部省を置き、進歩的の考を以て教育を經營し、僧侶の握れる教育の權を取りて之を國家の手に收め、各州に學校を建つべきことを命令し、善良なる教師を作らんが爲め、大に師範學校の設立を獎勵せり。校舍は建てられ、新教授法は研究せられ、教育上の考は一般人の間に高まり來れり。キゾー(一七八七—一八七四)が文部大臣となりしも、此時なり。

其後間もなく第二の共和政府成り、千八百五十年に學制を改め、高等教育會議を設け、文部大臣を助くる制度を立て、佛蘭西全國を十七大學區に分ちて、初等中等高等の教育を均しく振ひ起す方針を取り、千八百七十年より七十一年にかけての大敗北に依り、一層教育を盛にすべきことを感じ、非常なる熱心を以て、學制の擴張を計

り千八百八十六年以後は、公立教育の事務を全く僧侶の手より離し、教師には俗人を當らしむることとなり、大に國民教育の振興に盡力せり。

現今佛國には獨逸と均しく文部大臣ありて全國の學事を總轄す。文部省は初等中等高等の三學務局に分れ、各々局長あり。外に視學長官ありて文部大臣に屬す。文部大臣を助くるに高等教育會議あり、五十八人の識見ある議員より成る。

佛蘭西全國は十七大學區に分れ、各大學區に一個の教育局ありて、之に其區内の高等教育に關する監督委任せらる。其十七大學區更に九十の中學區に分れ、各中學區に一の教育會議と教育局とあり。教育局の長は其中學區の視學官なり。各中學區には、一二を除くの外、男女一個宛の師範學校あり。九十の中學區更に小學區に分れ、各小學區に又一の教育會議と教育局とあり。小學區更に學區に分れ、各學區に又教育局ありて直接に個々の學校を監督す。斯くの如く佛國の學制は、高さより低さに至るまで、一貫せる行政系統ありて、圓滿に其事務を行ふ。人あり佛國の文部大臣に向ひ、其學事を問ふ場合に、文部大臣は時計を見れば、今全國の中學校の何年級には何を教へ、小學校の何年級には何を教へつゝあるかを答ふることを

得るといふ位に、教授細目の如きも綿密に規定せらる。

學校制度の基礎として保育院あり。保育院は朝より夕に至るまで、二歳より六歳までの小供を預り、其親を職業に従事せしむる組織にして、育兒院と幼稚園とを結合せるものなり。保育院と並びて幼稚園あり。幼稚園は四歳より六歳までの兒童に小學教育の豫備を爲さしむる所にして、費用はすべて國庫よりし、學校制度の一部分なり。小學校は六歳より十三歳までの者を強迫的に入らしむ。小學校は初等と高等との二つに分る。其強迫的に受けしむるは初等小學校の方なり。男女生徒は人口五百以下の所を除きては各別にせらる。生徒は一様の制服を着け、一週五回登校す。木曜は休日なり。初等小學校には、全然宗教の教授なく、科目は修身及び國民教科、讀書及び習字、數學、歴史及び地理、理科、圖畫、唱歌、手工、體操なり。高等小學校は二部に分る。一部は初等小學校の補習を爲し、又實際生活に必須なる科目を學はんとするものを入らしめ、二部は高等教育に進まんとする者の豫備を爲さしむ。一部は年限に規定なく、二部は五年を要し、十八歳にして終らしめ、各種の高等實業學校又は師範學校に入らしむ。

中學校は之をリセーと言ひ、滿九歳より入學を許し、十個年にて卒業せしむ。此間を初等部三學級、中等部三學級、高等部四學級に立つ。此リセーは之を文科中學校とも言ふべく、之に對して近世中學あり。之は實科中學校とも言ふべし。其精神と組織とに於て、恰も獨逸の文科中學校と實科中學校とに似たり。此外市の力にて立つる市立中學あり。理科と近世語とに重きを置き、近世中學と似たるものなるが、其設立近世中學の國立なるに對し、之は市立にして殊に實際生活を理解せしむることを主とする選ひあり。

教育制度の頂上は即ち大學にして、神學科、法科、醫科、文科及び理科あり。獨逸の如く、是等の五分科一大學に纏めらるゝにあらず。一分科獨立するもあり、其講義は一部は公開し、一部は學生のみに聽かしむ。

教師の養成につきては師範學校あり。之に尋常と高等との別あり。尋常師範校は各中學區に男女一校宛置かれ、高等師範校は男子に一校、女子に一校あり。尋常師範校に入る者は少くも十六歳にして十年以上教職に従事することを誓ひたる者ならざるべからず。學年は三ヶ年にして卒業後暫く准教員として奉職し、十年

の中に國家の試験を受けて正教員となる。高等師範校に入る者は十八歳より二十五歳までのものにして、三年間學ばしめ、卒業後視學官か中學程度の學校教師に任命せらる。

學校數は一昨年の調査に依れば、幼稚園六千七校、小學校數八万五千二百三十二校、リセー百四十一校、市立中學二百二十八校、大學は神學科二校、法科十三校、醫科七校、理科十五校、文科十五校なり。

第十七節 英國の教育制度 英國は保守的の國にして、他の歐洲諸國の如く教育制度の完備に注意せず。其普通教育制度を立てざるべからざるに氣付きしは千八百七十年以後の事なり。それ迄は一般人の教育は一個人の事業又は宗教上の事業に任せ、富みたる者の子弟又は貴族の子弟は、多くイートン、ハーロー、ラグビー、ウエストミンスターの如き公立學校に入りて學べり。是等の公立學校は十六世紀頃より起り、佛のリセー獨の文科中學校と相似たるものにて、眞正の紳士を作るを目的とし、必ずしも大學に入る豫備を爲さしむるを目的とせず。之を卒りたる者が大學に入るには入學試験を受けざるべからず。英國の大學は亦保守的にして

舊風を維持し、人物養成の趣旨を失はず、これ獨逸の大學が學術の自由討究に重きを置くに對して異彩ある所なり。其中にて最も名高きをオックスフォード及びケムブリッジの二つとなす。オックスフォードは二十二の専門校、ケムブリッジは十七の専門校より成れり。各専門校には各々長ありて自家固有の組織を爲せるも、總長に依りて一大學の下に纏めらる。學生は是等の専門校の何れかに屬し、其寄宿舎に入り、其所屬の教授の指導を受け、三年修業の後、試験を受けて學位を取る。

十九世紀までは英國の教育は以上の如き中學大學の設備あるのみにて、一般人の教育は僅に宗教家の慈善事業に一任したりしが、ロバート・レイクスが十八世紀の末より十九世紀の始めにかけ、日曜學校を起し、より大に普通教育に對する一般の注意を喚起し、繼いでアンドリュー・ベル及びジョセフ・ランカスターの二人ありて各々同時に年長生を助手に使ひて教授する所の互助教授法 (Monitorial System) を發明し、此法を以て治く一般人を教育せり。ベルは千七百五十三年蘇格蘭土のセント・アンドリュースに生れ、千七百八十七年印度に行き、英國兵の子供を教育する學校の視學官となれり。此時適當の教師を得る道なかりしより、印度に行はれたる進

歩せる生徒を教師に使ふ法を取りて之を實施したるに、結果案外に良好なりき。乃ち英國に歸るに及び、書を著はして此方法を世間に發表し、千八百七年始めて龍動に此法を用ふる學校を設立せり。然るに幸に之も亦成功し、殊に僧侶の賛成を得、國民協會は「英國教會」と聯合し、英國全體に此學校を建つることとなり、ベルの指導の下に六年ならざるに一千の學校開かれ、二万の見童教育せらるゝに至れり。ベルと並びランカスター(一七七八—一八三八)あり。千七百九十八年に龍動に學校を建て、經費節減の必要より自ら互助教授法を發明して成功し、遂に皇族の參觀をも受くるに至り、内外學校協會大に之を賛成し、ランカスター式の學校を廣ぐることに熱心し、ベルの學校と競争を試むるに至り、爲めに大に英國の普通教育を振興せり。千八百十八年英國政府は漸やく教育に心を注ぎ始め、千八百三十四年には年々教育費を支出することとなり、千八百五十七年龍動に開かれたる教育會議より、一層普通教育に注意し來り、千八百七十年遂に教育會を出し、五歳より十四歳までの者は必ず學に就かしむることとなり、更に千九百二年教育會を改正して普通教育を政府の手に營む道を開けり。

現今英國の教育は教育局の手に纏められ、教育局長は内閣員の一人に列す。教育局の設けられしは、千九百年なり。

普通教育に従事する教師の養成につきては、年齢十八歳以上の教員志望者を二年間教師専門校に學ばしめて之を教師とする方針を取れり。

第十八節 米國の教育制度 米國は新開國にして、獨立自由を尊ぶ國柄なるが故、教育制度の如きは各州の隨意に放任し、全國に通ぜる一定の制度はあらず。米國の創立者ワシントンの如きは國民統一の精神より、熱心に一の國立大學を立てざるべからざる旨を繰り返したるも、遂に行はれず。合衆國の中にて夙に教育に心を注ぎたるは、マサチューセツ州にして、此所は即ち英國より渡り來りしピューリタン教徒の根據地なりき。今のハーヴァード大學の起りと見るべきハーヴァード専門校は千六百三十六年に起れり。普通教育に意を注ぎ始めたるも、亦此州にして之には其教育局長たりしホレース・マン（一七九六—一八五九）與りて大に力ありたり。氏は州内にて四歳より十三歳に至る子女を有しながら、之を學校に出さざる父母又は保護者には罰金を課すべしと定め、大に其普通教育を振ひ起し、より、他諸州

も亦之に倣ふに至れり。

かゝる歴史にて合衆國には文部省なく、唯千八百六十七年に設けられたる國立教育局ありて、合衆國諸州に於ける教育の現状及び進歩を示す統計と事實とを集め、又十分なる學校制度の創設維持につき、合衆國の人々を助くる如き外國の學校制度、管理法、教授法等に關する報告を編纂し發行するのみ。現今の局長はヘーゲル學派なるハリスなり。合衆國政府は教育費を支出する外、各州の教育に對しては、至も干渉せず。

各州には教育局あり。此局と公立教育視學官と共同して其州の教育事務を取る。市町村の事務に至りては、地方視學と地方學務委員と之に當る。

學校の種類は第一小學校、第二中學校、第三各種専門校及び大學の三つとす。小學校は大抵六歳より就學し、八學年にして終るが多し。此間を尋常、高等の二つに分ち、其下に幼稚園を附屬せしむるもあり。中學校を之を高等學校とも呼び、一般の修養を與ふると共に、又職業生活の豫備を爲さしむ。年限は大抵四年なり。専門校は其性質と學科課程とに於て一致せず、主として専門の職業教育を與ふ。大學

には通例専門學校を終りたるものを進ましむる規定にして、英國の大學と獨逸の大學とを折衷せる如き組織なり。小學及び中學は無謝儀にして、各種の學校とも男女混同教育なり。

教師養成の學校としては、小學校の教師は各州の師範校にて養成す。年限は三年なり。中學校、師範學校の教師は大學の教育部にて養成し、我國若しくは佛國の如く高等師範學校の設なし。合衆國の普通教育に従事する教師凡そ四十万人の中、婦人が其三分の二を占むるは他國になき所なり。

第十九節 東方諸國への影響 以上の如くして發達せる歐米の教育は此世紀に於て、東方諸國に其影響を及ぼせり。即ち印度は英領となりて英國の教育制度を布かれ、我國は王政維新以來歐米教育の精神と制度とを參酌して今日の教育を爲せり。而して支那の教育も亦歐米の教育思想に依て漸次改善せられつゝあり。

第二十節 批評 第一に此世紀の教育を目的の上より見るに、此世紀は國家と國家との競争激烈にして、大に國家統一の必要を感じ來りたるに加へ、一般に歴史的な研究を尙び又生物學の研究を社會に應用し來りて社會をも一の生物と見たる時

代なりしを以て、十八世紀の個人主義を取りしとは反對に出で、教育上には國家主義を取れり。所謂個人主義なる者は、勢ひ利己的となり、共同生活の秩序を破り國家社會の存立を危くすれば也。斯く此世紀の教育は個人主義を排斥すると共に又世界主義をも取らず。世界主義は國家の境域を脱して世界的市民を作り、歴史上の感情を打破して、人類通有の思想を起さしめんとする者、固より自然の人情に背けり。乃ち今や國家民族を尊崇し、國家のあらゆる階級の兒童を教育して之に其開化を傳へ、以て益々其國家的生活を盛んならしめんとする方針を取れり。而して斯く國家的生活を盛ならしむるには、其國家的生活の基礎たる實業經濟を發達せしむべきを以て、其國民の養成につきては從來の如く宗教文學を以てするよりも寧ろ實科を以てせんとするに至り、十六世紀より漸々起り來りたる實科的の教育を益々重んずるに至れり。即ち此世紀の教育を評して社會的方面より見れば國家主義を取れりと言ふべく、人間の性質其者より見れば前世紀と同じく知的の發達を爲し、十分に實科的知識を有する人を作らんとするに至れりと見るべきなり。

第二に之を其如き人を作る方法の上より言へば、先づ教授につきて見れば、之を心理學、理學の法則に合せて教授すべき事となり、殊にヘルバルト派とデイーステルウツヒトに至り、其方法最も精密となれり。而して其教授する材料につきて言へば、前世紀を承けて質料的の材料益々重んぜられ、小中學の如き普通教育を施す所にありてすら、理科はもとより農工商に關する實業上の知識を與ふるに至れり。次に訓練につきて見れば、兒童に社會心、公共心を與ふべき事となり、全體の利害の爲めには自己の利害をも從屬せしむべき見解より、學校生活を其社會道德を實習する場所と見、學校の秩序の守るべきことなどより、自ら此公共心を養はんとする方法を取るに至れり。唯概して言ふ時は訓練の方法は、教授の方法の精密とされるに及ばざる觀あり。

第三に之を學說の上より見れば、此世紀は十八世紀の個人的教育等に對し、社會的教育學を主張したる時代なり。此世紀に出でたる教育學說に、ベスタロツチを繼げるもの、自家の哲學、自家の心理學を本とするもの、幾派ありといへど、其個人個人の知力、道德力及び體力を練りて、之を國家社會に役立つ人に教育せんとするに

至りては殆んど異論なきを見る。個人的教育學と攻撃せらるゝヘルバルト派の教育學も、決して社會に活動する人を作ることを看過せるにあらず、ヘーゲル一派、シユライエルマツヘル、コムト、ズベンサーの主張に至りては、殊に其然るを見る。而して教育學が全く科學的に研究せらるゝ基礎を得たるも此時代なり。教育學は此時代に於て倫理學、心理學、論理學、社會學などの基礎學の助を借りて、其科學的根據を固めんとするに至れり。教授の理論の如きは最も深く此世紀に研究せられたる所にして、之にはヘルバルト派の教育學の研究大に其進歩を促せり。

第四に之を制度の上より見るに、此世紀は國家が教育を經營して、國家的生活を盛んならしめんとするに至りたる時なるを以て、其國家が教育行政を施す中央機關を設け、之に大中小の諸學校とあらゆる専門學校とを統一すべき事となり、教育制度は此世紀に入りて全く其體裁を爲し來れり。歐米諸國の中、英國と米國との如きは教育局を置けるに止まりて、未だ文部省を設けずといへど、早晚之を設くるに至るべし。女子教育の制度の次第に整ひ來りたるも、此世紀にして、女教師が隱然教育上の勢力となりたるも亦此世紀なり。幼稚園も此世紀に於て教育制度に

新組織を加ふる事となれり。要するに制度の上より見れば、此世紀は國家が男女兩性に對し、各種の教育制度を立て、之を統一せんとするに至りたる時なりと見るべし。

歸 結

第十章 教育史の概見

以上章を追ひ節を重ね、歐米今日の教育が如何にして成立せしかを明にする爲め、希臘羅馬の昔に溯り、次第に年代を追ひて其變遷發達を尋ね、以て今日に及べり。歐米今日の教育は實に此二千三四百年間の遺産にして、此遺産を作らんが爲め、幾多の哲人、賢人、國君、施政者は、其熱血を注ぎて盡力せり。吾等は今日の教育に對し、須らく先人の功績を追懐して尊敬の念を捧げ、嘗に之を繼承して傷つけざるのみならず、又未來にかけて益々其豊富となり高尚となり行かんことを計らざるべからず。今日の教育は猶進歩發達の途中にあり、今後十分に發達すべき運命を有す。乃ち吾等は正に此遺産のよき部分は益々之を伸ばし、惡しき部分は之を補ひて、其十分なる發達を遂ぐる事に盡力せざるべからず。茲に此遺産に對する歴史上の概見を爲し、之に批評を加へて、其今後に發達すべき方針を一瞥すべし。第一に之れを今日の教育の目的とする所より言はんには、社會的に成るべく多く活

動し其自己を實現すると共に、社會の進歩を助くるが如き人を作るにあり。これ必ずしも今日のみならず、近世全體の教育理想なり。而して其社會的に活動する人格の内容を問へば、知力其主たる者たるを失はず。希臘人の教育理想は美なる人を作るにありて、情に重きを過ぎ、羅馬人は實際的の市民を作るにありて、意に重きを置き、中世紀の人は宗教的信仰を有し、道德的實行の力の強き人を作るを目的として、情と意との教育に重きを置けり。之に對し、現今廣く言へば、近世人の教育理想は社會的に活動する人を作るにありて、知を練ることに重きを置けり。從ひて其教ふる學科も、希臘人は音樂の如き美的感情を練る學科を重んじ、羅馬人は法律雄辯の如き實際的の學科を重んじ、中世紀人は宗教を中心とし、近世人は自然科學を重んぜり。之を要するに、希臘人は文學的教育を尙び、羅馬人は政治的教育、中世紀人は宗教的教育を尙び、而して近世人は科學的教育を重んぜりといふことを得べし。文學的教育の目指す所は美なり、政治的及び宗教的教育の目指す所は善なり、科學的教育の目的とする所は眞なり。乃ち現今の教育は眞を追求するに急にして、美と善との教育之に添はざる觀あり。これ現今歐米に於て、動もすれば、今

の人は高き道念と堅固なる道德的品性とを有せず、而して又高尚なる情操の修養を缺けりとの批難ある所以なり。尤も現今の教育が科學的教育に傾けりとは言へ、歴史的發達の結果として、希臘の文學的教育、羅馬の政治的教育、中世紀の宗教的教育を含めるが故、今日の人を作るに希臘羅馬の古典と基督教とをも以てし、善の教育、善の教育も爲しつゝありとは言へ、是等の教育が、猶科學的教育と融合せず、眞を主とする科學的教育と美を主とする文學的教育とは未だ十分に一致せず、而して又善を主とする宗教的教育とも合體せず。現今の歐米の兒童の意識には此眞善美三つの教育が統一せられず、バラバラに存立し、そが渾然たる一體となりて、其一人格を完成すること能はざる状態にあり。眞善美は結局一人格に結ばれて、茲に始めて完全なる人格を爲すこととなるべし。この故に今後の教育の理想は此三つを如何に一人格に渾然たる一體として備へしむべきかといふことに向行かざるべからず。而して又現今の教育を社會的方面より見れば、國家主義を取れり。此國家主義を取れることも、亦近世全體の傾向なり。但し此國家主義は希臘羅馬にて取りし國家主義と異なれり。希臘の國家主義はアゼンスとスバルタと

にありて多少異なりしも、共に都府的國家にして、教育は其都府的國家を盛んならしむる如き人を作るにありき。羅馬の國家は希臘よりは統一せるものとなつたるも其國家主義は一方には個人の自由を抑へ、他方には世界共通の人類の情誼を認めざりき。然るに基督教起るに至り、國家の上に世界を認め、人類共通の情誼を尊ぶべきことを唱へ、之がキリストン人を感化するに至り、中世紀に於ては世界主義の教育主義を取りたりしか、近世に至りては再びの國家主義に歸り、一に其國家を盛んならしむるが如き國民を作らんとせるが、此國家主義は古代に於けるが如く個人の權利を抑へず、而して他方には、世界全體の發達を希ひ、人類共通の情誼を認めざるべからざるも、現今は猶此國家主義を個人主義及び世界主義との調和が十分に成り立ち居らざる傾あり。

第二に教育の方法につきて見れば、今日の教育法は慥に一大進歩を爲せり。教授に於て十六七世紀までは、各種の知識を注入し、只だ管記憶力のみを練りしものが、今は兒童の活動力を正しく指導し、其心を開發するに至りたる如き、訓練に於て兒童が従順ならざる時は直ちに鞭を以て之に臨み、積極的に善良なる動機を養成す

る道を忘れたるものが、今は成るべく兒童の志氣を鼓舞し、自ら進んで國家社會に盡す公共心を養はしめんとするに至りたる如きは、明なる進歩を見るべし。しかも其教授する事柄は徒らに複雑にして其選擇十分ならず、其間の統一も缺け居る憾みあり。其訓練は徒らに知らしめ鼓舞するのみにして、十分なる習練を爲さしむるに至らず、而して又教授と訓練との釣合より言へば、教育學に於て教授法の研究進みて訓練法の研究進まざる結果、知巧徒らに進みて品性之に添はざる人を作る傾あり。衛生の方法管理の方法も大に改まりたるも、前途改善すべきもの少しとせず。

第三に學說の上より見れば、今日の教育學は倫理學、心理學、論理學、生理學、社會學、史學等の助けを假りて、科學的に建設することゝなれり。希臘にありては、政治學或は倫理學の附屬として哲學的に論究せられ、中世紀にありては宗教論の一部を占め、近世の始めにありては、論文若しくは小説の形にて攻究せられ、十八世紀に及びても、ルソーのエミールの如き小説體にて書かれ、科學的の基礎を缺きたりしが、十九世紀の始めに、ヘルバルトが倫理心理の二學を基として教育學を研究し、科學

的教育學を立て、之れと同時に、あらゆる科學の研究が進歩せしより、教育の目的と方法とに就き、之を科學的に研究して其普通の法則を求めんとするに至れり。而して其學說の立て方たる、始めは倫理心理の二學を基とし、唯一個人を如何に圓滿に教育することを得べきかと研究したりしが、十九世紀の後半、社會學的研究盛んになりて、社會的倫理學、國民心理學の如きも發達するに至り、一個人を社會の民として如何に教育すべきかと研究するに至り、從來の教育學を個人的教育學と呼びて之を攻撃するに至れり。個人的教育學にも足らざる所あらむ。即ち個人を社會の進歩と關係せしめて見ず、其個人は個人とは言ひながら、一の社會的個人たるを知らざりしが如きは、其缺點と言ふべきも、社會的教育も未だ十分なるものとは言ふことを得ず。社會的教育學にては人に社會的意識を與へざるべからずといふも、如何なる者をば社會的意識と言ふか、社會の究竟目的は如何と問へば、説く人に依りて一致せず、而して其社會的意識を與ふるには、先づ個人々々の生理的、心理的、倫理的、社會的の基礎を明にせざるべからざるに、社會的教育學は、此基礎の研究に精密ならず、一個人の心身性質を詳に解し、其個人と社會との關係を明にし、如何

に之を鍛練せば、社會に適合し、進んで之を改善せしむることを得べきかを科學的に規定し、説明せる教育學は、今日未だ見ざる所なり。之に加ふるに、今日の教育學の研究に於ては、知力の發達が割合に能く明にせられ、從て教授の理論の立て易きに依るといへど、之と並びて情と意との心理を明にし、之より推して十分訓練の理論を確立するに至らざるべからず。而して又今日の教育學は、小學教育を研究の眼目とし、其以前の家庭教育及び其以後の中學校教育につきては、説明甚だ疎なる缺點あり。

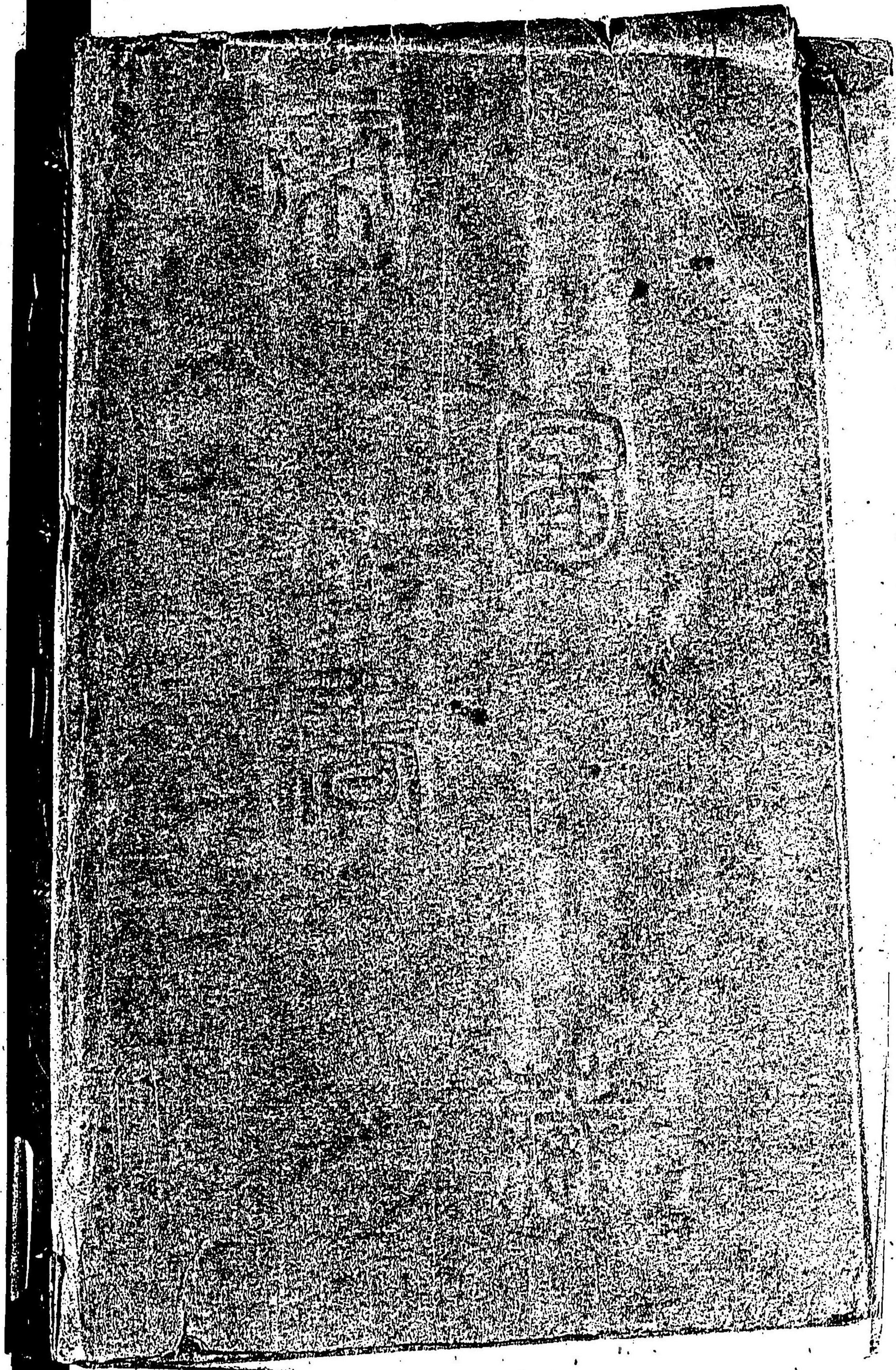
第四に制度の上より見れば、希臘にては國家が教育を經營したるも、羅馬は殆んど之れを私人の業に任せ、中世紀より近世の始めまでは、宗教家此事業を經營し來りしが、十八九世紀に至り、開明諸國は均しく教育を經營し、宗教家の握れる教育の權を國家の手に取り上げて、全國の教育を統一する爲め、文部省といふが如き中央の教育行政機關を設くるに至りたるも、現今文部省の權能は未だ十分に統一の實を擧ぐることはせず。一面宗教家の對抗を受け、他面近時發達せる實業教育の系統を纏むるに至らず。而して各人の才能をそれくの方面に發達せしむべき各種

専門學校の設備も十分ならず。之を男女兩性の上より見れば、女子教育制度は未だ男子と十分對立するに至らず。更に之を社會の階級より見れば、教育の恵は上流中流に及びて猶下流に及ばず。貧民の子弟の如きは、依然として無學の狀態にあり。更に又現今文部省の權能が學校教育に於てすら十分なる能はざるを以て、博く文學、美術、理科、工藝の力を利用して、社會一般の人を教育するが如き方面に注意する餘裕なく、又教育の根底とも言ふべき家庭教育に對する注意も足らず。文部省は今後須らく、すべて風教の權を握り、學校教育のみならず、博く社會教育、家庭教育にも其力を及ぼすに至らざるべからず。

西洋教育史 畢

62

398



310502-000-0

62-398

西洋教育史

中島 半次郎 述

62

398

早稲田大學三十八年度
教育科第二學年講義錄

西洋教育史

中島半次郎

家を整理し子孫の繁榮を計る活動、第四政治社會に處する活動、第五心身を慰樂する活動を此中に含むとし、此五個の活動を附與せば、即ち能く一身を支へ、家族と國家との務に當り、傍美術を解して愉快なる生活を營ましむることを得べしとし、是等知識の收得、道德の訓練を、皆理科の教ふる所として論ぜり。其教育は社會有用の人を作るを目的とすべしとし、其教育の材料として一切古文を用ひず、一に理科を以て爲さんとする所、全く實利派を代表せるものと見るべし。

氏の思想を、本國にては、ベインズ一八一八—一九〇三承けて、教育學を著はし、米國にては、ページ、ジ・ホット等之を敷衍して、各教育上の著述を爲し、是等の思想一時大に我教育界を動かせり。

十八世紀の教育 其三

以上歐米に於ける教育學說の發達して、新教育を起すに至るが如きことを述べし。以上歐米に於ける教育學說の發達して、新教育を起すに至るが如きことを述べし。

十八世紀の普魯西王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世が起したる高等敎務院は、文部省の前身を爲し、其後の諸王相次第で教育に心を傾けしが、十九世紀の始めに至り、千八百六十年に普魯西がナポレオン一世より降参せられ、屈辱の平和を請はざるべからざるに至り、一大打撃は益々普魯西をして教育制度確立の必要を感ぜしめ、新に柏林大學を起し、普通教育には、ペスタロッチの教育法を採用して、之が振興を計れり。千八百七十二年に普魯西は、普魯西の教育を組織したる結果、千八百七十年より七十二年に於ける普魯西の教育は、普魯西の盟を爲さしめたり。此國運物典